

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第103集

平田前田遺跡

平成8年度一級河川境川治水特別対策工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第103集

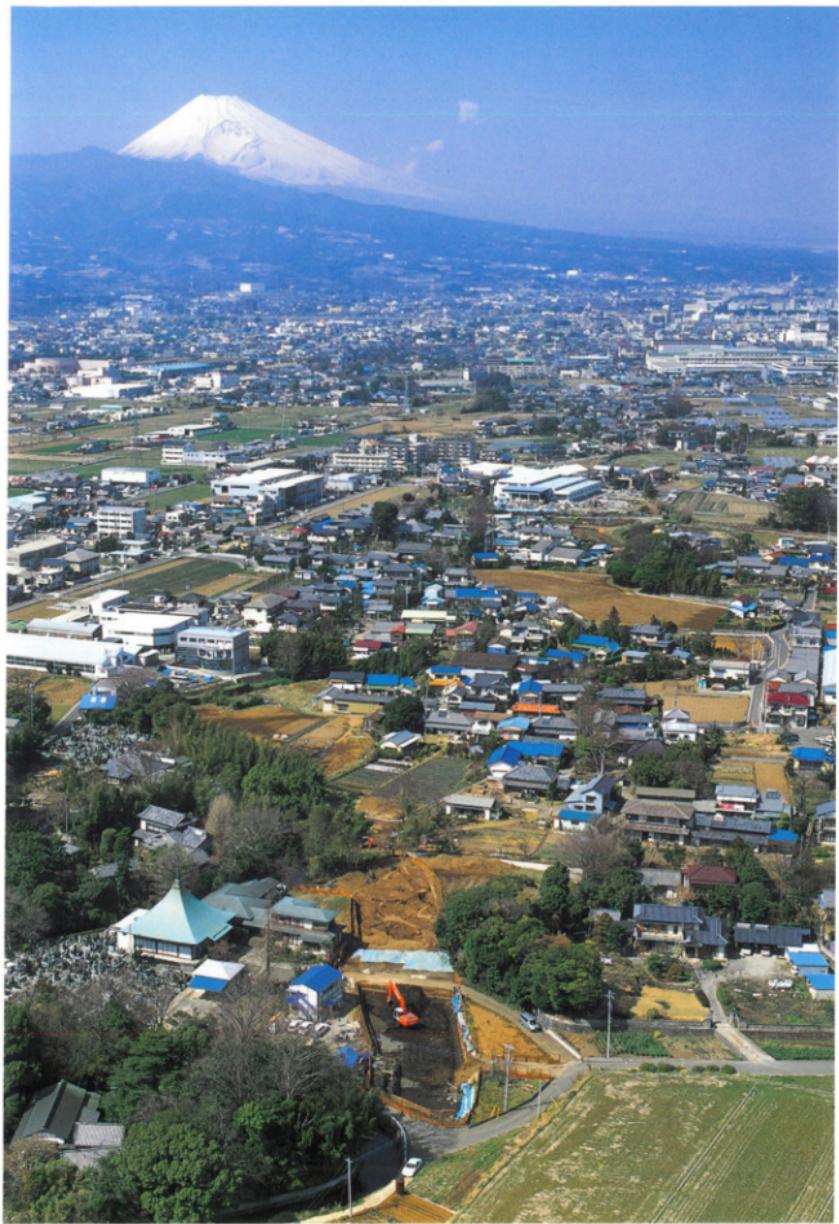
平田前田遺跡

平成8年度一級河川境川治水特別対策工事に伴う

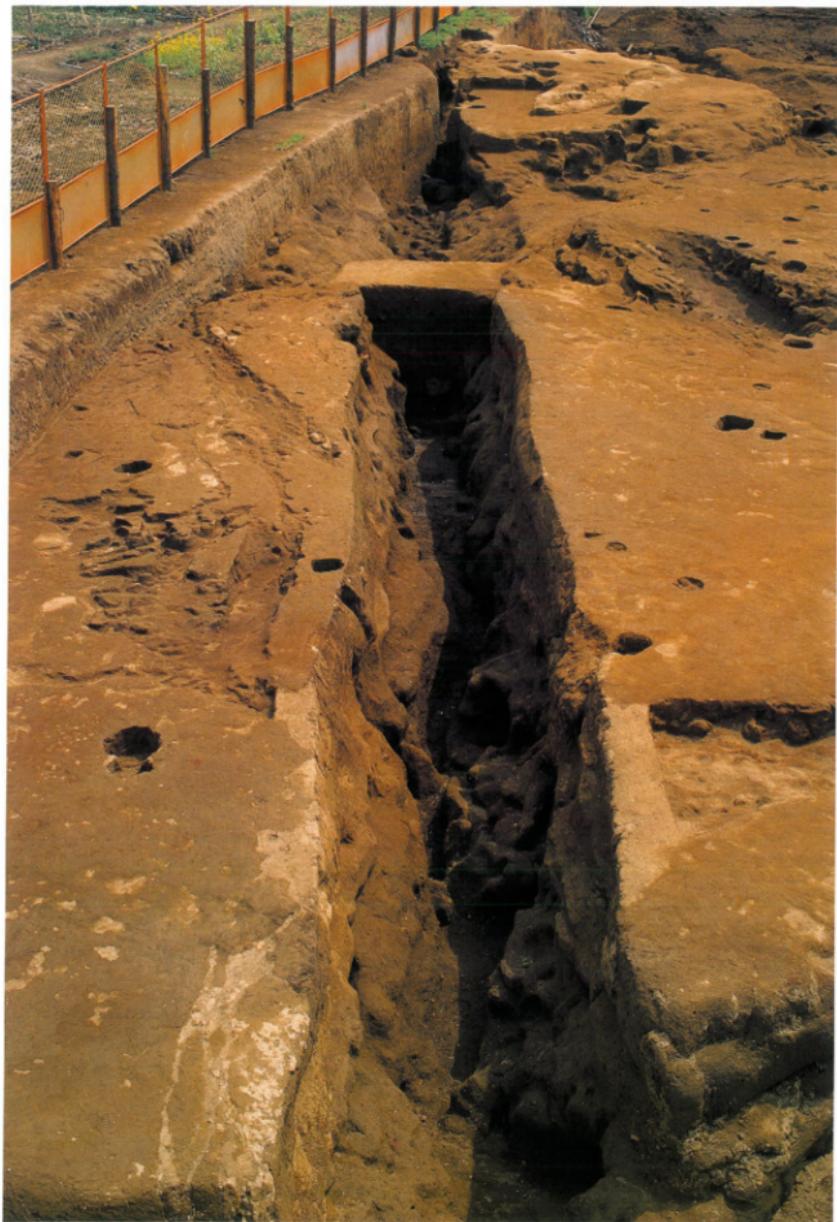
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡遠景<南東上空より>



溝状遺構SD21001<北西より>

序

三島市は、雄大な富士の嶺や清冽な湧き水に恵まれた立地条件により、古くから伊豆地方の中心として栄えてきた。古代においては伊豆国府および国分寺の所在地として、中世においては伊豆国一の宮である三嶋大社の門前町として、近世に至っては東海道の難所箱根山を控えた宿場町として、その脈 wijを呈してきた。このような歴史的背景から、市内各所には国・県・市指定の貴重な文化財が数多く保存されている。

このたび発掘調査を行った平田前田遺跡は、三島市の南部、駿東郡清水町との境を流れる境川流域に位置している遺跡である。当遺跡の成立に係わる境川は、現在も市町境をなす河川となっているが、古くは駿河、伊豆両国を分ける国境の川として幾多の政争の舞台ともなったことは広く知られるところである。しかしながら、これまで境川流域での発掘調査はあまりなされておらず、当水系で営まれた古の人々の生活の様子は十分に解き明かされていなかった。そうした意味においても、今回、当遺跡の発掘調査が行われたことは意義あることと言えよう。

今回の調査では弥生・古墳時代から中・近世さらには近代にまで至る幅広い時代の遺構、遺物が確認された。とくに、古墳時代初頭の遺物が出土したU字形の断面を持つ溝状遺構は、その規模、構造、出土遺物、周辺地形などから当遺跡の周辺に営まれた集落の環濠と捉えることも可能であり、当地域においては稀有な発見事例と言えよう。また、調査区内に残されていた防空壕は、戦後50年経った今日において次第に失われつつある戦争に対する認識を喚起させるに足る貴重な近代遺産のひとつであり、調査がその範囲にまで及んだことは人変に意義深いことであるとともに、調査に携わった関係者にとっても貴重な経験となったことであろう。平田前田遺跡で調査された事柄が、今後、境川水系の、延いては静岡県東部地域の歴史を解明する一助となることを願って止まないところである。

文末とはなりましたが、今回の発掘調査ならびに資料整理にあたって、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会、さらに地元の関係者の皆様に深いご理解とご協力をいただきましたことに衷心より感謝申し上げます。また、寒風吹き荒ぶ中で発掘調査に当たられた皆様、限られた期間の中で資料の整理に従事された方々のご苦労に対し深甚なる敬意を表する次第であります。

1998年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齋藤 忠

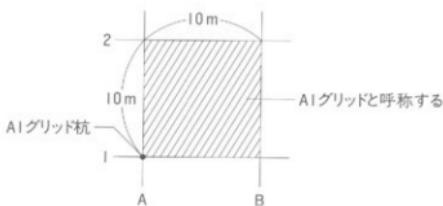
例　　言

- 1 本書は静岡県三島市松本414他に所在する平田前田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は「平成8年度一級河川境川治水特別対策（地域開発関連整備）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として静岡県沼津土木事務所から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、三島市教育委員会の協力を得て、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 現地調査は平成8年10月1日から平成9年3月31日まで行い、引き続き平成9年度に整理作業を実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。
所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村川昌昭、調査研究部長 石垣英夫
調査研究課長 佐野五十嵐、調査研究員 中鉢賢治・篠宮晋士
- 5 資料整理の体制は以下のとおりである。
所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村川昌昭、調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長兼一課長 栗野克巳、調査研究員 篠宮晋士
- 6 本書の作成は、調査研究部次長栗野克巳、調査研究員篠宮晋士が行った。なお、執筆は篠宮晋士が担当した。また、特稿の「平田前田遺跡出土木製品の樹種」については、主任調査研究員西尾太加江が執筆した。
- 7 地質・土壤分析は、静岡大学名誉教授加藤芳朗氏に依頼し、手稿を特論として掲載させていただいた。
- 8 出土人骨についての人類学的分析は、元国立科学博物館の山口敏氏に依頼し、手稿を特論として掲載させていただいた。
- 9 動物遺体の同定は、早稲田大学教育学部講師今子浩吉氏に依頼した。
- 10 石製品の石材の同定は、静岡大学名誉教授伊藤通玄氏に依頼した。
- 11 本書の遺物写真の撮影は楠幸堂（楠本真紀子氏）に委託した。なお一部は当研究所職員が撮影した。
- 12 調査に関わる資料、出土遺物は全て財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 13 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡　例

本書の記述は、以下の基準に従い統一をはかった。

- 1 調査は10m×10mのグリッドを設置して行ったが、クリッド杭とグリッドのそれぞれの名称については、下記のように設定した。



- 2 遺構・遺物の表記は次のとおりである。

〈遺構〉

S D…溝状遺構 S F…土坑 S P…小穴（ビット） S X…その他

〈遺物〉

P…土器 W…木製品 S…石製品 M…金属製品 P T…土製品

- 3 全体図・各遺構図の縮尺は、それぞれの図に明記した。遺物の実測図は、土器・陶磁器、木製品、石製品は縮尺1/3を基本とし、金属製品、土製品は縮尺1/1を基本とした。なお、写真図版の縮尺率は全て任意である。

- 4 土器の実測図については、施釉部分をスクリーントーン で示した。

- 5 木製品の実測図においては、木目を断面図中に模式的に示した。また、圧痕部分をスクリーントーン で、木皮部分をスクリーントーン で示した。漆については、黒漆をスクリーントーン で、赤漆をスクリーントーン で示した。

- 6 石製品の実測図については、断面に-----で砥面の範囲を示した。

- 7 出土土器計測表・出土木製品計測表において、法量の（　）は復元推定値を示している。

目 次

卷頭写真	
序	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 位置と環境	1
第1節 地理的環境と遺跡の位置	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	5
第1節 調査に至る経過	5
第2節 調査の方法	5
第3節 現地調査の経過	6
第Ⅲ章 各地区の調査	9
第1節 1-1区の調査	9
1 概要	2 土層の状況
3 遺構と出土遺物	4 包含層の遺物
第2節 1-2区の調査	28
1 概要	2 土層の状況
3 遺構と出土遺物	4 包含層の遺物
第3節 2-1区の調査	37
1 概要	2 土層の状況
3 遺構と出土遺物	4 包含層の遺物
第4節 2-2区の調査	51
1 概要	2 トレンチ調査の結果
3 防空壕の調査	
第Ⅳ章 まとめ	54
引用・参考文献	56
特論 三島市平田前田遺跡土層の地学的検討——加藤芳朗——	57
特論 三島市平田前田遺跡の土坑墓内出土の・中世人骨について —山口 敏—	63
特稿 平田前田遺跡出土木製品の樹種——西尾太加二——	64

挿図目次

第1図	調査区と周辺地形図	2
第2図	平川前田遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	調査区グリッド配置図	5
第4図	1-1区の土層状況	10
第5図	1-1区第1遺構面全体図	11
第6図	1-1区第2遺構面全体図	13
第7図	溝状遺構S D11035実測図	15・16
第8図	集石上坑S F11038実測図	17
第9図	豊穴状遺構S X11039・S X11041実測図	17
第10図	1-1区第3遺構面全体図	18
第11図	溝状遺構S D11084実測図	20
第12図	土坑S F11049内羽釜出土状況実測図・ピットS P11065内石臼出土状況実測図	21
第13図	1-1区出土土器・陶磁器実測図	23
第14図	1-1区出土木製品実測図(1)	24
第15図	1-1区出土木製品実測図(2)	25
第16図	出土石製品(砥石・石臼)実測図	26
第17図	出土錢貨拓影・出土金属製品(キセル)実測図	26
第18図	1-2区の土層状況	29
第19図	1-2区第1遺構面全体図	30
第20図	土坑S F12014実測図	31
第21図	溝状遺構S D12012・S D12013実測図	32
第22図	不明遺構S X12010実測図	32
第23図	豊穴状遺構S X12011実測図	32
第24図	1-2区第2遺構面全体図	33
第25図	上坑墓S X12034実測図	34
第26図	1-2区出土土器・土製品(土鍤)実測図	36
第27図	2-1区の土層状況	38
第28図	2-1区遺構全体図	40
第29図	溝状遺構S D21001開削から埋没に至る過程	42
第30図	溝状遺構S D21001実測図	43
第31図	溝状遺構S D21002実測図	45
第32図	土坑S F21045・S F21046・S F21047実測図	46
第33図	旧河道・洪水痕跡図	48
第34図	2-1区出土土器実測図(1)	49
第35図	2-1区出土土器実測図(2)	50
第36図	2-2区トレンチ土層断面図	52
第37図	防空壕実測図	53

挿表目次

第1表	調査工程表	8
第2表	1-1区第2遺構面ピット・土坑計測表	14
第3表	1-1区第3遺構面ピット計測表	19
第4表	1-1区出土土器・陶磁器計測表	27
第5表	1-1区出土木製品計測表	27
第6表	出土石製品計測表	27
第7表	出土錢貨計測表	28
第8表	出土金属製品計測表	28
第9表	1-2区第1遺構面ピット計測表	31
第10表	1-2区第2遺構面ピット計測表	34
第11表	1-2区出土土器計測表	37
第12表	出土土製品計測表	37
第13表	2-1区ピット計測表	47
第14表	2-1区出土土器計測表	51

写真図版目次

巻頭カラー図版 1 遺跡遠景<南東上空より>

巻頭カラー図版 2 溝状遺構 S D21001<北西より>

図版 1 1-1区第1遺構面 杭列

1-1区第1遺構面 錢貨出土状況

1-1区第1遺構面 検出遺構全景<南より>

1-1区第1遺構面 耕作痕跡<南西より>

1-1区第1遺構面 耕作痕跡<北西より>

図版 2 1-1区第2遺構面 検出遺構全景<南より>

1-1区第2遺構面 磁石土坑 S F11038

1-1区第2遺構面 穴状遺構 S X11039・S X11041

1-1区第2遺構面 穴状遺構 S X11039遺物出土状況（下駄）

1-1区第2遺構面 旧河道内動物遺体出土状況

図版 3 1-1区第2遺構面 溝状遺構 S D11035<北東より>

1-1区第2遺構面 溝状遺構 S D11035（暗渠部分）<北より>

1-1区第2遺構面 溝状遺構 S D11035遺物出土状況（1）（曲物）

1-1区第2遺構面 溝状遺構 S D11035遺物出土状況（2）（用途不明木製品）

図版 4 1-1区第3遺構面 検出遺構全景<南より>

1-1区第3遺構面 検出遺構<南西より>

1-1区第3遺構面 土坑 S F11049遺物出土状況（羽釜）

- 1 - 1 区第3遺構面 ピットS P11065遺物出土状況（石臼）
- 図版5 1 - 2 区第1遺構面 検出遺構全景<東より>
- 1 - 2 区第1遺構面 土坑S F12014遺物出土状況（丸太材）
- 1 - 2 区第1遺構面 土坑S F12014完掘状況
- 1 - 2 区第1遺構面 不明遺構S X12010
- 図版6 1 - 2 区第1遺構面 積穴状遺構S X12011
- 1 - 2 区第2遺構面 検出遺構全景<東より>
- 1 - 2 区第2遺構面 遺物出土状況（1）
- 1 - 2 区第2遺構面 遺物出土状況（2）
- 図版7 1 - 2 区第2遺構面 土坑墓S X12034<南東より>
- 1 - 2 区第2遺構面 土坑墓S X12034人骨出土状況
- 1 - 2 区第2遺構面 土坑墓S X12034出土人骨（頸骨）
- 1 - 2 区第2遺構面 土坑墓S X12034遺物出土状況（かわらけ）
- 図版8 2 - 1 区 検出遺構全景<真上上空より>
- 図版9 2 - 1 区 溝状遺構S D21001<北西より>
- 2 - 1 区 溝状遺構S D21001覆土堆積状況
- 2 - 1 区 溝状遺構S D21001遺物出土状況（1）
- 2 - 1 区 溝状遺構S D21001遺物出土状況（2）
- 図版10 2 - 1 区 土坑S F21047
- 2 - 1 区 旧河道検出状況
- 2 - 1 区 洪水痕跡検出状況（1）
- 2 - 1 区 洪水痕跡検出状況（2）
- 2 - 1 区 遺物出土状況（1）
- 2 - 1 区 遺物出土状況（2）
- 図版11 2 - 2 区 全景
- 2 - 2 区 第1トレンチ内土層断面
- 2 - 2 区 防空壕遠景<南より>
- 2 - 2 区 防空壕近景<南西より>
- 図版12 出土陶磁器
- 図版13 出土土器（1）
- 図版14 出土土器（2）
- 図版15 出土土器（3）
- 図版16 出土土器（4）
- 図版17 出土木製品（1）
- 図版18 出土木製品（2）
- 図版19 出土錢貨・キセル・土鍤・砾石・石臼

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境と遺跡の位置

当遺跡のある三島市は、静岡県の東部、伊豆半島の付け根に位置し、いわゆる北伊豆地方の中心地として発達した都市である。古くから「水の都」とも呼ばれ、市内各所で見られる湧水が幾すじもの清流をつくりだし、郊外には実り豊かな田園風景が広がっている。さらに、周囲を見わたすと、東に箱根連山、北西に富士山・愛鷹山、南に天城連山が連なるなど、自然環境に恵まれた地である。

平田前川遺跡は、JR三島駅より南へ約3.3km、境川を境界とする駿東郡清水町との市町境に位置し、所在地は三島市松本414他である。境川は現在、駿東郡長泉町・清水町と三島市との行政境であるが、古くは駿河国と伊豆国とを分ける国境の川であり、川の名称の由来ともなっている。

今から3千数百年前、約5千年の静穏期を経て再び活発な活動を始めた富士火山の噴出物のいくつかは、富士の積雪を溶かした大泥流となり、いわゆる三島溶岩流の上をすべるように黄瀬川谷を流れ下り、その出口付近で広く堆積し黄瀬川扇状地を形成した。三島市中心市街地は、この黄瀬川扇状地上にあり、当遺跡はこの扇端付近にあたる。扇状地面には、東側から大場川・御殿川・境川・柿田川（泉川）・黄瀬川の諸河川が蛇行し谷を刻むことから、細分すれば、黄瀬川扇状地はいわゆる開析扇状地の範疇に属する。

前述の境川は当遺跡の成立に關係が深い。境川は三島市と駿東郡長泉町・清水町との境界部分を流下し、清水町の畠付近で狩野川に合流する総延長約9.5kmの河川である。千賀橋直下の三島市加屋町地先付近から湧水がみられるが、実質的な源流部は、より下流部の玉川池（丸池）付近である。上流部が欠けた状態の境川ではあるが、千賀橋から玉川池にかけての湧水を合わせて流量は増大し、下流に向かって河道も蛇行し開析が進む。当遺跡は、このように蛇行する境川の左岸に位置し、一部境川の旧河道にあたると思われる低地とそれに続く微高地から成る。低地部分の標高は10m内外ではほぼ河川敷と一致し、微高地部分の標高は12~13mで、比高差にして2~3m程である。周辺は宅地と耕作地が混在し、調査区の微高地部分は畑地であり、低地部分でも近年まで水田耕作が行われていた。

第2節 歴史的環境

三島市内には旧石器時代から歴史時代に及ぶ数多くの遺跡が分布しており、静岡県内においても有数の遺跡集中地域となっている。その分布状況は、主に旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中する箱根山西麓の丘陵地帯と、弥生時代以降歴史時代に至る遺跡が分布する平野部及び丘陵縁辺部に大別することができる。

とくに、平野部の遺跡の多くは、西から境川・御殿川・大場川の各流域に分布しており、それぞれの河川流域に低湿地や後背湿地が展開していたことが、集落遺跡を営む際の経済基盤になっていたことを窺わせる。

ここでは、当遺跡に関連の深い弥生時代から古墳時代の遺跡の中から、内容が明らかにされている主要な遺跡について、各河川の流域ごと概観することにしたい。

1. 境川流域の遺跡

境川流域の遺跡としては、今までに、長伏遺跡(1)・長伏上埴辛田遺跡(2)・玉川塚田遺跡(3)・桶田遺跡(4)・長伏六反田遺跡(5)が確認されているのみで、他の河川流域に比べ、その数は少な

い。長伏遺跡からは弥生時代中期の溝状遺構、住居址1軒、壺棺墓と考えられる土坑1基が検出された。とくに、溝状遺構は断面V字形を呈し、幅2.5m、深さ1.2mを測る大型のものであったが、トレンチ調査のため、その性格は十分に解明されていない。なお、溝状遺構内から出土した土器は一括資料として静岡県東部の土器編年の標識の一つになっている。長伏上塙辛田遺跡からは三島市内で初めての弥生時代後期の水田畦畔が確認され、当地域においてもこの時代に水田耕作が営まれていたことが実証された。玉川塚田遺跡からは古墳時代初頭の溝状遺構8条、土坑2基、掘立柱建物跡1棟が検出された。桶田遺跡からは平安時代中頃の住居址5軒、掘立柱建物跡3棟が検出され、住居址内からは墨書き土器が1点出土している。また、長伏六反田遺跡からは、その試掘調査で平安時代の住居址4軒、弥生時代中期後半から平安時代にかけての土器、灰釉陶器などが出土している。

2. 御殿川流域の遺跡

御殿川流域において、今までのところ確認されている遺跡には、奈良橋向遺跡(6)・金沢遺跡(7)・鶴喰遺跡(8)・鶴喰前田遺跡(9)・中島西原田遺跡(10)・八反畑前田遺跡(11)・梅名大曲田遺跡(12)・中島上舞台遺跡(13)・中島下舞台遺跡(14)などがある。

このうち、中島上舞台遺跡からは弥生時代中期の方形周溝墓6基、後期の住居址2軒、古墳時代の住居址18軒、奈良・平安時代の住居址44軒、掘立柱建物跡7棟が検出され、この地域においては大規模な集落遺跡の検出事例と言えよう。また、金沢遺跡からは古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居址



第1図 調査区と周辺地形図

35軒、掘立柱建物跡2棟、方形周溝墓1基などが検出された。とくに、742m²という比較的狭い調査範囲から多くの住居址が検出されたことや遺構が調査区東側へ大きく広がっていることなどから、遺跡周辺には大集落が形成されていた可能性が高いと考えられている。また、奈良橋向遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期の住居址16軒、掘立柱建物跡1棟とともに水田跡も検出され、三島市内で、当該期の集落跡と水田跡が同時に発見された初例として注目された。さらに、中島下舞台遺跡からも、古墳時代の住居址14軒、奈良・平安時代の住居址12軒が検出されている。

以上のように、御殿川流域には、比較的長期間にわたって存続した、住居址を伴ういわゆる集落遺跡が多く分布していることがわかる。

3. 大場川流域の遺跡

黄瀬川扇状地の東端に沿って流下する大場川流域においては、二日町遺跡（15）・中遺跡（16）・御園川遺跡（17）・老町田遺跡（18）・道下遺跡（19）・大場中島遺跡（20）・安久沓形遺跡（21）・安久奥原敷遺跡（22）・間宮川向遺跡（23）・安久川崎原遺跡（24）などが、現在までに確認されている。

このうち、御園川遺跡では奈良時代から平安時代の住居址4軒、老町田遺跡では古墳時代初頭から平安時代の住居址23軒、間宮川向遺跡では平安時代の住居址23軒、安久川崎原遺跡からは、古墳時代中期・後期の住居址13軒、平安時代の住居址1軒が検出された。このうち、老町田遺跡の住居址検出事例は、4世紀から10世紀までほぼ欠落時期がなく、この地域においてはきわめて長期間にわたって集落が存続したことを示す稀有な事例と言える。

以上のように、大場川流域においても、御殿川流域同様、長期にわたって営まれた集落遺跡の存在が確認されている。

境川・御殿川・大場川の各流域に分布する遺跡を概観するに、当遺跡の位置する境川流域においては発掘調査事例が他の河川流域に比べて少ないと起因してか、住居址を伴う聚落遺跡の確認があまりなされていないことが指摘できる。

なお、当遺跡周辺の歴史を文献史料から追ると、遺跡が所在する三島市松本・平田地区一帯をはじめとして、隣接する猿川流域の清水町戸山地区はいずれも中世史料にその初見を確認することができる。とくに、前水町戸山の藤泉院庵、天文21年2月29日発給の今川義元判物等は次のような内容で興味が持たれる。

駿河国泉郷之内戸山村藤泉院之事

右、修善院般開山積室和尚立寄進、先判雖有之、亂巾紛失之条、重而所出判形也、如前所々守領老町・寺山門前屋敷棟別拾問之分令免許、但拾問分、依乱中在家退転云々、雖然於家出来者、雖為何時、十問分如先規可令免除、修善院般開山所問、地頭之継停止之、不入所申付者也、仍如件、

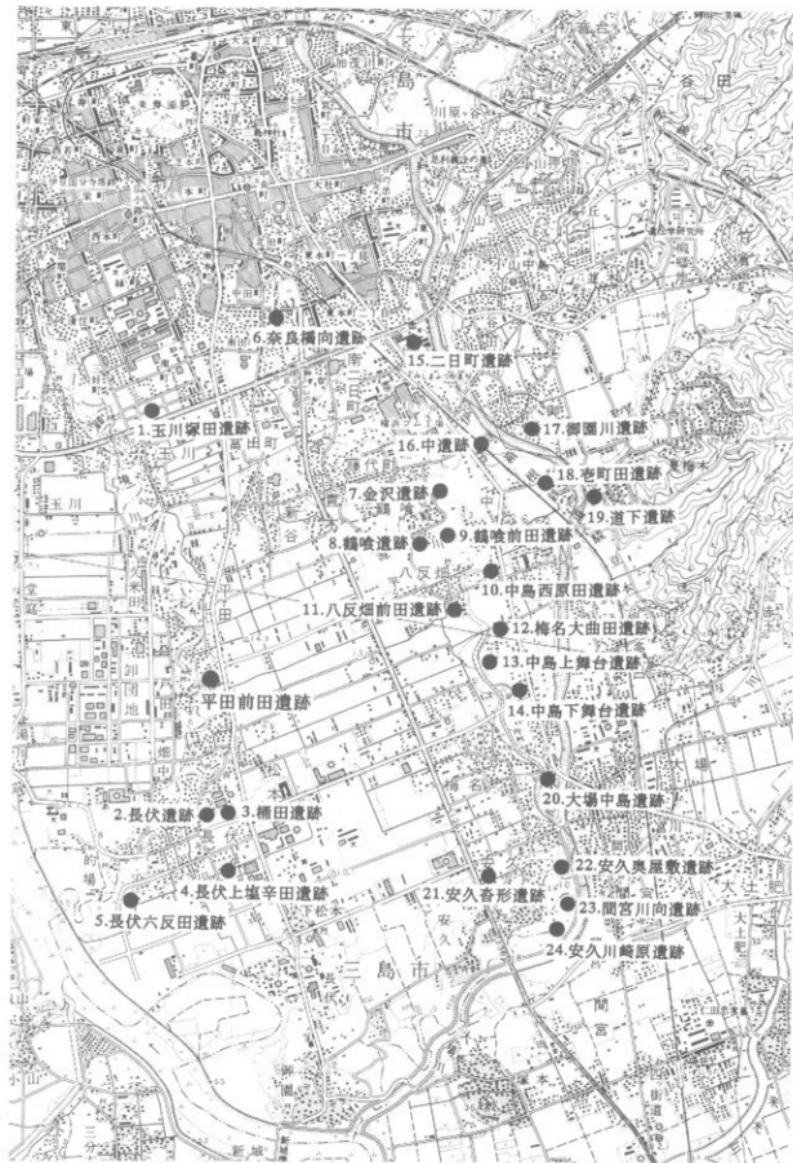
天文廿一年

二月廿九日

治部大輔（花押）

藤泉院

これによれば、天文21年当時、今川・後北条氏の争いがこの地域にまで波及し、その結果、この地域一帯が今川義元の勢力下に入ったことなどがわかるが、中でも注目したいのは「在家退転」という文言であり、戦乱により農民らが逃散し集落が荒廃していった様相が窺え人間に興味深い。さらに、記録によれば、駿河・伊豆の国境であったこの地域一帯は、義元の死後、後北条氏の勢力下に入るものの、たびたび武田氏の侵攻を受け戦禍に見まされることになる。この地域一帯が漸く政治的に安定するのは、豊臣秀吉による小田原征伐を経て、徳川家康の関東入府以後のことであり、それは前述の藤泉院が最勝院十三世仏山長寿和尚により慶長年間に再興されたことからも窺えよう。



第2図 平田前田遺跡と周辺の遺跡

第II章 調査の方法と経緯

第1節 調査に至る経緯

三島市と長泉町・清水町との市町境を流下する堀川は、三島市加屋町付近からの小規模な湧水を含むせ清水町の堀川池より下流側では表流水も多く、また、現在では都市の排水河川の性格も強まり、その流量は確かに増大している。しかも、その流れは顕著な蛇行を示し河床勾配も緩やかなため、降雨によりひとたび増水すれば流域周辺部に浸水被害を及ぼす危険性が高いことが指摘されている。そのため蛇行部のショートカット、護岸の整備を主体とする河川改修工事が静岡県の事業として進められてきた。

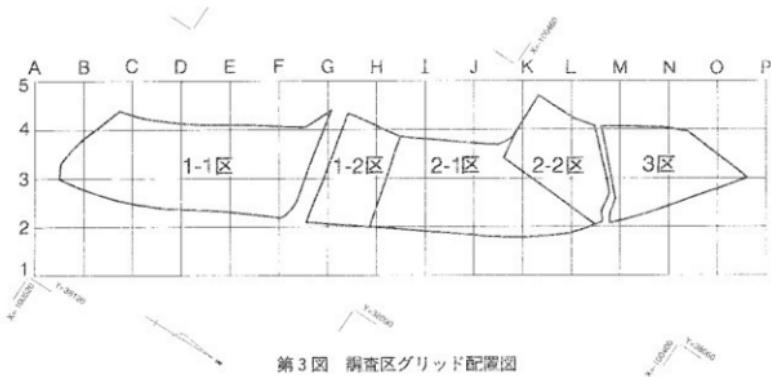
当遺跡の所在する三島市平田・松本地区の堀川河川改修工事もそうした一連の事業の一環として計画されたが、改修工事部分に埋蔵文化財の存在が考慮されたため、静岡県沿津土木事務所より静岡県教育委員会文化課を通じ当研究所に調査依頼があり、それを受け平成8年10月1日に契約を行い、現地調査期間半年の予定で本調査に取り掛かった。

第2節 調査の方法

現地調査を実施するにあたり、調査範囲には10m×10mのグリッドを設定し、南東側から北西側へA・B・C・D…のアルファベット、北東側から南西側にかけて1・2・3…の数字を付し、この組合せによりA 1 グリッド、B 2 グリッドのように表記し、調査の便宜を図った。なお、このグリッドは国土方眼座標中に位置を測り込み周辺地域との整合に努めた。

調査は対象範囲を3分割して行った。微高地を挟んで南東側の低地部分を1区、微高地と北西側の低地部分を2区、平田地区を3区とした。1区については、隣接する寺院の参道（三島市道）を挟んで、南東側を1-1区、北西側を1-2区として分割調査を行った。また、2区についても当初、北西側の低地部分は調査を行わない予定であったが、後述するようにトレンチ調査の必要性が生じたため、微高地部分を2-1区、低地部分を2-2区として調査を行った。

遺構が確認された1-1区、1-2区、2-1区では、各区で遺構面ごとに遺構を通し番号で登録し、



第3図 調査区グリッド配置図

遺構記号+登録番号で表記した。出土遺物は土器、木製品、石製品、金属製品、土製品等に分類して遺構単位、あるいは層位ごとにグリッド単位で取り上げ、分類別に作成した台帳に登録して遺物記号+登録番号を付した。図面記録は基本的に手書きで行い、一部、複雑な検出状況を示す遺構については写真測量を実施した。遺構平面・断面図、土層断面図、遺物出土状況図は基本的に縮尺1/20で作成し、必要に応じて1/10で作成した。写真記録には4×5版モノクロ・カラーリバーサル、6×7版モノクロ・カラーリバーサル、35mmモノクロ・カラーリバーサルを用い、調査工程記録用として35mmカラーネガを用いた。

第3節 現地調査の経過

調査はまず、平成8年10月7日・8日の両日に3区の土層確認調査を先行して行った。その結果、現地表面下約2.5~3mまで産業廃棄物などによる盛土がなされていることが確認された。しかも、境川に接する箇所で湧水が絶えずあり、調査中に盛土が崩壊するなど危険性を伴ったため、オープンカットによる調査では対応しきれない可能性が出てきた。そこで、3区と一連の堆積と考えられる2-2区についてトレンチ調査を行い、その結果にもとづいて、3区の調査方法を検討することにした。

3区以外の調査は、当初、1区、2区を同時に重機で表土除去を行う計画を立てたが、重機の搬入路の問題から1-2区の調査が終了した時点で、2区の表土除去を始めることになり、作業工程の変更が必要になった。

プレハブ建物の設置が10月の第3週にずれ込んだため、それまでに発掘資器材の調達や作業員雇用手続きなど現地調査の諸準備を行い、実質的な調査は10月15日より1区の表土除去を重機を用いて行うことから開始した。また、それと並行して資器材の搬入、安全フェンスの設置などを行い、表土除去終了後、人力による掘り下げに移った。地形的に重機が進入できず、竹林ともなっている2-2区は、11月中旬より人力による竹の伐採・伐根作業およびトレンチの掘削を行った。2-1区は1-2区の調査が終了した後、平成9年2月中旬より重機による表土除去を開始した。

各調査区の調査経過は第2表にまとめた通りであり、以下その作業内容を調査区ごとに詳述しておく。

<1-1区・1-2区の調査>

平成8年10月15日~18日・10月21日~25日

重機を用いて表土除去を行う。1-1区内において表土除去が完了した箇所から随時、排水溝を兼ねたトレンチの掘削を行う。湧水がかなり見られたため、1-1区、1-2区とも南隅に集水坑を掘削し、集水桶・水中ポンプを設置してそれに対応した。なお、これらの作業と並行して調査区周囲にフェンスを設置し安全対策にも努めた。

10月28日~11月1日・5日~8日

1-1区内のトレンチ掘削作業を継続して行う。また、1-1区四方の各壁面の土層観察および実測を行う。

11月11日~15日

1-2区内において、排水溝を兼ねたトレンチの掘削を行った。

11月18日~22日・25日~29日・12月2日~6日・9日~13日

第1遺構面検出作業を開始する。これに先立ち、1-1区について下層の堆積状況を把握し調査範囲を確定するために、重機によるトレンチ調査を行った。その際、湧水が激しく見られたため、集水坑を再掘削し200V水中ポンプを設置した。第1遺構面検出作業の結果、1-1区では耕作痕跡と思われる遺

構、1-2区では不明遺構S X12010、堅穴状遺構S X12011などを検出し、それぞれの遺構について覆土の掘削を行った。

12月16日～20日

1-1区、1-2区とも各遺構の覆土の掘削を完了し、写真撮影、平面実測、土層断面実測などを行い、第1遺構面の調査を終了する。

12月24日～25日

1-1区平面実測図の補正、および1-1区、1-2区にて第2遺構面検出作業を開始する。また、年末年始休業に備え、調査区およびその周辺の安全管理を行う。

平成9年1月7日～10日・13日～17日

現場作業を再開し、第2遺構面検出作業を継続する。1-1区にて溝状遺構S D11035、ピット群、1-2区にて土坑墓S X12034などを検出し、覆土の掘削を行う。

1月20日～24日

1-1区では新たに検出したS X11038、S X11039、S X11041の覆土掘削、第2遺構面平面実測などを行った。1-2区では第2遺構面完掘状況の全景を撮影し、平面実測、土層断面実測のち第2遺構面の掘り下げを行う。

1月27日～31日

1-2区において、土坑墓S X12034内出土の人骨片の取り上げ、および第2遺構面の掘り下げを完了し、全ての調査を終了する。

2月3日～7日・10日～14日・17日～21日

重機を用いて1-2区の埋め戻しを行う。1-1区にて検出のS D11035が調査区内の排土置き場へと延長することが判明したため、重機を用いて排土の移動を行い、S D11035検出作業を継続する。また、同区域にて旧河道を検出したため、その掘り下げを行う。完掘のち第2遺構面検出状況の写真撮影をし、平面実測、土層断面実測などを行う。

3月3日～7日・10日～14日・17日～21日・24日～28日

S D11035の写真測量を実施したのち、第3遺構面検出作業を開始する。その結果、溝状遺構S D11084、ピット群、土坑、旧河道などを検出し、完掘のち写真撮影、平面実測、土層断面実測を行い、1-1区の全ての調査を終了し重機による埋め戻しを行う。

< 2-1区の調査 >

平成8年11月11日～15日・18日～22日

表土除去の範囲および深度を確認するためにグリッド杭3列方向にトレンチを入れ、土層の堆積状況を観察し、併せて土層断面実測を行った。

平成9年2月11日～14日

重機を用いて表土除去を行う。並行して調査区周囲に安全フェンスを設置する。表土除去完了後、遺構検出作業を開始する。

2月17日～21日・24日～28日・3月3日～7日・10日～14日・17日～21日

遺構の検出作業を継続する。その結果、溝状遺構S D21001、ピット群、土坑、旧河道などを検出し、各遺構の掘り下げを行う。

3月24日～28日

遺構完掘後、写真測量を実施する。また、全景および各遺構の写真撮影を行い、全ての調査を終了し重機による埋め戻しを行う。

<2-2区の調査>

平成8年11月11日～15日・12月9日～13日・16日～20日・24日～25日

トレレンチを設定し、竹の伐採・伐根作業と並行しながら、その掘り下げを行い、土層の観察を行う。その結果、戦後に行われた盛土から下の層序については、一部整地を行ったような層も認められたが、明らかに構造と考えられるものは確認できず、さらに下層についても水成堆積による自然堆積層であり、全面調査の必要はない判断した。そのため、3区についても文化課との協議により、調査を行わないという方向が決まった。また、2-1区との境にあたる崖の断面に掘削されていた防空壕についても、近年の戦争遺跡に対する関心の高まりなどを考慮して調査を行った。

平成9年1月7日～10日

写真撮影、トレレンチの土層断面実測、調査区全域の平面実測、防空壕の実測などを行い、調査を終了した。

月	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
区																		
現地調査	1-1	<hr/>																
	1-2	<hr/>																
	2-1				<hr/>													
	2-2	<hr/>																
	3	<hr/>																
現地整理	<hr/>																	
整理報告							<hr/>											

第1表 調査工程表



1-1区表土除去作業状況



2-1区表土除去作業状況

第三章 各地区の調査

第1節 I-1区の調査

1 概要

I-1区は調査区の最も南東側に位置し、現地表面の標高は10m内外で境川河川敷とほぼ一致する。表高積は第2遺構面検出時が最大で、約393m²を測る。

遺構は、3層・4層・5層の各上面で検出され、それぞれ第1遺構面・第2遺構面・第3遺構面とした。第1遺構面は近世以降の面と考えられ、耕作痕跡と思われる遺構および杭列が検出された。第2遺構面は中世末から近世初頭に比定される面で、暗渠排水施設と思われる溝状遺構、杭列、ピット群、旧河道などを検出した。第3遺構面は中世後半の面と考えられ、溝状遺構、土坑、杭列、ピット群、旧河道などを検出した。ピットの中には、礫石、根固め石、柱根を残し柱穴と認められるものや直線上に並ぶものもあり、何らかの施設が営まれていたことを想定させるが、明らかに建物を認定するまでには至らなかった。

2 土層の状況（第4図）

I-1区で確認された土層は、現地表（標高約10.6m）から約2m下（標高約8.7m～8.2m）までである。このうち上層は山土や瓦礫からなる盛土である。調査区の南東側で厚みを増し、最厚部で約1.1mを測る。

盛土以下は細かく18層に分けることができ、基本的に土位から第1層へ第18層の名称を付けた。その状況を概観すると、調査区の北西側では比較的安定した土層の堆積状況が見られ、遺構も概ねその部分に集中して確認された。北西部で確認された土層の一層には、南東側にいくにしたがい消滅をするものの、一方で逆に厚層を増すものが見られた。また、南東側では旧河道に伴い砂疊層が確認された。以下、その状況を第1層より順に詳述する。

第1層 褐色シルト 層厚は約15cmで、全体に砂質が強いが良くしまっている。斑状に異色の砂を含む。調査区中央付近を境として北西側のみに確認された。

第2層 灰褐色シルト 全体に砂質が強いが、しまりも良い。層厚は約25cmを計測し、第6層と同じく調査区の北西側のみに見られた。

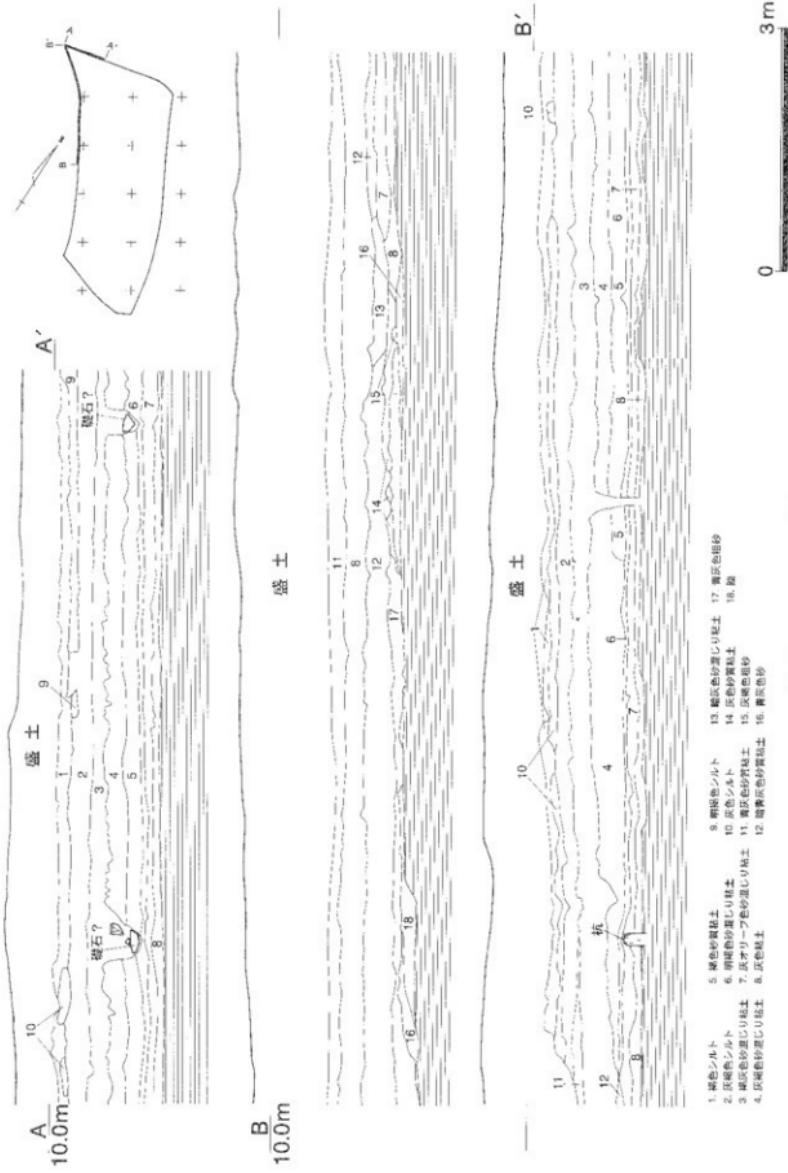
第3層 褐灰色砂混じり粘土 小礫を含み、比較的固くしまりが良い。I-1区全域にわたって確認された。層厚は北西側で約15～20cm、南東側に向かってやや厚みを増し、最も厚い部分で約40cmを計測する。酸化鉄分の沈着および放射線状に広がる植物の根の跡が全体に見られることから、作土（乾田）であったと考えられる。上面で遺構確認を行った。

第4層 灰褐色砂混じり粘土 僅かに小礫を含む。やや粘性を帯び、比較的しまりが良い。層厚は20～25cmで調査区中央付近を境として北西側のみに確認された。上面で遺構確認を行った。

第5層 褐色砂質粘土 やや粘性を帶びているが、砂質感が強め柔らかい感触を受ける。層厚は約20cmで調査区の北西側に一部認められるのみである。上面で遺構確認を行った。

第6層 明褐色砂混じり粘土 層厚は約10cmと少なく、調査区北西側のみに認められる。砂の混入が均質に認められるが、粘性度もあり、固くしまっている。僅かに植物の根の跡が観察できることから、湿田であったとも考えられる。

第7層 灰オリーブ色砂混じり粘土 砂の混入が僅かに認められるが、粘性が強い。層厚は10～15cm



第4図 1-1区の土層状況

で、調査区の中央よりやや南東側まで広がる。僅かに植物の根の跡が見られることから、湿田であったとも考えられる。

第8層 灰色粘土 粘性が大変強い。第7層よりもやや南東へと広がる。

第9層 明褐色シルト 砂質感が強いが、しまりもある。異色の砂を斑状に含む。調査区北隅にのみ認められた。

第10層 灰色シルト 砂質感が強いが、しまりも良い。調査区西隅にのみ認められた。

第11層 青灰色砂質粘土 砂質感のある粘土でしまりが強い。径5mm程度の小礫を僅かながら含む。土壤は還元状態にあり、湿田であった可能性が高い。

第12層 暗青灰色砂質粘土 砂質感のある粘土でしまりが良い。小礫を含む。

第13層 暗灰色砂混じり粘土 砂の混入が認められるが、粘性が強く、炭化物も含む。この部分にのみ認められ、S X11038、S X11041の覆土の一部と思われる。

第14層 灰色砂質粘土 やや粘性を帯びているが、砂質感が強い。

第15層 灰褐色粗砂 粗砂をベースに径2~3mm程の小礫が多く混入している。

第16層 青灰色砂 細かな砂をベースに径1mm程の小礫を含む。

第17層 青灰色粗砂 粗砂をベースに径5~10mm程の小礫が多く混入している。

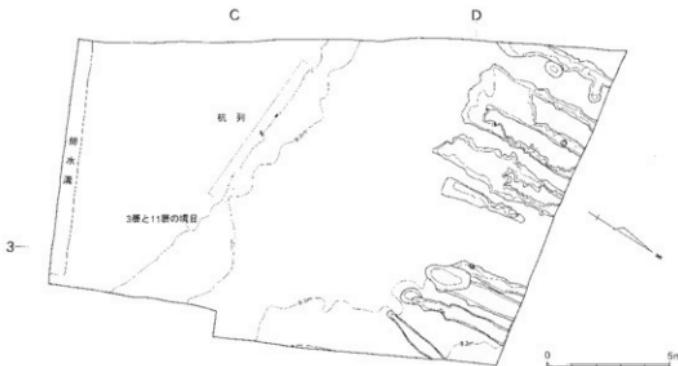
第18層 磯 径10~20mm程の礫をかなり含む。

3 遺構と出土遺物

1) 第1遺構面(第5図、図版1)

第1遺構面は第3層の褐色砂泥じり粘土層の上面で検出したものである。1-1区中央付近より南東側では、第11層が第3層を覆っており、北西側で見られる第3層上面と南東側の第11層上面との境には東西方向に杭列が走り、両面を区画している。したがって、ある一定期間、北西側の第3層上面と南東側の第11層上面とは同時期の面として存在したと考えることができる。

第3層は前述のとおり、酸化鉄分の沈着および放射線状に広がる植物の根跡の存在から乾田であった可能性が高く、当時の耕作(乾田の耕作ないしはその裏作としての畑作か)の痕跡と思われる深さ4~18cm余り、幅44~80cm余りを測る溝状の落ち込みがほぼ平行して11条検出された。第11層は試薬($\alpha-\alpha'$ ジ



第5図 1-1区第1遺構面全体図

ピリジル）による分析の結果、還元状態にあることが判明したことから、湿地であったと考えられる。前述のとおり北西側の第3層との境には人為的な杭列が存在することから畦畔などが構築されていた可能性が高く、その点を考慮すれば湿地であったとも解釈できる。以上をまとめてみると、耕作痕跡を検出した3層北西側上面は乾田であり、それと並存する形で南東側に湿地が営まれ、両者を区画するため杭を用いた何らかの施設（畦畔）が構築されていたと考えることも可能である。

遺物は近世陶器や中国製の青磁などが出土している（第13図1・2、図版12）。

近世陶器には灯明皿、皿が見られる。灯明皿（1）は瀬戸・美濃産で、底部およびその周辺の一部は露胎しているがそれ以外はすべて灰釉が施されている。また、底部には回転ヘラ切り痕を残す。18世紀末のものと思われる。皿（2）は瀬戸・美濃産の志野の丸皿で、口縁部以下の外面はすべてヘラ削りで調整されており、断面が台形の低い高台が削り出されている。16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。

中国製の青磁には碗の底部片と胴部下半の破片が見られる。それぞれ別固体の碗の破片であるが、いずれも小片のため図示できなかった。胴部下半の破片には型押し連弁紋が見られる。いずれも13世紀から14世紀頃のものであろう。

以上の遺物の他に、第1遺構面からは明治・大正年間のものと思われるいわゆる近代の陶器片も多数出土している。また、中国製青磁や近世陶器をはじめとする、中・近世の陶磁器類もその大部分が後世の耕作の影響を受けて細片化されており、遺物そのものが元位置を止めず、その堆積状況は2次的なものであると考えられる。それらのことから前述の水田（乾田・湿地）が営まれた時期は近世以降であったと考えるのが妥当であろう。なお、明治年間に作製された地形図にも当遺跡周辺が水田であったことが記されており、さらに前述したように、近年まで水田が営まれていたことは昭和30年代の地籍図からも明らかである。

2) 第2遺構面（第6図、図版2）

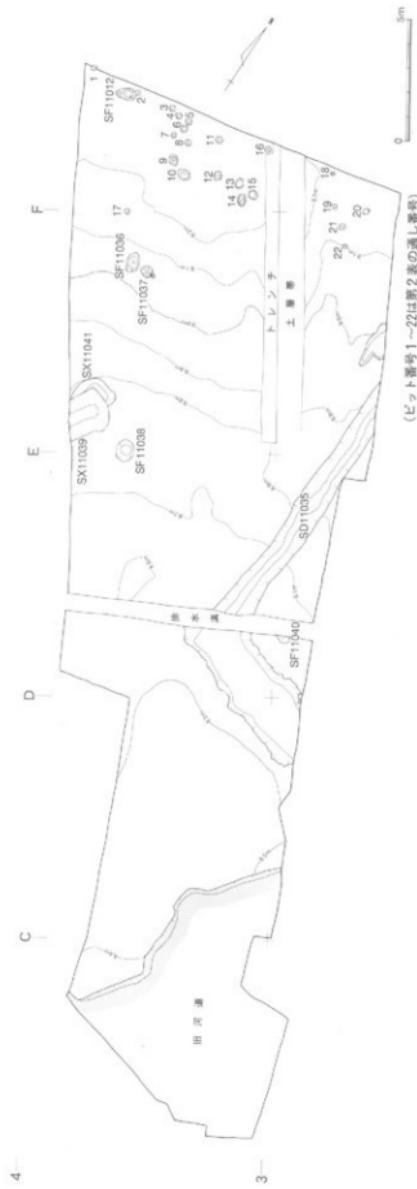
第2遺構面は第3層を除去し、第4層の灰褐色砂混じり粘土層上面で検出したものである。当初、溝状遺構、杭列、ピット群などの遺構を確認した。さらに溝状遺構の延長部分を確認するため調査範囲を南東側へと拡張した結果、旧河道を検出するに至った。それらの遺構のうち、特徴的なものについて以下に記述する。

溝状遺構SD11035（第7図、図版3）

E2グリッドからほぼ南の方向へと延び、D3グリッドでL字状に屈曲してほぼ東の方向へと向きを変えC2グリッドへと達する。検出部分の総延長は約16.4mである。また、その規模は幅1.0~2.8m、深さ10~22cm余りを測り、南東側にいくにしたがい次第に幅が広くなる傾向が見られる。覆土は小砾や腐殖物などを含んだ黒褐色砂質粘土である。底部にはE2グリッドからD2・D3グリッドにかけて、粗朶状の枝や竹などが密に敷き詰められていることから、暗渠排水として機能していたと考えられる。その時期は後述する出土遺物などから、中世末から近世初頭と考えるのが妥当であろう。

遺物は、底部に敷き詰められた竹や枝の上面およびその内側で中・近世の陶器、土師質土器や木製品が出土している。

中世陶器には瀬戸・美濃産の捕鉢の胴部の破片が見られる。内・外ともに鉄釉が施され、内面には滑り目も見られるが、細片であるため図示できなかった。近世陶器は志戸呂産で、内面は露胎しているが、外側に鉄釉が施されている。また、底部には回転ヘラ切り痕を残す。破片のため器種や時期の特定はできなかった（第13図12、図版12）。土師質土器はかわらけで15世紀のものと思われる（第13図13、図



(ピット番号1~22は第2表の通り番号)

第6図 1-1区第2遺構面全体図

版13)。

木製品には曲物、漆椀、下駄および用途不明品が見られる(第14図2~7、図版17・18)。2は漆椀の底部から腰部にかけての小片である。内面・外面ともに黒墨の上に赤漆を掛け付けて仕上げており、高台はほぼ鉛直方向に挽き出されている。3は曲物の側板の一部と底板が蓋板になる円板である。円板は直径11cm、厚さは不均等で4~7mmである。側板の幅(高さ)は10.2cmである。円板に木釘痕が4カ所ほど均等に残存していることから釘結合曲物であると考えられる。4の下駄は台と齒とを一本から作る連歎下駄である。左半分を欠いている上、残存部分も腐蝕が進んでいるため、元の形状を推定することは難しい。5、6、7は用途不明の木製品である。5は両端と中央に穿孔を持つほぼ左右対称の形状の板材である。両端に他の部材との結合部と思われる加工が認められる。6はナスピ形をした板材である。左右対称の形状を呈するものと思われるが、片側部分しか残存していない。7は細長い板状の部材である。両端付近に縦状の何かで縛った圧痕が観察できる。

ピット・土坑(第6図、図版2)

ピットはF3グリッドで17基、F2グリッドで3基、E2グリッドで2基検出した。それぞれの規模は第2表のとおりであり、平面形状が円形や橢円形のもので占められている。ピットの配列を検討したが、とくに建物の認定までは至らなかった。しかし、SP11025からは柱根と根固めに用いたと思われる石が、またSP11020、SP11021、SP11023からも根固めに用いたと思われる石が出土している。さらに、ピット群が集中する地域に近い調査区北壁の断面において、礫石と思われる径20cm程の石を伴うピットが2基確認できるなど、ピットの中には明らかに柱穴として認められるものがあることから、何らかの施設が存在したことは確実であろう。

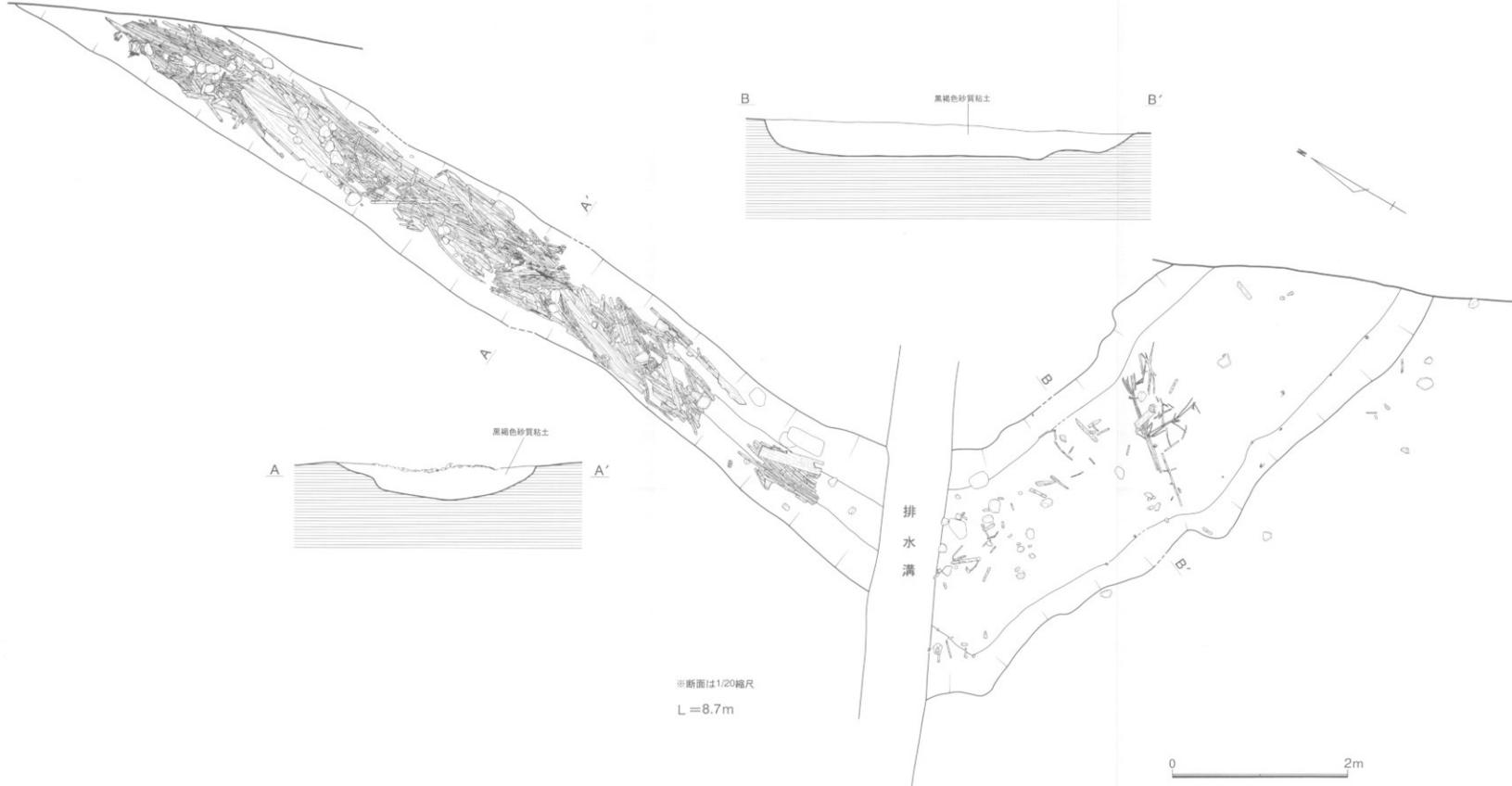
遺物は根固めに用いたと思われる拳大の石と柱根が検出されただけで、それ以外には見られない。柱根はかなり腐蝕が進んでいた。

土坑はF3グリッドで1基、E3グリッドで2基、D3~D2グリッドで1基、D2グリッドで1基検出した。それぞれの規模・形状については第2表のとおりである。このうち特徴的な2基について以下に説明を加える。

番号	遺構番号	検出地点	形狀	大きさ(cm)	深さ(cm)
1	SP11011	F-3	円形	23	55
2	SP11013	F-3	円形	29	21
3	SP11014	F-3	円形	22	38
4	SP11015	F-3	円形	25	32
5	SP11016	F-3	円形	24	21
6	SP11017	F-3	楕丸形	30×26	11
7	SP11018	F-3	円形	21	12
8	SP11019	F-3	円形	26	12
9	SP11020	F-3	楕円形	43×33	24
10	SP11021	F-3	楕円形	58×43	39
11	SP11022	F-3	円形	29	28
12	SP11023	F-3	楕円形	38×30	14
13	SP11024	F-3	楕円形	44×33	15
14	SP11025	F-3	楕円形	48×30	44

番号	遺構番号	検出地点	形狀	大きさ(cm)	深さ(cm)
15	SP11026	F-3	円形	37	31
16	SP11027	F-3	円形	25	6
17	SP11028	F-3	円形	19	11
18	SP11029	F-2	円形	17	14
19	SP11030	F-2	円形	20	15
20	SP11031	F-2	楕円形	30×22	30
21	SP11032	E-2	円形	27	34
22	SF11033	E-2	円形	18	18
23	SF11034	F-3	楕円形	82×50	108
24	SF11035	E-3	楕円形	86×52	19
25	SF11037	E-3	楕円形	64×46	17
26	SF11038	D-3-E-3	楕円形	84×70	19
27	SF11040	D-2	半円形	56×30	21

第2表 1-1区第2遺構面ピット・土坑計測表



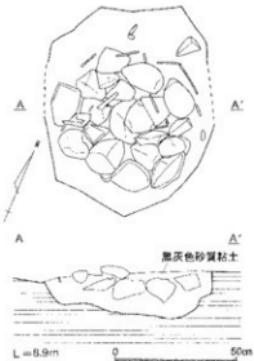
第7図 溝状遺構SD11035実測図

土坑SF11012

F 3 グリッドで検出した。平面形状はほぼ梢円形に近く、規模は長軸82cm、短軸50cmを測る。深さは108cmと深い。覆土は3層に分かれ、上層は褐灰色砂質粘土、中層は灰褐色シルト、下層は灰色砂質粘土である。覆土内からは錢貨、土師質土器が出土した。錢貨（第17図2、図版19）は元豊通寶で、1078年北宋の神宗の時代に鋳造された渡米錢である。錢文の書体は行書体である。16世紀後半から17世紀前半にかけて同錢貨の本邦模鉄錢がかなり流布したが、当出土錢貨は錢文や形状から渡米錢である可能性が高いと言えよう。土師質土器はかわらけであるが、底部から腰部にかけての小片のため図示できず、また明確な時期の特定もできなかった。

集石土坑SF11038（第8図、図版2）

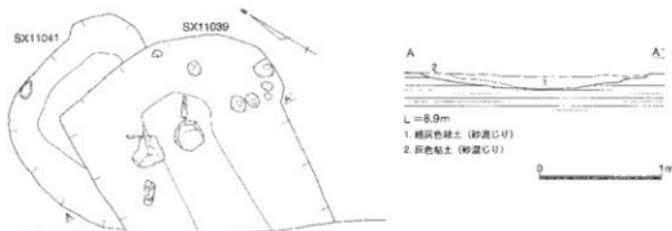
D 3 グリッドとE 3 グリッドを跨ぐ形で検出した。ほぼ梢円形の平面形状を呈し、規模は約84cm×70cm、深さは約19cmである。内部には拳大の礫が詰め込まれていた。遺物は灰釉陶器が1点出土したが小片のため図示できなかった。摩耗も進んでおり、流れ込みなどによる2次的な堆積であった可能性が高い。



第8図 集石土坑SF11038実測図

竪穴状遺構SX11039・SX11041（第9図、図版2）

SX11039・SX11041ともにE 3 グリッドに位置し、SX11041がSX11039に切られる形で検出された。SX11039は一部を排水溝により欠いているため全体のプランは不明であるが、ほぼ隅丸方形の平面形状を呈するものと思われる。検出部分の長軸は172cm、短軸は160cm、深さは10.3cm余りを測る。覆土は暗灰色砂混じり粘土で炭化物の混入が認められた。SX11041はほぼ梢円形の平面形状を呈し、長軸178cm、短軸43cm、深さ9.7cm余りを測る。覆土は灰色の砂混じり粘土である。遺物はSX11039内から下駄が1点出土した（第15図8、図版2・13）。台と齒とを一本から作る連歛下駄である。奈良国立文化財研究所では①鼻緒孔の位置、②齒の作り方、③平面形態の3項目による下駄の分類が行われている（奈文研：1984）。当ド駄の場合、全体に腐蝕が進み7片に割れた状態で出土しており、また、台の周縁部が多少欠損しているが、①については前臺がほぼ台の中央にあけられ、後齧が齒の内側にあけられていることからCに当てはまるものと思われる。②については、齒と台とが同じ幅で、縦断面が台形を呈していることから、IIに該当する。③については、前端の残存部分などからほぼ隅丸長方形と考えられ、aと判断できる。以上のことから、当駄は奈文研分類のC II a型式に該当するものと思われる。



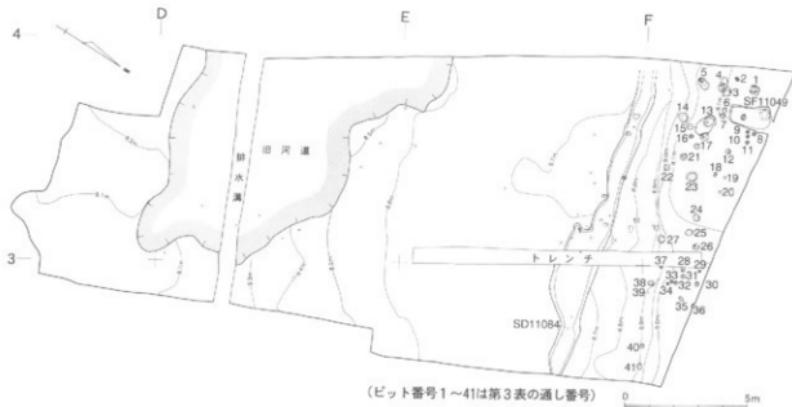
第9図 竪穴状遺構SX11039・SX11041実測図

旧河道（第6図）

B 3 グリッドから C 2 グリッドにかけて片側の河岸のみ検出した旧河川である。幅は検出部分だけで最大約11mを測る。遺物は砂礫内から動物遺体8点を検出した。その内訳は馬の大腿骨片1点・中足骨片1点・左肋骨1点・右肩甲骨1点・右脛骨1点・左脛骨1点・左上顎臼歯1点と牛の右大腿骨1点である（図版2）。

3) 第3遺構面（第10図、図版4）

第3遺構面は第4層を除き、主に第5層上面で検出した。第5層の褐色砂質粘土層は1-1区の北端にあたるF 2・F 3グリッドにのみ認められる土層であり、したがって遺構もその部分に集中して検出された。遺構は主にピットと土坑である。なお、第5層の縁辺部に沿う形で溝状遺構が検出されたが、第5層がなだらかに終息し下層へと繋がっていく土層の状況などから、第5層上面検出のピット、土坑と同一時期の遺構として位置付けた。



第10図 1-1区第3遺構面全体図

ピット・土坑（第10図、図版4）

ピットはF 3グリッドで27基、F 2グリッドで14基検出した。それぞれの規模は第3表のとおりであり、平面形状が円形や楕円形のもので占められている。とくに建物の認定はできなかつたが、直線上に並ぶものや、S P11042、S P11044、S P11045、S P11046、S P11063、S P11068からは根固めに用いたと思われる石が出土していることなどから、何らかの施設が存在したことは間違いないものと思われる。特に、S P11055からは、径約31~33cm、残存の長さ56.7cmを測る丸木がやや東側に傾いた状態で出土しており、しかも腐蝕せず残存していた下端部分には、刃先4.1cm程の鑿状の刃物で荒く斜めに削った加工痕が顕著で、その状況からまさしく柱根と考えることができる（第15図12、図版18）。その場合、かなり大型の建物の存在が想定されるが、検出地点が調査区の隅にあたり今回の調査ではその存在を明らかにすることはできなかつた。また、S P11065からは石臼の下臼部分が底面を下にして平らに置かれた状態で出土した（第12図、図版4）。直径29.5cm、最大厚11.1cm、中央孔の直径3.1cm余りを測り、輝石と長石を主体とする安山岩から成るものである（第16図4、図版19）。目がかなり摩耗してはいる

が、三輪茂雄氏の分類（三輪：1978）によれば、切線主溝型の八分画のパターンの臼と判断できる。副溝については統一的でなく、5本の部分と6本の部分が認められる。なお、臼については民俗学の分野でその神聖観などがかなり言及されており、それらを踏まえて考えれば注目すべき検出事例と言えよう。

土坑は、F 3 グリッドの西側隅で S F11049 を検出した。ほぼ隅丸方形の形状を呈し、規模は長軸190cm、短軸90cm、深さは46cm余りを測るものである。底部はほぼ平坦で、上面で検出した S F11012 の掘り込みも認められる。遺物は羽釜が1点、底部を除いてほぼ完形に近い状態で、口縁部を下にして伏せた状態で出土した（第12図、図版4）。形状は浅い扁球形の体部を持ち、口縁部断面が体部とほぼ同一の曲線を描き、鋤がわずかに斜め上方に突出するものである。体部外面にハケ調整、内面にナデ調整が施されており、口縁部には焼成前に開けたと思われる吊り下げのための一対の穿孔が2組、また、焼成後に開けたと思われる穿孔が3孔類がって認められる。15世紀半ばから16世紀前半のものと位置付けられよう（第13図19、図版13）。

番号	遺構番号	検出地点	形狀	大きさ(cm)	深さ(cm)
1	S P11042	F-3	円形	37	5
2	S P11043	F-3	楕円形	17×14	20
3	S P11044	F-3	円形	38	13
4	S P11045	F-3	楕円形	60×31	25
5	S P11046	F-3	楕円形	34×30	27
6	S P11047	F-3	円形	20	22
7	S P11048	F-3	円形	22	22
8	S P11050	F-3	円形	16	5
9	S P11051	F-3	円形	12	29
10	S P11052	F-3	I2形	12	29
11	S P11053	F-3	円形	14	14
12	S P11054	F-3	円形	19	11
13	S P11055	F-3	楕円形	98×60	52
14	S P11056	F-3	楕円形	40×38	19
15	S P11057	F-3	円形	25	13
16	S P11058	F-3	円形	14	13
17	S P11059	F-3	円形	21	18
18	S P11060	F-3	楕円形	21×13	6
19	S P11061	F-3	楕円形	14×7	6
20	S P11062	F-3	円形	11	5
21	S P11063	F-3	円形	26	26

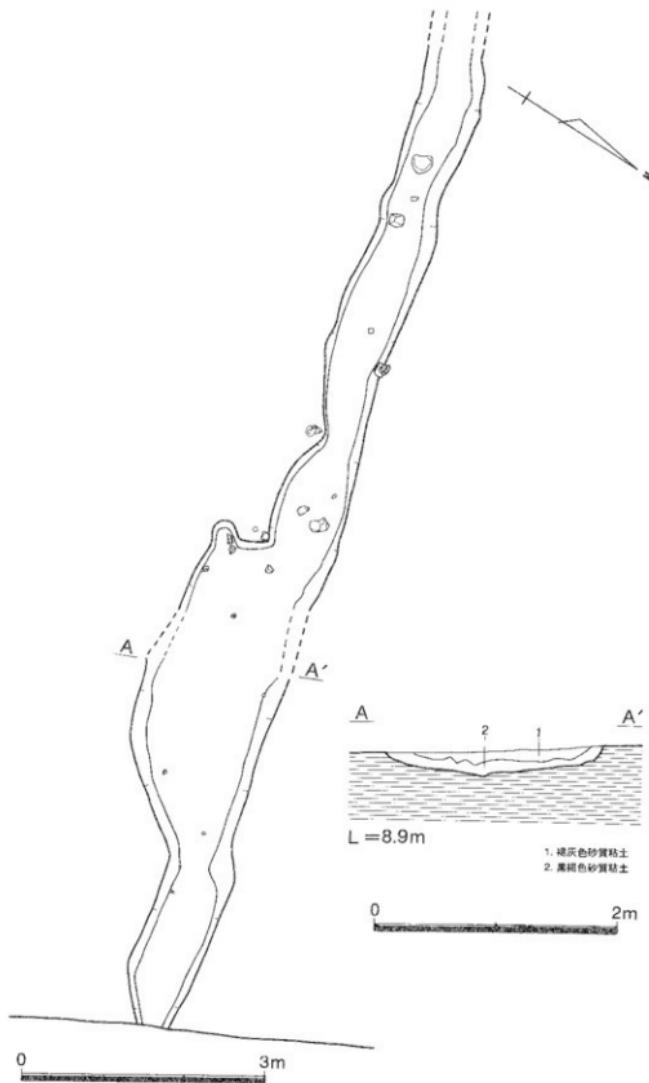
番号	遺構番号	検出地点	形狀	大きさ(cm)	深さ(cm)
22	S P11064	F-3	円形	25	29
23	S P11065	F-3	円形	40	45
24	S P11066	F-3	楕円形	30×26	17
25	S P11067	F-3	円形	29	20
26	S P11068	F-3	円形	26	15
27	S P11069	F-3	円形	32	31
28	S P11070	F-2	円形	18	37
29	S P11071	F-2	円形	10	10
30	S P11072	F-2	円形	17	5
31	S P11073	F-2	円形	17	24
32	S P11074	F-2	円形	13	24
33	S P11075	F-2	円形	12	15
34	S P11076	F-2	円形	10	6
35	S P11077	F-2	楕円形	22×10	9
36	S P11078	F-2	円形?	(12)	18
37	S P11079	F-2	円形?	(15)	17
38	S P11080	F-2	円形	22	14
39	S P11081	F-2	円形	6	10
40	S P11082	F-2	円形	16	12
41	S P11083	E-2~F-2	円形	25	3

第3表 1-1区第3遺構面ピット計測表

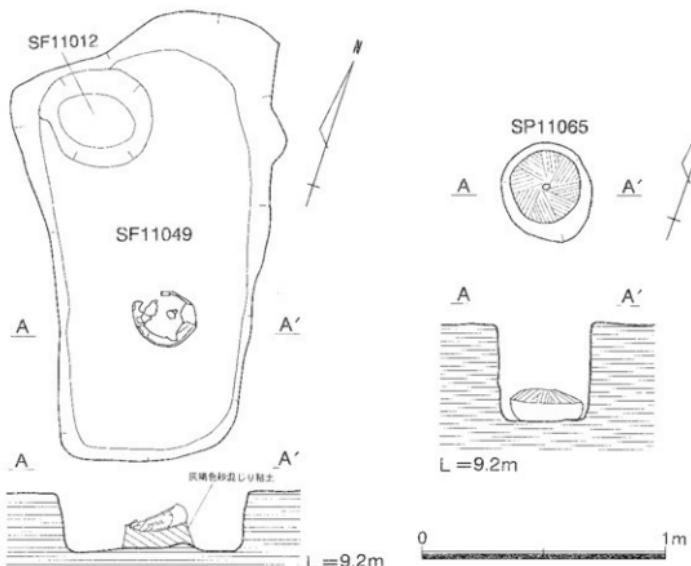
溝状遺構SD11084（第11図、図版4）

D 2 グリッドから D 3 グリッドにかけて、第5層の縁辺部に沿って調査区をほぼ東西に横切る形で検出された。検出長約12.5m、規模は幅45~163cm、深さは9.1~27.5cm余りを測る。覆土は2層に分かれ、上層は褐灰色砂質粘土、下層は黒褐色砂質粘土である。遺物は上層質土器が2点出土している（第13図16・17、図版13）。いずれもかわらけで、16は口径の推定11.1cm、器高3.3cmを測るもので、体部は内湾ぎみに立ち上がり、中位から外反する形状を呈するものである。17は口径6.5cm、器高2cmの小形のもの

であり、体部は内湾ぎみに立ち上がり、内面のナゲ調整も比較的丁寧に行われているものである。いずれも15世紀後半から末のものであろう。



第11図 溝状遺構SD11084実測図



第12図 土坑SF11049内羽釜出土状況実測図・ピットSP11065内石臼出土状況実測図

4 包含層の遺物

2層、3層、4層内および5層上面から遺物が出土している。その内訳は陶磁器、土師質土器、石製品、金属製品および錢貨である。これらの遺物の中で、とくに全体の形状が図示できるものについて、以下に記述する。

1) 2層出土の遺物

2層からは漆椀片および砥石、さらに錢貨が、それぞれ1点ずつ出土した。漆椀片は、内面が黒漆の上に赤漆が掛けられ、外面は黒漆が施されたものである。高台はほぼ船直方向に挽き出されているが、先端が欠けているためその形状は不明である(第14図1、図版17)。砥石は流紋岩から成る不定形な方柱状のもので、表・裏の2面に砥面が認められる。いずれも良く使い込まれており、とくに表面は非常に平滑である(第16図2、図版19)。錢貨は寛永通寶で、書体からいわゆる新寛永と判断できる(第17図1、図版19)。いずれも、後世の耕作により混入したものであろう。

2) 3層出土の遺物

3層からは陶磁器・土師質土器(第13図3~11、図版12・13)、金属製品および錢貨が出土している。陶器には仏花瓶、皿、擂鉢が見られる。仏花瓶(3)は底部のみの破片である。底面には回転糸切り痕が残り、外面には鉄袖が施されている。17世紀後半から18世紀前半の瀬戸・美濃産である。皿は3点で(6・7・8)、6は体部中位で内湾し、口縁部が僅かに外反する形態の瀬戸・美濃産の志野の丸皿である。16世紀末から17世紀初頭のものであろう。7は体部が内湾ぎみに立ち上がり、外面および口縁端部

にへラ削りが施されている。瀬戸・美濃産の志野の菊皿の小片で内面に型をあてて成形されたものと考えられる。17世紀前半に位置付けられよう。8は体部が大きく内湾して立ち上がり、口縁部が外反する形態で、外面および内面上半に釉が施されているが、2次焼成を受けて白濁している。16世紀前半の瀬戸・美濃産である。擂鉢は2点で(10・11)、10は口縁部の破片であり、口縁端部が僅かに内側に折り返されることにより口縁内側に小穴器が形成されているものである。擂り目は荒く引かれている。16世紀半ばから末にかけての瀬戸・美濃産である。11は口縁部の小片で、荒い擂り目を持つ。17世紀半ばから後半の志戸呂産であろう。

磁器には碗(9)が見られる。体部下半は内湾ぎみで中位から直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する形態で、しっかりつく高台は端部に平坦面を持つ。体部外面にはクロ成形時の緩やかな稜が認められる。肥前産の青磁碗で、17世紀半ばから後半のものであると思われる。

土師質土器はかわらけが2点見られる(4・5)。4は底部から直線的に緩やかに立ち上がり、体部中位で内湾し口縁部がわずかに外反する形態を持つ。内・外面とも回転ナデが認められ、底部には糸切り痕が残る。5は体部がやや外反ぎみに立ち上がり、口縁部が僅かに内湾する形態を持つもので、体部内面には5回の指ナデの痕跡が観察できる。底部には糸切り痕が見られる。

金属製品は2点で、いずれもキセルである(第17図13・14、図版19)。13は火皿で楔形の形状を呈するものである。残存部の状態から脂返しの溝曲が小さいことが推定できる。14は吸口で、ラウに取り付く部分が一段とく巻かれた「肩付」と呼ばれるタイプである。

錢貨は4点出土した(第18図3～6、図版19)。その内、3は祥符元寶、4は天聖元寶、5は永樂通寶であり、いずれも中世の銅錢である。6については一部欠損のため錢貨名が判別し難いが、残存部分から北宋の天聖元寶か紹聖元寶のいずれかであると推定できる。

3) 4層出土の遺物

4層からは陶器および木製品が出土している。

陶器は2点で(第13図14・15、図版12)、いずれも瀬戸・美濃産の志野の丸皿である。14は体部が内湾ぎみに立ち上がり、中位から口縁部にかけて直線的な形態を示すもので、底部内面には3ヵ所のトチンの跡が認められる。15は体部が直線的になだらかに立ち上がり中位でやや湾曲する形態で、14と同じく底部内面に3ヵ所のトチンの跡が認められる。釉は底部も含め内・外面全体に施されているが、底部外面には一部拭った跡が観察できる。14、15ともに16世紀末から17世紀初頭のものと位置付けられよう。

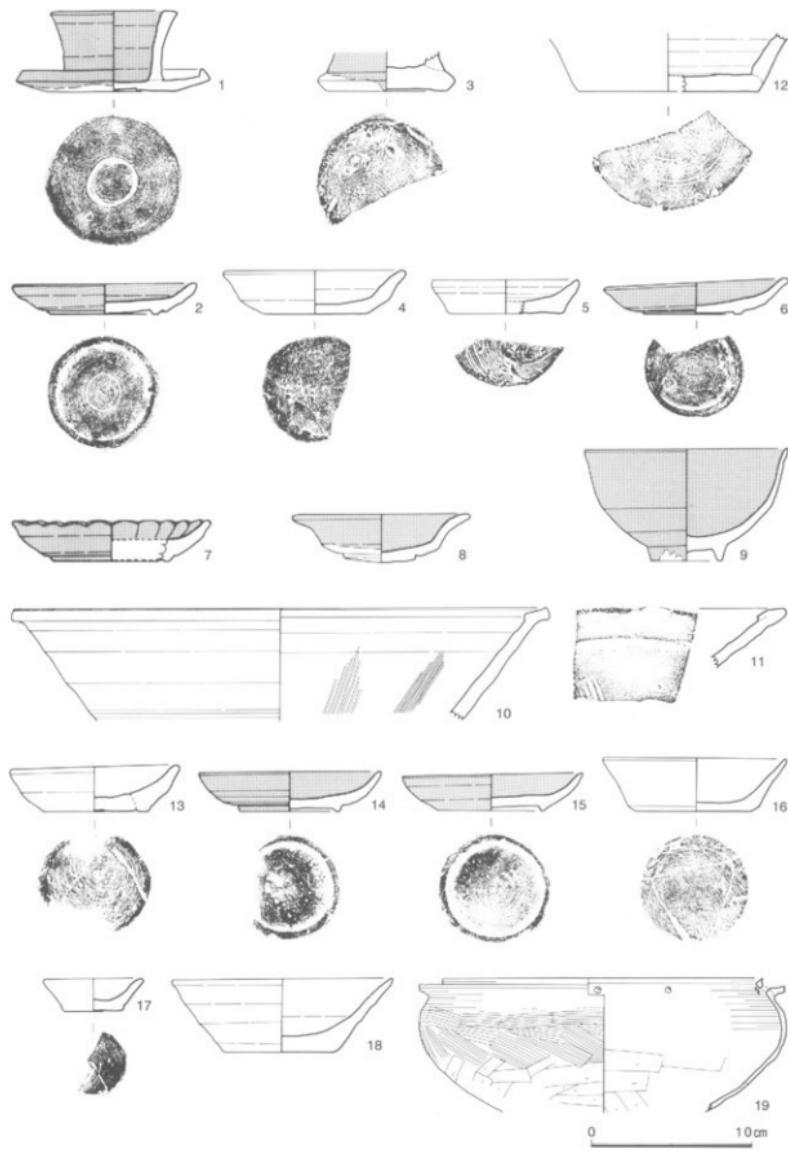
木製品には漆椀と曲物が見られる(第15図9～11、図版17)。漆椀は2点で、9は内面が黒漆の上に赤漆塗り、外面は黒漆塗りで、2羽の鶴と不明文様が対になって描かれている。底部外面には「田」という形の線刻が見られる。10は高台部分のみの破片で、黒漆が部分的に残存している。曲物(11)は円形曲物の底板か蓋板と思われる円板で、やや歪んだ形状を呈している。周縁部は斜めに加工されている。

4) 5層上面出土の遺物

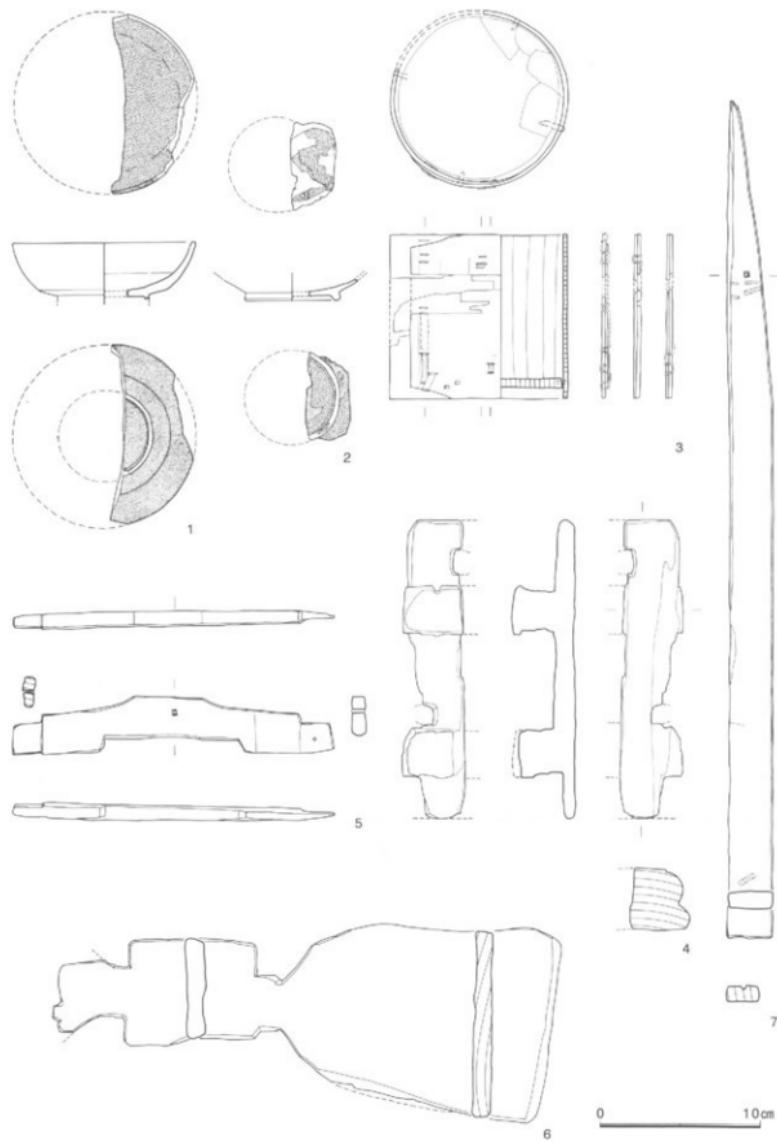
5層上面からは土師質土器が1点出土した(第13図18、図版13)。壺身で全体に回転ナデが施され、体部外面には緩やかな稜線が認められる。底部には糸切り痕の上に下し台の痕跡が残る。15世紀頃のものと思われる。

5) その他の出土遺物

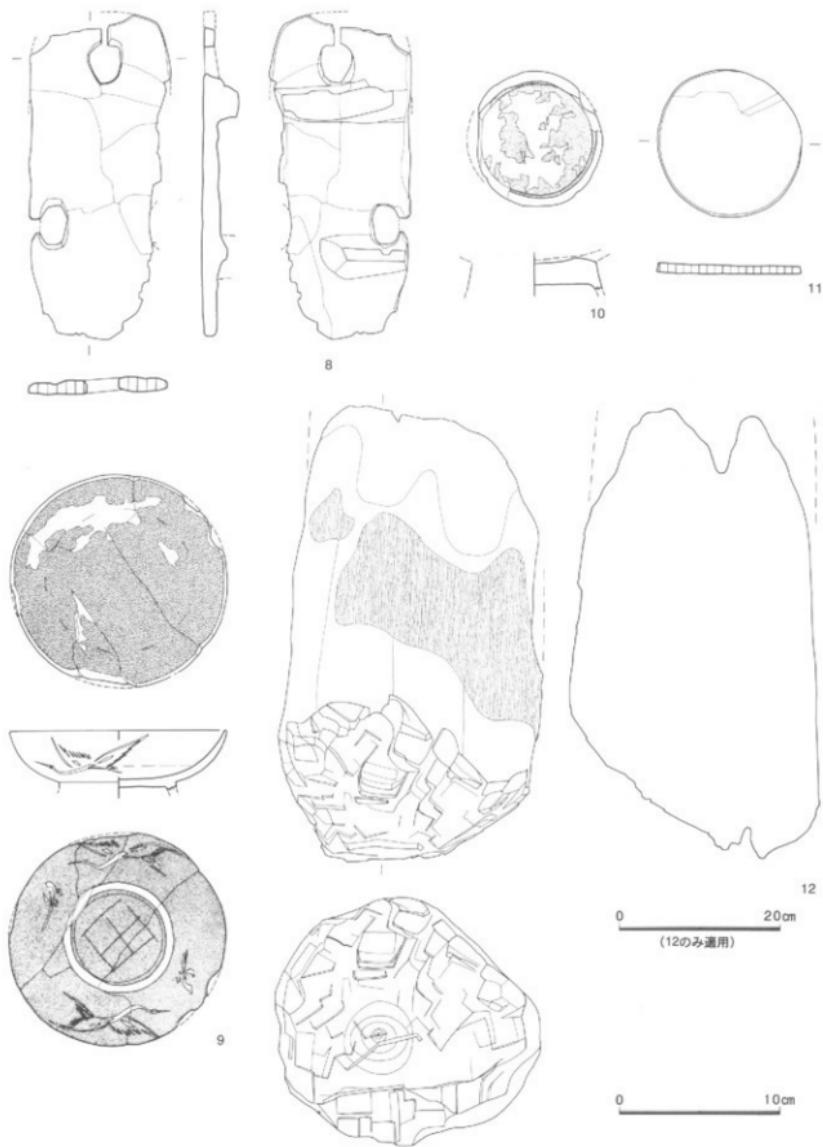
東側排水溝内から砥石が1点出土している(第16図1、図版19)。凝灰岩から成る短冊状のもので、砥面は2面で擦痕も認められる。



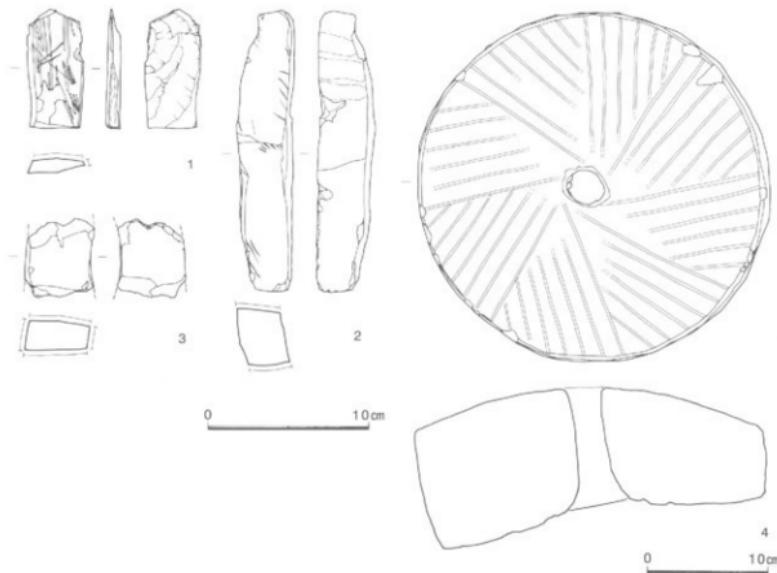
第13図 1-1区出土土器・陶磁器実測図



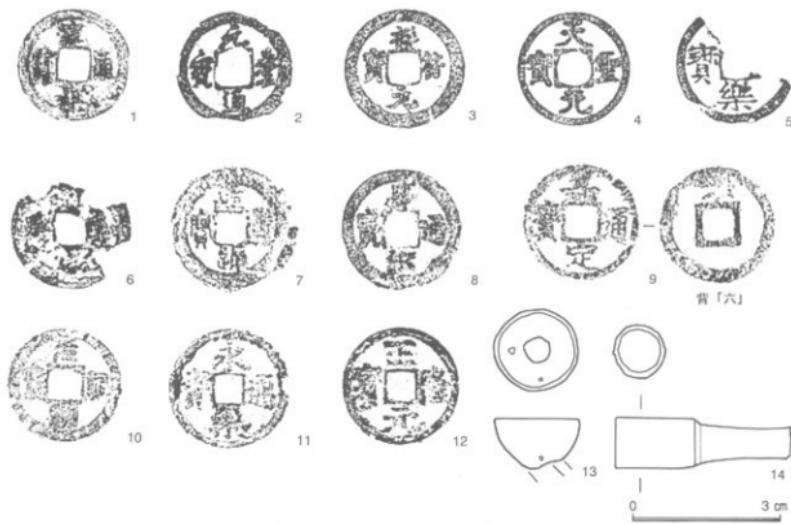
第14図 1-1区出土木製品実測図(1)



第15図 1-1区出土木製品実測図(2)



第16図 出土石製品（砥石・石臼）実測図



第17図 出土銭貨拓影・出土金属製品（キセル）実測図

番号	種別	器種	出土位置・層位	法 跡(cm)			残 存	色 調	備 考	図版
				口径	體高	底厚				
1	陶器	灯明皿	B-3・3層	6.0	5.1	7.2	底部1/3欠損	オリーブ色	灰釉 武部回転ヘラケツリ 潟戸・美濃産	12
2	陶器	皿	D-3・3層	10.7	1.9	6.1	口縁部一部欠損	灰白色	全面に水野釉 潟戸・美濃産	12
3	陶器	仏花瓶	E-3・3層			7.5	底部3/5	にほい赤褐色	鐵釉 武部回転系切り放 潟戸・美濃産	12
4	土瓶(土器)	かわらけ	D-2・3層	10.8	2.7	6.4	1/3	にほい橙色	体部全体に回転ナメ 底部系切り痕	13
5	土瓶(土器)	かわらけ	D-3・3層	9.0	2.1	7.2	1/3	橘色	前面にナメ 底部系切り痕	13
6	陶器	皿	E-3・3層	10.9	2.6	5.4	3/5	灰白色	水野釉が部分的に発泡 潟戸・美濃産	12
7	陶器	皿	E-3・3層	(2.0)	2.6	6.5	1/7	灰白色	全面に水野釉 潟戸・美濃産 完形	12
8	陶器	皿	D-2・3層	10.3	3.1	4.5	完形	灰白色	釉が2次焼成で白濁 潟戸・美濃産	12
9	製造	瓶	E-3・3層	12.4	6.7	3.7	口縁部1/6・体部1/3	オリーブ色	肥前青磁	12
10	陶器	壺	D-2・3層	(2.0)			口縁部1/4	暖褐色	粗い目 潟戸・美濃産	12
11	陶器	壺	E-3・3層				口縁部1/24	赤褐色	粗い目 鉄釉 志戸尾座	12
12	陶器		S D11033				底部1/3	灰褐色	器種特定できず 外面鉄釉 志戸尾座	12
13	土瓶(土器)	かわらけ	S D11035	10.1	2.8	6.4	1/3	橘色	底部系切り痕	13
14	陶器	皿	C-3・4層	6.1	2.5	(6.2)	1/2	灰白色	全面に水野釉 内面に3つのテン跡	12
15	陶器	皿	D-3・4層	11.1	2.3	6.6	口縁部一部欠損	灰白色	全面に水野釉 内面に3つのトチ痕	12
16	土瓶(土器)	かわらけ	S D11084	(1.0)	3.3	7.1	2/3	にほい青色	全体にナメ 底部系切り痕	13
17	土瓶(土器)	かわらけ	S D11084	6.0	2.0	3.5	1/2	にほい青色	全体にナメ 底部系切り痕	13
18	土瓶(土器)	环形	E-3・5層	13.4	4.6	6.5	口縁部一部欠損	橘色	体部全体に回転ナメ 底部系切り痕	13
19	土瓶(土器)	羽釜	S P11049	19.8			口縁部へ底部2/3	浅黄褐色	深い圓球形の体部(体部底大径22.8cm)	13

第4表 1-1区出土土器・陶磁器計測表

番号	遺 物 名			出土位置・層位	法 跡(cm)			本取り	樹 種	備 考	図版
	大項目	中項目	小項目		長さ(口径)	幅(徑・底径)	厚さ(器高)				
1	古墳	挽物	椀	C-3・2層	(11.4)	(5.7)	3.6	板口	ブナ	漆塗	17
2	古墳	挽物	椀	S D11035		(6.0)	1.4	板口	トネノキ	漆塗	17
3	古墳	曲物	円形曲物(側板)	S D11033		10.2		板口	ヒノキ		17
			円形曲物(内板)	S D11033		11.6	5.5	板口	ヒノキ		17
4	蓑舟具	下駄		S D11035	18.6	3.9	3.9	板口	イヌマキ		18
5	用途不明品	板状木製品		S D11035	29.0	3.6	1.1	板口	モミ		17
6	用途不明品	板状木製品		S D11035	31.6	12.4	1.4	板口	モミ		17
7	用途不明品	板状木製品		S D11035	52.2	3.1	1.2	板口	ヒノキ		18
8	蓑舟具	下駄		S X11039	29.3	8.7	2.3	松口	ケヤキ		18
9	古墳	挽物	椀	E-3・4層	13.0	6.8	3.8	板口	ケヤキ	漆塗	17
10	古墳	挽物	椀	E-3・4層	(8.4)		2.1	板口	ケヤキ	漆塗	17
11	古墳	挽物	円形曲物(側板)	D-3・3層	9.2	9.0	0.7	板口	スギ		17
12	絶縁材	柱		S P11053	56.7	32.9	31.0	心持	ニノキ		18

第5表 1-1区出土木製品計測表

番号	種別	調査区	出土位置・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	色 調	石材	備 考	図版
1	砥石	I-1	束縛排水溝	(7.0)	3.5	0.9	31.5	淡黄色	凝灰岩、流紋岩質、顆粒		19
2	砥石	I-1	F-3・2層	17.4	2.9	3.4	229.6	オーブ淡色	流紋岩質、長石を含む		19
3	砥石	2-1	H-2・表操	(4.9)	4.2	1.9	56.8	灰黃褐色	凝灰岩	流紋岩質、かなり風化が進んでいる	19
4	石臼	I-1	S P11059	直径29.5		11.1	1324.0	灰褐色	安山岩	中央直徑3.1cm、標石と長石を中心とする	19

第6表 出土石製品計測表

番号	名 称	調査区	出土位置・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	重さ(g)	初鑄年代	書 体	備 考	図版
1	寛永通寶	1-1	E-3・2層	23.5	6.5	2.2	1697年	新寛永		19
2	元豐通寶	1-1	S F11012	24.0	7.0	1.8	1078年。北宋	行書		19
3	祥符元宝	1-1	C-3・3層	24.5	6.5	3.1	1009年。北宋	真書		19
4	大聖元寶	1-1	E-3・3層	23.5	7.0	2.6	1023年。北宋	真書		19
5	永泰通寶	1-1	E-3・3層			1.6	1088年。明		一部欠損	19
6	仁宗通寶	1-1	E-3・3層			1.4			一部欠損	19
7	元豐通寶	1-2	S X12034	25.5	6.5	3.4	1078年。北宋	篆書		19
8	寛永通寶	1-2	S X12034	25.0	7.0	3.1	1638年。北宋	真書		19
9	嘉定通寶	1-2	S X12034	29.0	6.5	2.8	1208年。南宋	真文(六)	六道鉄	19
10	元祐通寶	1-2	S X12034	24.0	7.0	3.3	1086年。北宋	篆書		19
11	永泰通寶	1-2	S X12034	24.5	6.0	3.0	1088年。明			19
12	正隆元寶	1-2	S X12034	24.5	6.0	2.8	1157年。金			19

第7表 出土銭貨計測表

番号	種 別	調査区	出土位置・層位	法 量 (cm)					備 考	図版	
				全長	全高	火皿径	縁口径	両部径	吸口径		
13	キセル(瓶口)	1-1	E-3・3層		1.0	1.7~1.8			1.6	火皿のみ(厚さ0.1cm)	19
14	キセル(吸口)	1-1	E-3・3層	3.6			1.1	1.7	0.7	5.6	19

第8表 出土金属製品計測表

第2節 1-2区の調査

1 概要

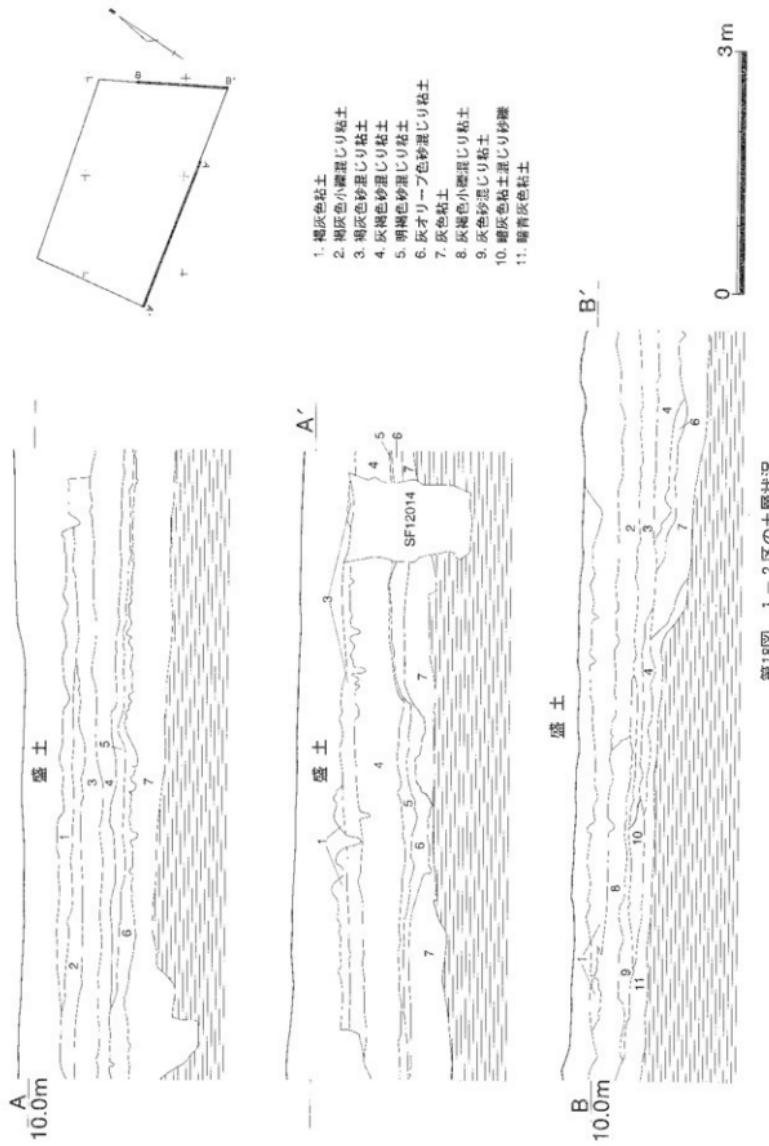
1-2区は1-1区の北西側に位置し、1-1区とは隣接する寺院の参道（三島市市道）によって分けられている。基本的に1-1区の延長部分であり、したがって現地表面の標高もおよそ10mを測り、1-1区のそれとほぼ一致する。しかしながら、後述するように1-2区では2-1区の微高地部分からの土砂の流入とその堆積が顕著に認められるため、1-1区とは土層の堆積状況が異なる部分もあり、遺構面としての把握は困難であった。

遺構は3層・4層の各上面で検出され、それぞれ第1遺構面・第2遺構面とした。第1遺構面では、竪穴状遺構、ピット群などを検出したが、出土遺物が微量で、しかもそのほとんどが流れ込みによるものと考えられるため、遺物から遺構の時期を特定するのは困難である。第2遺構面は中世末に比定され、人骨片を伴う土坑墓およびピット群などを検出した。

2 土層の状況（第18図）

1-2区で確認された土層は、現地表（標高約10.3m）から約1.8m下（標高約8.5m）までである。この中は盛土を除いて12層に分けることができ、基本的に上位から第1層～第12層の名称を付けた。

盛土は主に山上から成り、最も厚い部分で70cm余りである。盛土以下の上層は、前述したように微高地部分（2-1区）からの土砂の流れ込みが顕著なため、調査区の北西側と南東側では土層の堆積状況が異なり、1-1区に近い南東側の方が比較的安定した土層の堆積が見られた。以下、その状況を上層より順に詳述する。



第18図 1-2区の土層状況

- 第1層 褐灰色粘土** やや粘性を帯び比較的しまりも良い。砂や小礫の混入はほとんど認められない。ほぼ調査区全域で確認され、とくに東隅で顕著である。
- 第2層 褐灰色小礫混じり粘土** 径2~3mm程度の小礫を多く含み、しまりも良い。炭化物の混入も認められる。調査区の東隅にのみ認められる。
- 第3層 褐灰色砂混じり粘土** 小礫を含むが粘性を帯びしまりもある。上面で遺構確認を行った。
- 第4層 灰褐色砂混じり粘土** 径1~2mm程度の小礫を含み、やや粘性を帯びしまりも良い。上面で遺構確認を行った。
- 第5層 明褐色砂混じり粘土** 砂の混入が認められるが、粘性度もあり非常に固くしまっている。調査区の南西側で顕著に見られ、1-1区で確認された第6層に相当する。
- 第6層 灰オーリーブ色砂混じり粘土** 砂の混入が僅かに認められ、粘性を帯びしまりもある。1-1区で確認された第7層に相当する。
- 第7層 灰色粘土** 粘性が大変に強い。1-1区で確認された第8層に相当する。
- 第8層 灰褐色小礫混じり粘土** 灰色を強く帯びた粘土で、径5~20mm程度の小礫を含む。調査区の北西側で確認された。
- 第9層 灰色砂混じり粘土** 僅かに砂の混入が認められる。酸化により褐色化した部分がマーブル状に見られる。第8層と同じく調査区の北西側で確認された。
- 第10層 暗灰色粘土混じり砂礫** 礫主体の砂礫の中に非常に粘性の強い暗灰色粘土が混入している。礫は径10~20mm程度であり、砂は粗砂である。調査区の北西側で確認された。
- 第11層 暗青灰色粘土** 径1mm程度の小礫と砂を僅かに含むが、粘性が大変に強い。

3 遺構と出土遺物

1) 第1遺構面(第19図、図版5)

第1遺構面は第3層の褐灰色砂混じり粘土上面で検出したものである。遺構はピット群、土坑、竪穴状遺構、溝状遺構などを検出した。

ピット群(第19図、図版5)

ピットはG2グリッドで4基、G3グリッドで5基検出した。それぞれの規模は第9表のとおりであり、平面形状は円形や楕円形のもので占められている。また、その配列はSP12002、SP12003、SP12005、SP12008、さらにSP12005、SP12006、SP12009のように直線的に並ぶものも認められる。しかし、いずれのピットからも遺物の出土ではなく、その性格は判然としない。



第19図 1-2区第1遺構面全体図

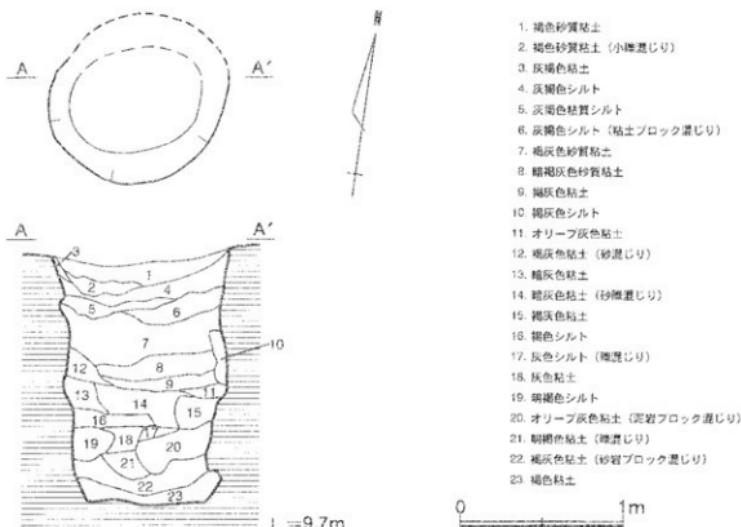
土坑SF12014(第20図、図版5)

G3グリッドで検出した。調査区の南隅に位置し、その北西側は排水溝により欠いているが、ほぼ円形の平面形状と考えて良いであろう。残存部の径約113cm、検出面からの深さは約156.5cmを計測する。

番号	遺構番号	検出地点	形 状	大きさ(cm)	深さ(cm)
1	S P12001	G 3	円 形	25	7
2	S P12002	G-3	円 形	48	30
3	S P12003	G-3	椭円形	41×25	21
4	S P12004	G-3	円 形	31	25
5	S P12005	C 3	円 形	33	29

番号	遺構番号	検出地点	形 状	大きさ(cm)	深さ(cm)
6	S P12006	G-2	円 形	33	20
7	S P12007	G-2	円 形	12	8
8	S P12008	G-2	円 形	36	13
9	S P12009	G-2	円 形	44	27

第9表 1-2区第1遺構面ピット計測表

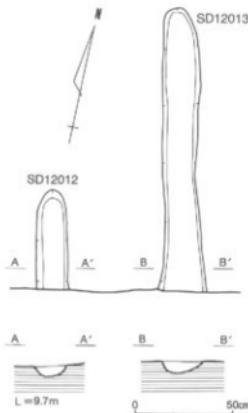


第20図 土坑SF12014実測図

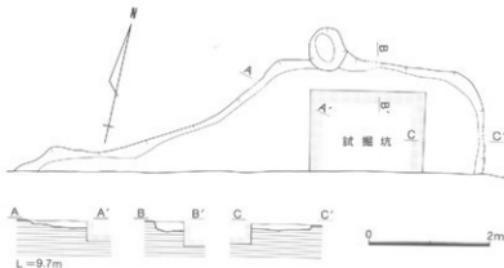
掘り方はほぼ垂直の円筒状をなしており、底部も平坦である。覆土は複雑で細かく23層に分けることができる。全体的に砂礫を含む層が多く認められ、上層から中層にかけては炭化物や土器の細片の混入も見られた。また、下層では18層、20層のように植物遺体を多く含む層や、19層のように腐蝕した丸太材を含む層も確認された。遺物は土師質の土器や丸太材が出土しているが、土師質土器は細片のため、また、丸太材は腐蝕が激しいため、いずれも図示できなかった。

溝状遺構SD12012・SD12013（第21図）

溝状遺構は2条検出した。SD12012はG 3グリッド、SD12013はG 2グリッドに位置しており、いずれもその一部が排水溝により切られているため全容は明らかでない。それぞれの残存部分の規模は、SD12012が長さ約52cm、幅約16cm、深さ約7.2cm、SD12013が長さ約147cm、幅約17cm、深さ約6.1cmを測る。覆土は、SD12012、SD12013とともに第2層の褐灰色小礫混じり粘土である。いずれも出土遺物もなく、その性格は不明とせざるを得ない。



第21図 溝状遺構SD12012
・SD12013実測図



第22図 不明遺構SX12010実測図

不明遺構SX12010（第22図、図版5）

G 2 グリッドで検出した。調査区の南西端に位置し、排水溝により切られているため全体のプランは不明である。検出部分は長軸770cm、短軸180cm、深さは最も深いところで17.5cm余りを測る。端部から中央部付近に向かってなだらかに落ち込む形状を呈している。覆土は第2層の褐灰色小礫混じり粘土である。出土遺物はなく、その性格は不明であるが自然の落ち込みの可能性が高いとも言えよう。

竪穴状遺構SX12011（第23図、図版6）

G 2 グリッドで検出した。長軸385cm、短軸296cm、深さは39cm余りを測る。ほぼ隅丸方形であるが、南北隅のみ大きく内側に湾曲する平面形状を呈している。また、底面はほぼ平坦である。覆土は第2層の褐灰色小礫混じり粘土であり、一部に炭化物を多く含む黒色の粘土が認められた。遺物は擂鉢の口縁部の小片が1点出土した（第26図22、図版12）。端部が僅かに折り返され縁帯が形成されているもので、内・外面とも鉄袖が施されている。16世紀末の瀬戸・美濃産であると思われるが、前述したように流れ込みの可能性も高く、この遺物のみをもって遺構の年代決定の資料とはし難い。当遺構が後述する第2遺構面検出のS X12034（中世後半から末に比定）を掘り込んでいることから、少なくとも、当遺構がS X12034より新しいことは確かである。なお、遺構の性格も不明である。



第23図 竪穴状遺構SX12011実測図

2) 第2遺構面(第24図、図版6)

第2遺構面は第3層を除去し、第4層の灰褐色砂混じり粘土上面で検出したものである。遺構は、ピット、土坑および土坑墓を検出した。

ピット・土坑(第24図、図版6)

ビットはG 2グリッドで14基、G 3グリッドで3基検出した。それぞれの規模および平面形状は第10表のとおりであるが、S P 12018、S P 12027、S P 12030、S P 12031についてはトレーチや排水溝でその一部を欠いているため、正確な規模・形状は明らかでない。ビットの大部分がG 2グリッドの南側に集中する傾向が認められるが、とくに建物の存在を認定するまでには至らなかった。また、全てのビットにおいて遺物の出土も見られなかつた。

土坑はG 2 グリッドで2基検出した。S F 12032は隅丸方形の平面形状で、長軸約44cm、短軸約34cm、深さは約4cmと浅いものである。S F 12033は排水溝でその一部を欠いているため正確な規模・形状はわからないが、検出部分の長軸は約47cm、短軸は約40cm、深さは約12cmを測るものである。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

This geological map shows the locations of various boreholes and numbered pits across the Saitama region. Key features include:

- Boreholes:** SF12032, SF12033, and SF12034.
- Pits:** Numbered pits from 1 to 17, with pit 1 being the largest and deepest.
- Geological Units:** The map includes labels for the "H" horizon, "B" horizon, and "A" horizon.
- Scale:** A scale bar indicates distances up to 5 meters.

第24図 1-2区第2遺構面全体図

土坑墓SX12034（第25図、図版7）

G 2 グリットに位置し、1基のみ単独で検出された。第1遺構面で検出した竪穴状遺構 S X12011の掘り込みにより東側部分は欠いているが、その平面形状はほぼ隅丸長方形と考えて良いであろう。残存部分の規模は長軸約121cm、短軸約95cm、深さは最も深い部分で約20cmを測る。底部は概ね平坦で、ほぼ逆台形の断面を持つ。覆土は第3層の褐灰色砂混じり粘土である。内部からは、土葬された一体分の人骨および土質質土器、鍵貨が出土した。

人骨は、頭蓋骨をはじめ上肢骨、下肢骨の一部など計10片出土したが、いずれも残存状態は良好とは言えない。頭蓋部分で残存していたのは、頭頂骨および右側頸鱗、後頸鱗のいずれも一部と下顎骨である。脆弱のため解体できず全容は窺い知れないが、実見の限りにおいて下顎骨には7本の歯が確認でき、また、上顎骨は残存していないが上歯も8本確認できる。これらの歯の計測・観察等の結果、当人骨は30～50代のいわゆる壮年ないし熟年の男性であると推測される。詳細は特論の「三島市平田前田遺跡の土坑墓内出土の一中世人骨について」を参照されたい。

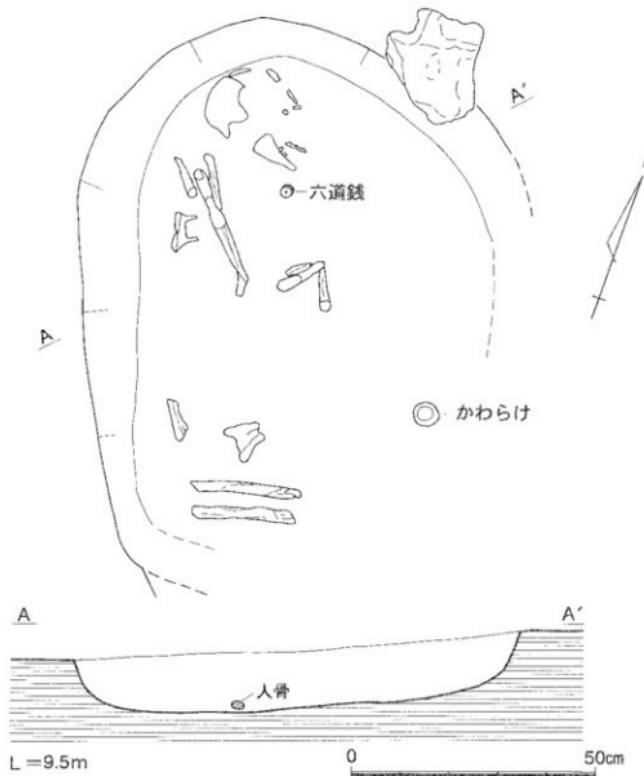
土師質上器はかわらけで(第26図23、図版13)、体部がほぼ直線的に立ち上がる形態を持つ。内・外面ともナブ調整が施され、底部には回転糸切り痕が残る。

銭貨はいわゆる六道銭である（第17図7～12、図版19）。その内訳は元豊通寶・皇宋通寶・嘉定通寶・元祐通寶・永楽通寶・正隆通寶が各1枚ずつで、いずれも中世の渡来銭である。下顎骨のほぼ東下約20cmの土坑墓底部から6枚が重なって出土した。渡来銭のみの六道銭を埋納する墓は近世のごく初頭のものを含む可能性があるとはいはば中世の墓であると考えられていること（藤沢：1994）、および出土銭貨のうち永楽通寶の初鋸年代が最も新しく、1408年であることを併せ考えれば、当土坑墓の年代は中世後半から末に位置付けられよう。

番号	遺構番号	検出地点	形 状	大きさ(cm)	深さ(cm)
1	S P12015	G-3	楕円形	26×18	13
2	S P12016	G-3	円 形	36	45
3	S P12017	G-3	円 形	14	9
4	S P12018	G-2	円形?	(27)	15
5	S P12019	G-2	円 形	29	13
6	S P12020	G-2	円 形	24	19
7	S P12021	G-2	円 形	17	3
8	S P12022	G-2	円 形	34	9
9	S P12023	G-2	円 形	22	33

番号	遺構番号	検出地点	形 状	大きさ(cm)	深さ(cm)
10	S P12024	G-2	円 形	20	13
11	S P12025	G-2	楕円形	23×14	14
12	S P12026	G-2	円 形	13	3
13	S P12027	G-2	円形?	(13)	12
14	S P12028	G-2	円 形	19	9
15	S P12029	G-2	円 形	22	11
16	S P12030	G-2	—	—	10
17	S P12031	G-2	円形?	(15)	7

第10表 1-2区第2遺構面ピット計測表



第25図 土坑墓SX12034実測図

4 包含層の遺物（第26図20・21・24～31、図版13・14・19）

第2層、第3層、第4層、第5層、第11層から遺物が出土している。その内訳は、須恵器片が僅かに認められるが、その大部分は土師器片である。しかも、そのほとんどが細片で摩耗しており、「2 土層の状況」でも述べたように隣接する2-1区からの流れ込みによるものが多いと考えられる。この中で、辛うじてその形状を図示できるものについて、以下に記述する。

1) 2層出土の遺物

2層からは土師器が1点出土している(20)。縁の口縁部の破片であり、外溝ぎみに開くもので、外面は横方向のハケ調整のちナデが施され、内面は横方向のハケ調整がなされている。古墳時代後期のものであろう。なお、正確な出土位置は不明であるが、20と同時期に比定され、ほぼ同様の成形技法をとる土師器の壺の口縁部の破片も出土している(21)。口縁の開きが比較的小さいものである。

2) 3層出土の遺物

3層からは土師器が1点出土している(24)。环蓋の破片であり、内面が丁寧なヘラ削きにより調整されている。奈良時代のものであろう。なお、24と同時期に比定される环身の破片が、南側排水溝内から出土している(25)。体部外面はナデ調整、内面はナデ調整のちヘラ磨きが施されたものである。

3) 4層出土の遺物

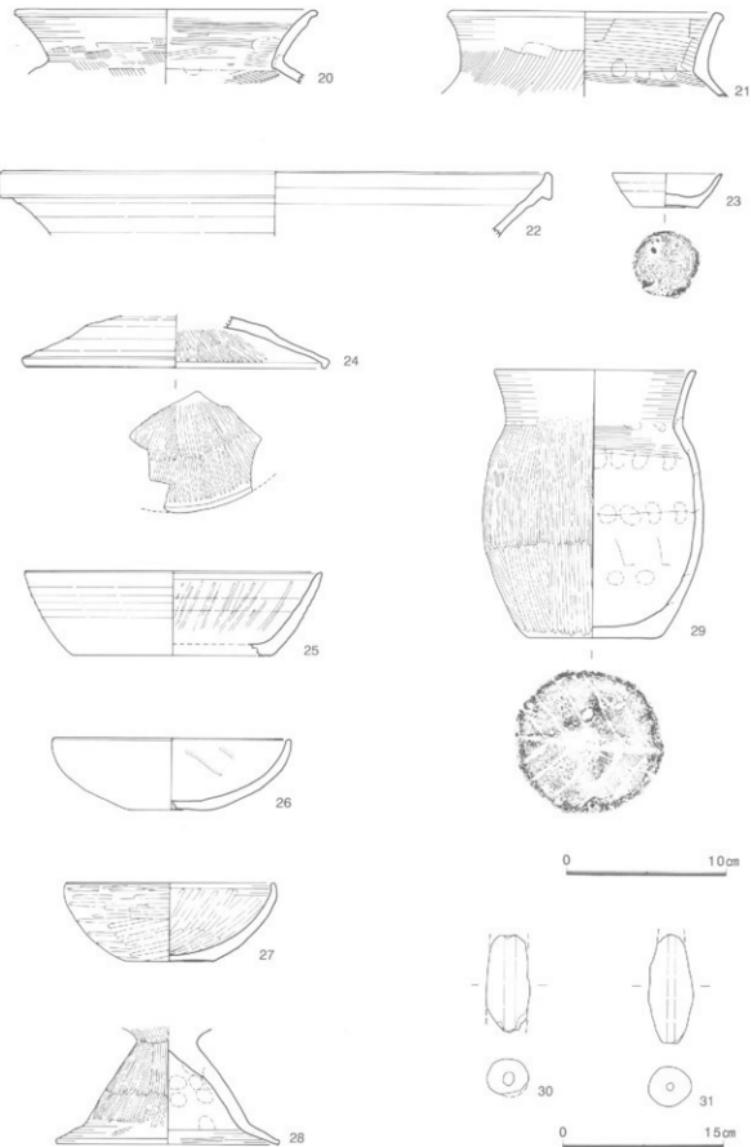
4層からは土師器と土製品が出土している。土師器は环身の破片である(26)。全体に摩耗が顕著であるが、一部に削きの跡が認められる。古墳時代中期後半から後期のものであろう。土製品は土鍤である。管状、土師質で、径が約2.0cmの紡錘形の形状を呈するものである(31)。なお、同じく管状、土師質の土鍤が表土から1点採集されている(30)。

4) 5層出土の遺物

5層からは土師器が2点出土している(27・28)。27は环身で、体部内・外面ともにヘラ磨きがなされ、口縁部内面のみナデが施されている。古墳時代後期のものと思われる。28は高环の脚部のみの破片である。脚が折れて大きく開く形状のもので、外面はヘラ磨きがなされ、脚はナデ調整のち磨きが施されている。古墳時代後期のものであろう。

5) 11層出土の遺物

11層からは土師器が1点出土している(29)。器高16.7cmの小型の壺である。長胴・平底で体部外面にはタテ方向のハケ調整のちタテ方向の磨きが施され、体部内面には指頭痕が残る。底部は内面に炭化物の薄い付着が認められ、外面には木葉痕が観察される。口縁部は内・外面とも横ナデの調整が施されている。古墳時代後期のものと思われる。



第26図 1-2区出土土器・土製品(土錘)実測図

番号	種別	轟	出土位置・層位	法量(cm)			残存	色調	備考	図版
				口径	轟高	底径				
20	土師器	轟	G-2・2層	(18.4)			口縁部1/5	に赤い褐色 脇径14.7cm		14
21	土師器	轟	G-2	(16.0)			口縁部1/2	褐色 脇径11.7cm		15
22	陶器	盤鉢	S X12911	(33.0)			口縁部1/15	褐色赤褐色	口縁端部墨直 鉄鉢 湿戸・美濃作	12
23	上部質土器かわらけ	S X12034	6.8	2.2	4.0	1/3		褐色	底部糸切り痕	13
24	上部器	环造	G-3・3層	(9.5)			1/10	褐色	内面にヘラミガキ	14
25	上部器	环造	南側排水溝内	(18.0)	5.2	(12.0)	1/8	褐色	内面にヘラミガキ	14
26	上部器	环造	G-3・4層	(14.5)	4.5	(4.8)	1/6	褐色	底部木堀痕	13
27	上部器	环身	G-2・5層	(12.9)	4.9	3.5	口縁部1/2・体部4/5	浅黄褐色	底部木堀痕	13
28	土器類	空环	G-2・5層			(13.7)	脚部2/3	浅黄褐色	脛径13.7cm	14
29	土師器	争	G-3・11層	(12.0)	16.7	7.9	1/3	に赤い褐色	底部木堀痕	14

第11表 1-2区出土土器計測表

番号	種別	調査区	出土位置・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	乳径(cm)	重さ(g)	色調	備考	図版
30	土器	1-2	表 横	4.0	1.0	0.6	9.5	明赤褐色	内面部欠損	19
31	土器	1-2	D-2・4層	4.2	2.0	0.3	13.0	褐色	片端部欠損	19

第12表 出土土製品計測表

第3節 2-1区の調査

1. 概要（第28図、図版8）

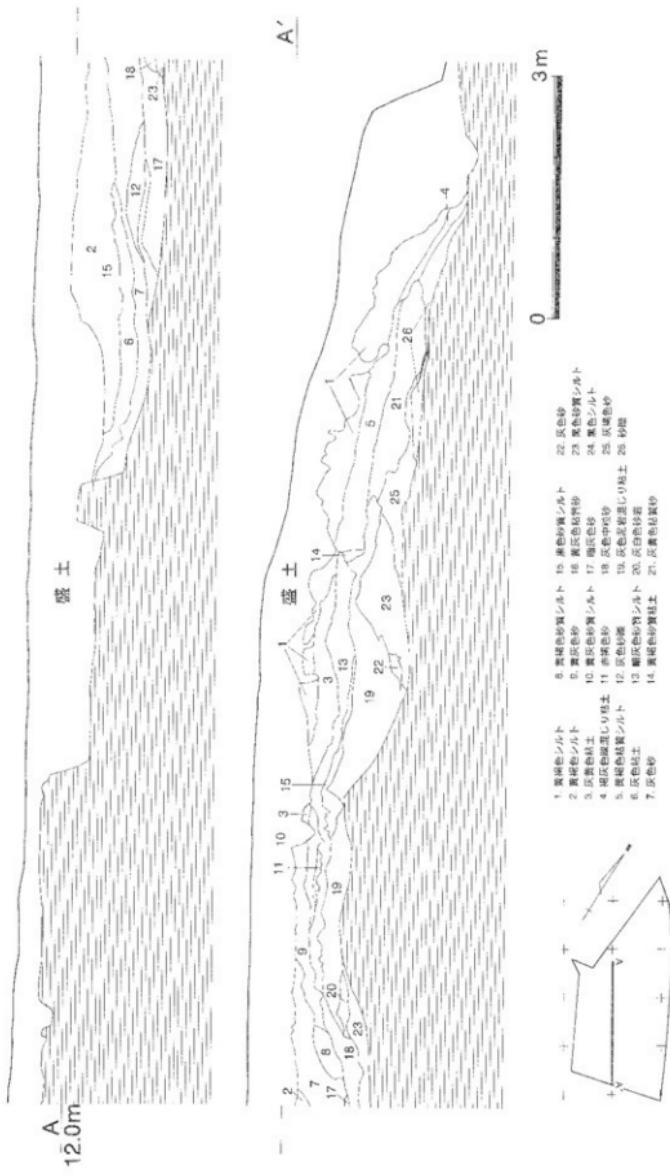
2-1区は微高地に位置し、隣接する1-2区とは平坦部の現地表面でおよそ2mの比高差を有り、南東部は1-2区に向かって傾斜している。調査直前まで畠地として利用されていた部分で、調査区の北西側はその耕作土を20~30cm程掘り下げるだけで黄瀬川泥流堆積物により形成された基盤層（以下地山）が露呈するが、南東側ではトレンチ調査で現地表面下約1.7mまで掘り下げても地山が検出できず砂などの堆積物が厚いなど、同一調査区でも土層の堆積状況が異なり、非常に複雑な状況を呈している。遺構は基本的に地山を掘り込む形で構築されており、溝状遺構をはじめとして土坑、ピット群、旧河道などを検出した。遺物は遺構内および遺構面から出土したものがほとんどで、古墳時代初頭から前期のものが大多数を占めている。

2. 土層の状況（第27図）

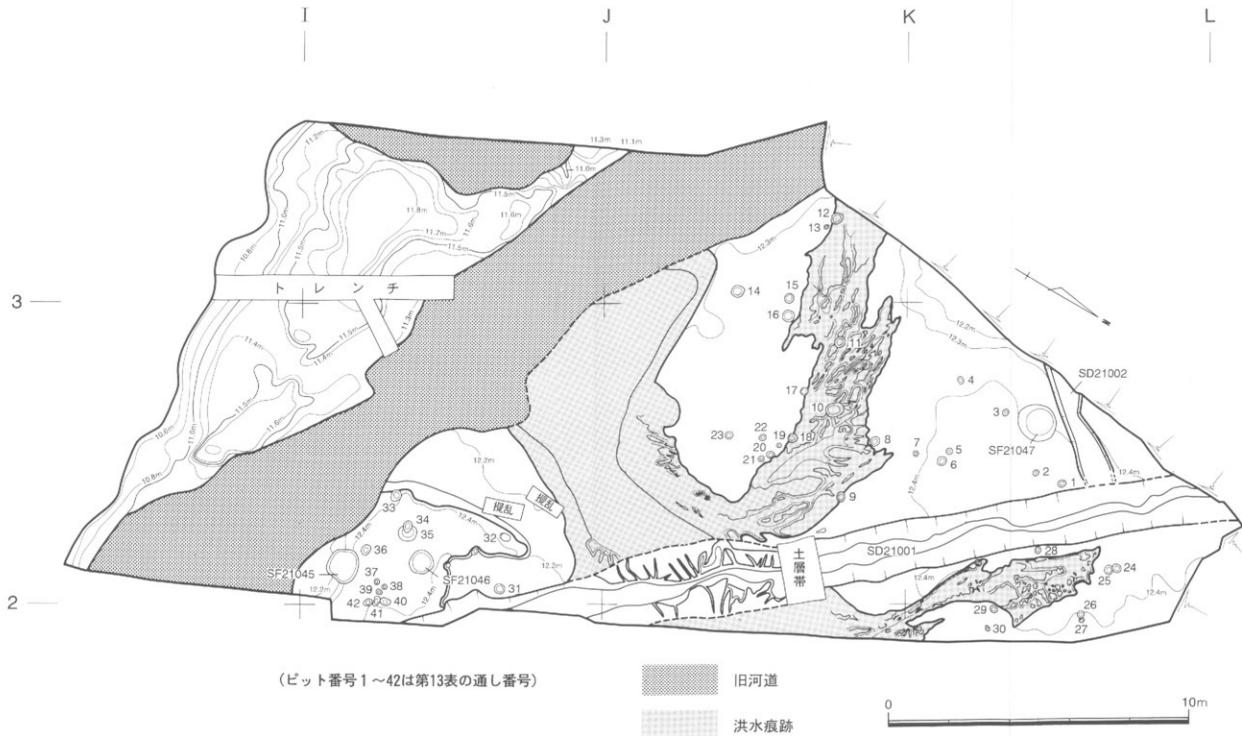
底土以下の土層の状況は、前述したようにおよそI-2グリッド杭とJ-3グリッド杭を直結したライン上を境に、その北西側と南東側では大きく異なる。とくに南東側は複雑な状況を呈しており、盛土以下は細かく26層に分層できる。以下にその状況を詳述するが、基本的には上層の黄褐色シルト系、中層の灰色砂・粘土系、下層の砂礫系のほぼ3系に分類できるものと思われる。なお、盛土は調査区全域で確認された旧耕作土にあたる褐色砂混じり粘土と、その直下で部分的に確認された地山ブロックを含む灰褐色粘土から成り、南東側端部は140cm余りの層厚だが、その他の部分は概ね40~50cmの層厚を測る。

第1層 黄褐色シルト 粘性度は低いがしまりがある。砂礫などの異物の混入がほとんど認められない。その堆積状況から洪水時の溢流水による堆積の可能性が高い。

第2層 黄褐色シルト 粘性度が低く、しまりも弱い。ほぼ第1層と類似する土層で、洪水時の溢流水による堆積の可能性が高い。



第27図 2-1区の土層状況



第28図 2-1区遺構全体図

- 第3層 灰黄色粘土** しまり、粘性ともにあり、黄色粘土ブロックの混入が認められる。また、径5~6mm程度の小礫を僅かに含む。
- 第4層 褐灰色礫混じり粘土** しまり、粘性ともにある。径5mm程度の礫を含む。
- 第5層 黄褐色粘質シルト** 径2~10mm程度のブロック状の灰色粘土および径2~6mm程度の小礫を含む。シルト質は南東側にいくにしたがい強くなる。
- 第6層 灰色粘土** 粘性がややあり、部分的に灰色の粘土ブロックが混入する。酸化により赤褐色化した箇所が認められる。
- 第7層 灰色砂** 僅かに粘性がありしまっている。混入物がほとんどなく水平ラミナが認められる。旧河川の堆積層である可能性が高い。
- 第8層 黄褐色砂質シルト** 全体的に砂を多く含んでいる。また、径2~10mm程度の灰色の地山ブロックを混入している。
- 第9層 黄灰色砂** 粗砂~中粒砂により形成され、粘性はほとんどないがしまりがある。径2~10mm程度の小礫を僅かに含む。
- 第10層 黄灰色砂質シルト** 全体的にやや黄色味を帯び、砂・小礫・擬岩ブロックを混入している。
- 第11層 赤褐色砂** 粗砂~中粒砂により形成されており、ややしまりがある。
- 第12層 灰色砂礫** 粗粒の砂と径5~6mm程度の小礫からなり、一部酸化により赤褐色している。
- 第13層 暗灰色砂質シルト** 粘性度は低いがしまりはある。径20~30mm程度の擬岩ブロックを多く含む。
- 第14層 黄褐色砂質粘土** 内部に擬岩ブロックを混入しており、しまりがある。
- 第15層 黒色砂質シルト** しまり、粘性ともに低い。小礫・擬岩ブロックを含む。
- 第16層 黄灰色粘質砂** 細~中粒砂により形成されているが、粘性が認められ、しまりが感じられる。一部粗砂も混入している。
- 第17層 暗灰色砂** 細~粗粒の砂により形成されている。
- 第18層 灰色中粒砂** やや粘性がある。砂岩および黒色土のブロックを含む。
- 第19層 灰色泥岩混じり粘土** 擬岩ブロックにより形成されており、しまりが強い。内部に粗砂を含む。
- 第20層 灰白色砂岩** 地山を形成している泥岩に類似しているが、しまりは弱い。
- 第21層 灰黄色粘質砂** 粗粒の砂により形成されているが、しまり、粘性ともにある。僅かに小礫を混入し、また、部分的に酸化による赤褐色化も認められる。
- 第22層 灰色砂** 粗砂を含み、しまり、粘性ともに低い。水平ラミナが認められる。
- 第23層 黑色砂質シルト** 粘性度はあるがしまりに欠ける。径10~20mm程度の擬岩ブロックを多く含み、また、粗砂の混入が認められる。
- 第24層 黑色シルト** しまり、粘性ともにやや欠ける。小礫・粗砂を含む。
- 第25層 灰褐色砂** 細~粗粒の砂により形成されている。部分的に酸化による赤褐色化も認められる。
- 第26層 砂礫** 径3~20mm程度の砂礫で、一部酸化による赤褐色化が認められる。

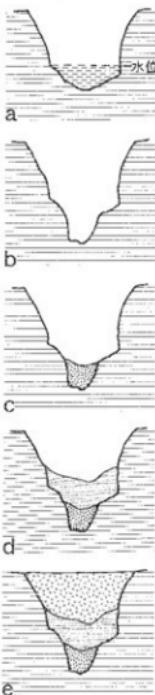
3 遺構と出土遺物

溝状遺構SD21001（第30図、巻頭写真、図版8・9）

I 2グリッドからK 2グリッドにかけて検出された。調査区の北東端をほぼ北西から南東の方向に走り調査区外へと延びるもので、検出長約24m、幅1.7~1.8m余りを計測する。深さについては最深部で約1.8mであるが、後述するように底部は開削後に浸食された可能性が高いことから、開削時の深さは1.2

m余りであったと考えられる。遺構は地山を掘削してつくられたものであり、遺構の北西端部は、後世において地山が人為的に切り崩されたのに伴い切斷された状況になっている。一方、南東部分は洪水による崩壊、および浸食作用を受け原形を止めている。実見の限りにおいては、断面はV字形を呈しているが、底部浸食前の開削においてはほぼU字形の断面であったと考えられる。覆土は細かく23層に分かれるが、これらは基本的に、上層の黄褐色土系、中層の灰色砂・粘土系、下層の砂・シルト互層系の3系に分類でき、「2 土層の状況」で触れた調査区全体の土層の状況と類似している。

覆土の堆積状況および遺構内部の様子から、当遺構の開削から埋没に至るまでの過程を次のように段階的に考えることができる。



第29図 SD21001
開削から埋没の過程

第1段階 最初に人為的に掘削されたのは、断面U字形の部分であったと考えられる。側壁に平水時の側方漫食の状況を示すノッジ状の抉れが認められることから、開削後暫くの間、溝内に一定量の水位があったことが窺える(第29図a)。恐らく、周辺河川(境川か)から溝内に水を引き、一方でそれを放水する形で、ほぼ安定的に水量が保たれていたのであろう。

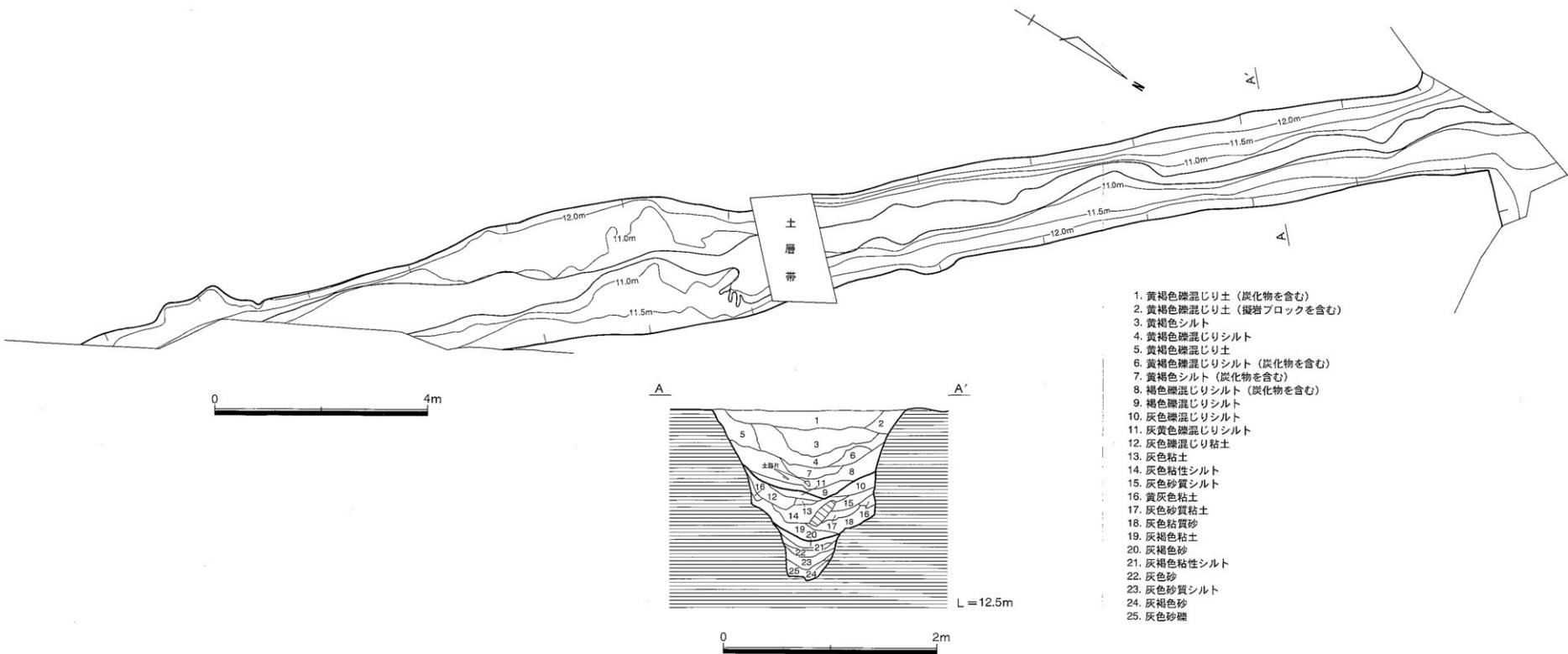
第2段階 周辺河川の水量の変化などに起因して、溝内の水流の勢いが増すなどで下方漫食が進んだものと思われる(第29図b)。なお、溝内底部に蛇行の跡が顕著であることからも水流が存在したことが窺える。

第3段階 下方漫食をもたらした水流がその勢いを弱める中で、まず砂等が堆積し、下方漫食された部分が埋没した(第20~23層)と考えることができ(第29図c)。なお、この第20層から第23層までの堆積土は「2 土層の状況」で触れた2-1区基本土層の第7層の灰色砂と類似している。

第4段階 第3段階の砂層の堆積に続き、第19層から第10層まで自然堆積が進んだと考えられる。覆土中から出土した遺物は、この自然堆積の終息後に遺構内に廃棄されたものであろう(第29図d)。

第5段階 第9層から第1層までの堆積がみられ、遺構が完全に埋没したものと思われる(第29図e)。なお、この第1層から第9層までの堆積土は「2 土層の状況」で触れた2-1区基本土層の第1層・第2層の黄褐色シルトと類似しており、洪水時の溢流水による堆積土の可能性が高いと言えよう。

遺物は覆土内から土師器が出土している(第34図32~40、図版9・14・15・16)。以下、その中でも形状が図示できるものについて記述する。32はS字状口縁台付甕である。台部および胴部の1/4を欠いているが、その形状からb頬(赤堀:1986)に相当するものと思われる。33は短胴形の小型の台付甕である。胴部は斜めを基調とする荒い刷毛目による調整がなされ、口縁部のみ横ナデが施されている。古墳時代初頭から前期に比定されよう。34、35は折り返し口縁を持つ広口甕である。34は口縁部が横方向のハケによる調整のちナデが施され、胴部にはヘラ磨きがなされている。35は口縁部、胴部とともにハケ調整のちヘラ磨きが施されている。ともに古墳時代初頭のものと思われる。36、37、38は高坏である。36は坏部が深い碗状を呈し、口唇部には内傾面が見られる。また、内湾する円錐形の脚部を持つ。その器形から弥生時代後期後葉の欠山式の範疇に属するものとも思えるが、ここでは一応古墳時代初頭のものと位置付けておきたい。37は坏部が稜を持ちほぼ直線的に開く深めの形状で、口唇部には一部内傾面が認められる。また、脚部はラッパ状に開く。38は坏部のみで、その形状は37のそれと酷似している。内・外ともに縦方向の丁寧なヘラ磨きが施され、また、赤彩されている。37、



第30図 溝状遺構SD21001実測図

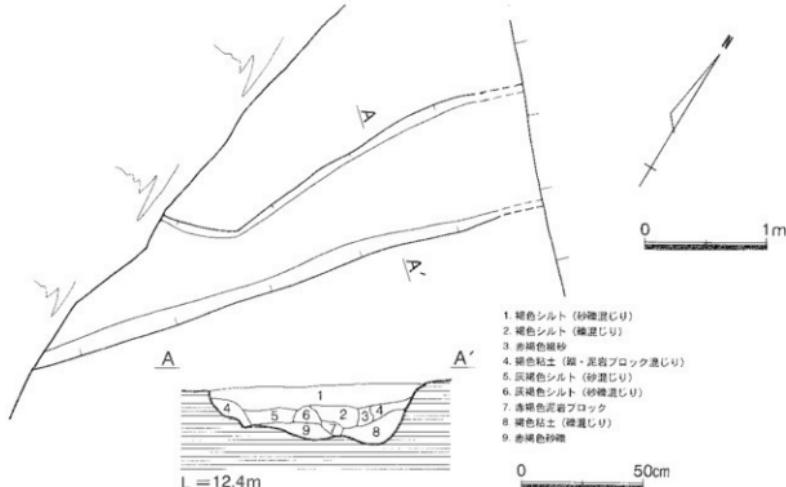
38とともに古墳時代初頭のものと考えられる。39は壺で、内・外ともにヘラ磨きによって調整されている。また、底部には木葉痕が残る。古墳時代前期のものであろう。40は外側がハケ調整、内側にヘラ磨きが施された小型の鉢で、製作技法は壺の下半部と同じである。古墳時代前期のものと思われる。以上の遺物は覆土の内、概ね第8層、第9層から出土したものであり、前述した通り、追構の開削から埋設までの過程の第4段階から第5段階にかけて堆積したものであると考えられる。したがって、当遺構の開削年代は古墳時代前期ないしそれ以前の近い時期と推定される。

溝状遺構SD21002（第31図・図版8）

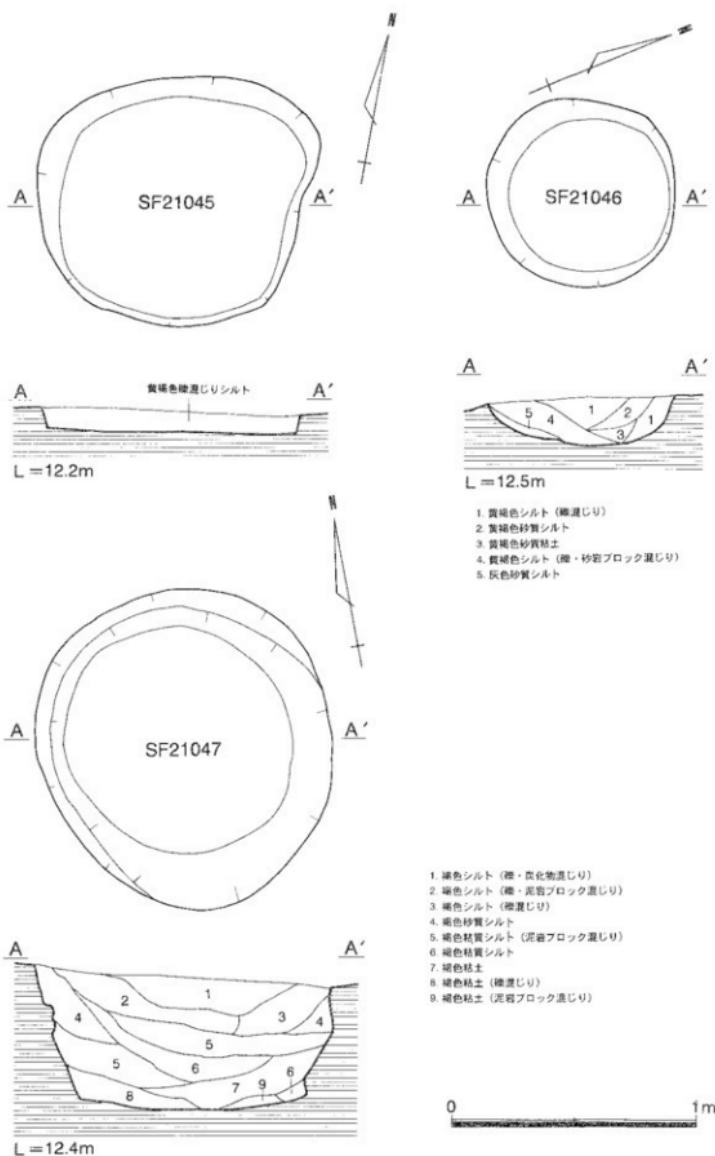
K 2 グリッドで検出された。S D21001にはほぼ直角に連結するものであるが、南西部分が後世の地山の切り崩しに伴い切離された状況になっているため、全体の形状は不明である。検出した規模は、長さ約3.7m、幅は約1mであるが一部約0.6mと狭い部分がある。深さは、最も深い部分でも25cm余りであり、S D21001のそれに比べてかなり浅い。覆土は9層に分けることができ、全体に砂礫の混入が目立つ。遺物等の出土もなく、その性格は判然としないが、S D21001に連結することから、それに関係し何らかの機能を果たした施設であったとも考えられる。

土坑（第32図、図版10）

土坑は3基検出した。このうち、K 2 グリッドで検出したS F21047が、その規模において最大のものである。ほぼ楕円形の平面形状を呈し、長軸約130cm、短軸約120cm、深さは約60cmを測る。覆土は9層に分かれる。S F21045、S F21046はともにI 2 グリッドで検出した土坑である。S F21045はやや変形した楕円の平面形状で、長軸約108cm、短軸約104cmを測る。深さは約7cmと極めて浅い。覆土は黄褐色疊混じりシルトである。S F21046はほぼ円形の平面形状を呈し、直径約76cm、深さは約20cmを測る。覆土は5層に分かれる。S F21045、S F21046、S F21047とともに、遺物等の出土もなく、その性格については判然としない。



第31図 溝状遺構SD21002実測図



第32図 土坑SF21045・SF21046・SF21047実測図

ピット（第28図、図版8）

ピットは調査区全体で42基検出した。それぞれの規模は第13表のとおりであり、その平面形状は円形や楕円形のものが多いが、ほぼ方形と認められるものもいくつか見られる。ピットの中には、S P 21013、S P 21018、S P 21016のように、ほぼ同程度の大きさで等間隔に直線上に並ぶものなども見受けられるが、建物の存在を認定するまでには至らなかった。

番号	遺構番号	検出地点	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	番号	遺構番号	検出地点	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)
1	S P 21003	K-2	円形	29	14	22	S P 21024	J-2	円形	20	2
2	S P 21004	K-2	円形	21	4	23	S P 21025	J-2	円形	24	21
3	S P 21005	K-2	円形	24	18	24	S P 21026	K-2	円形	26	5
4	S P 21006	K-2	楕円形	24×20	13	25	S P 21027	K-2	円形	30	14
5	S P 21007	K-2	方形	21×20	21	26	S P 21028	K-1	円形	22	17
6	S P 21008	K-2	方形	30×27	40	27	S P 21029	K-1	円形	18	8
7	S P 21009	K-2	円形	18	3	28	S P 21030	K-2	円形	22	18
8	S P 21010	K-2	円形	30	7	29	S P 21031	K-1	楕円形	32×24	33
9	S P 21011	J-2	楕円形	34×28	7	30	S P 21032	K-1	円形	20	5
10	S P 21012	J-2	楕円形	60×47	34	31	S P 21033	I-2	円形	34	25
11	S P 21013	J-2	円形	37	17	32	S P 21034	I-2	楕円形	32×26	15
12	S P 21014	J-3	楕円形	44×18	33	33	S P 21035	I-2	楕円形	36×34	20
13	S P 21015	J-3	円形	18	10	34	S P 21036	I-2	楕円形	42×30	32
14	S P 21016	J-3	円形	49	38	35	S P 21037	I-2	円形	78	19
15	S P 21017	J-3	円形	28	27	36	S P 21038	I-2	楕円形	33×30	27
16	S P 21018	J-2	円形	38	51	37	S P 21039	I-2	円形	20	33
17	S P 21019	J-2	円形	24	18	38	S P 21040	I-2	円形	20	12
18	S P 21020	J-2	円形	32	10	39	S P 21041	I-2	円形	21	32
19	S P 21021	J-2	円形	14	1	40	S P 21042	I-2	楕円形	38×30	28
20	S P 21022	J-2	円形	22	4	41	S P 21043	I-2	楕円形	36×21	40
21	S P 21023	J-2	円形	20	18	42	S P 21044	I-2	円形	28	45

第13表 2-1区ピット計測表

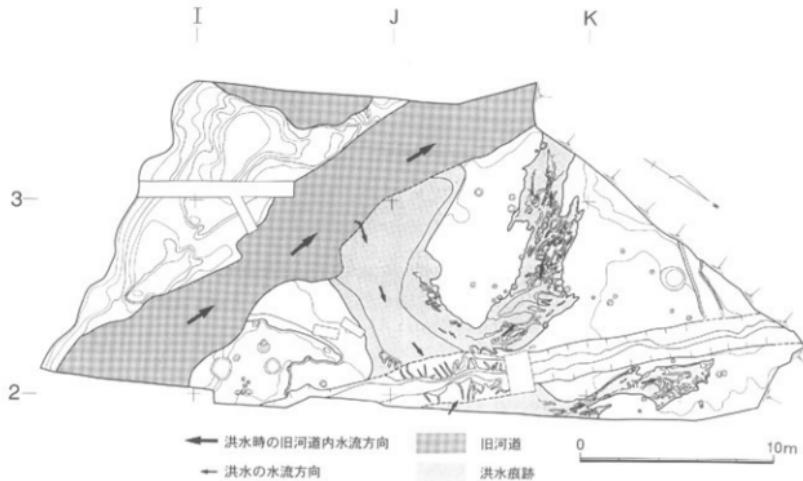
旧河道・洪水痕跡（第28図・第33図、図版8・10）

H 2 グリッドから I 2、I 3、J 3 グリッドにかけて 2 本の旧河道を検出した。いずれも自然河道であり、このうち H 2 グリッドから J 3 グリッドにかけて調査区を東西に直線的に横切る河道は、幅 2.2m ~ 5.0m 余りを測る。浸食痕跡の状況などから、後述の洪水発生時における水流は第33図のよう、東から西に向かって流れたと思われる。

洪水痕跡は、I 2 グリッドから J 2、J 3、J 1、K 1、K 2 グリッドにかけて、広い範囲で確認された。洪水の流れた方向は、放射線状の浸食痕跡の広がりの状況などから、第33図のようであったと考えられる。洪水が押し寄せた範囲は S D 21001 にまで及び、前述したようにその一部を崩壊させている。

以上の内容から、旧河道内の水流が、大雨等の何らかの要因で氾濫を起こし、洪水となって付近に開削されていた S D 21001 にまで押し寄せ、それを崩壊させるなどの被害を及ぼした状況が推察できる。

なお、旧河道内から弥生式土器が出土している（第35図48、図版16）。壺形土器の頸部の破片で、頸部上位に縄文が施され下位はヘラ磨きされ、その境が弦線で区切られていることから弥生時代中期後葉の有束式に相当するものと思われる。また、洪水の痕跡部分からは土師器が 1 点出土した（第35図46、図

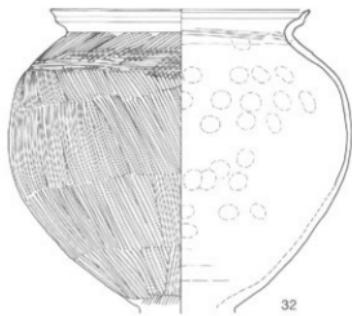


第33図 旧河道・洪水痕跡図

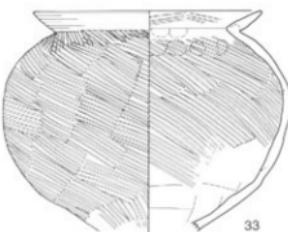
版16)。小型高坏の坏部のみの破片で、体部内・外面ともにヘラ磨きが施されたものである。口唇部の歪みが顕著で成形は粗雑である。古墳時代前期のものであろう。

4 包含層の遺物

遺構を検出した地山の上面で土師器等が出土している（第36図41～45・47・49、図版12・15・16）。41は短胴形の台付甕である。胴部はハケ調整が施され、口縁部のみハケ調整のちナデが施されている。古墳時代初頭から前期のものと思われる。42は長胴形の台付甕である。胴部外面及び口縁部内・外面はハケ調整が施されている。使用痕があまり認められないもので、古墳時代初頭のものと思われる。43は球胴形の台付甕である。胴部外面はナナメのハケ調整、胴部内面は板ナデが施されている。古墳時代初頭のものであろう。44は甕で、胴部中央よりやや上方に最大径を有す。器壁は比較的薄く、胴部外面はハケ調整がなされ、また、口縁部は横ナデが施されている。古墳時代後期のものと思われる。45は高坏の坏部である。外面に2条の明瞭な稜を持ち、口縁が外反している。内・外面ともに丁寧なミガキにより調整されており、赤彩されている。その様相から東海系のものではなく、北陸系の法仏式土器の新段階（2式）の範疇に属するものではないかと思われる。47は小型の甕で、胴部外面に指頭痕が認められ、とくに口縁部外面は顕著であり爪痕も見られる。口唇部から口縁部内面はナデが施されている。底面には木葉痕が残る。古墳時代初頭のものであろう。なお、盛土内から陶器と石製品が出土している。いずれも後世の耕作などにより混入したものと考えられる。49は陶器の皿で、やや内湾ぎみに立ち上がり口縁部が僅かに外反する形状で、削り出し高台を持つ。内面には鉄絵が描かれている。18世紀前半から半ばにかけての瀬戸・美濃産である。その他に、12世紀頃のものと思われる灰釉陶器片も出土している。石製品は砥石である（第16図3、図版19）。凝灰岩から成るもので、方柱状を呈し、使用により内湾したものと考えられる。砥面は表面、裏面、左右の側面の4面に認められ、擦痕も観察できる。



32



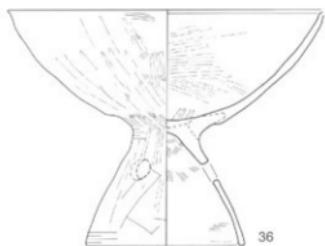
33



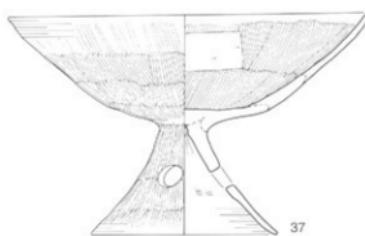
34



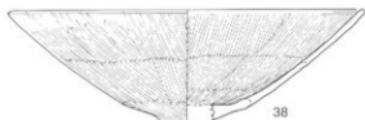
35



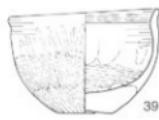
36



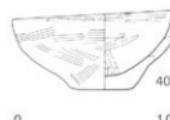
37



38



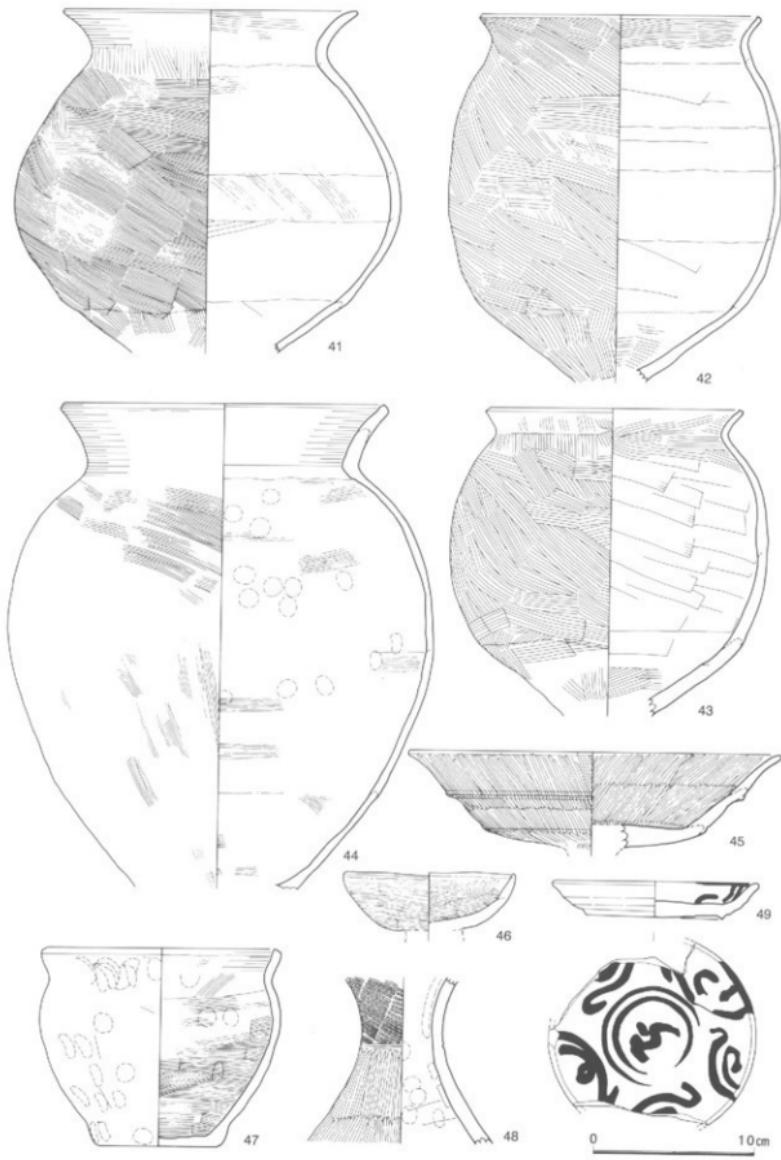
39



40

0 10cm

第34図 2-1区出土土器実測図(1)



第35図 2-1区出土土器実測図(2)

番号	種別	器種	出土位置・層位	法量(cm)		残存	色調	備考	図版
				口径	器高				
32	土師器	甕	S D21001	15.9		台部・胴部1/4欠損	灰白色	S字甕(b脚) 脇部最大径21.3cm	15
33	土師器	甕	S D21001	14.0		台部・胴部～口縁部1/6欠損 に赤い黄褐色	台付甕 脇部最大径17.4cm	15	
34	土師器	壺	S D21001	(12.2)	(22.9)	7.0 口縁部1/10・胴部2/3	褐色	広口壺 折り返し口縁	14
35	土師器	壺	S D21001	10.5	8.1	口縁部2/5・胴部3/5	褐色	広口壺 折り返し口縁	14
36	土師器	高环	S D21001	19.7	14.7	環形2/3・脚部1/4	褐色	脚径9.7cm	16
37	土師器	高环	S D21001	22.3	13.7	脚部一部欠損	に赤い黄褐色	脚径11.3cm	16
38	土師器	高环	S D21001	21.6		環形7/10	赤色	内・外圈赤彩	16
39	土師器	环	S D21001	9.1	6.3	3.4 ほぼ全形	明黄褐色	底部木葉痕	16
40	土師器	錫	S D21001	10.2	4.7	3.3 完形	褐色	台付錫 脇部最大径40.0cm	16
41	土師器	甕	I - 2	17.8		台部・胴部～口縁部1/2欠損	褐色	台付甕 脇部最大径24.0cm	15
42	土師器	甕	I - 2	17.1		台部・胴部～口縁部1/3欠損 に赤い黄褐色	台付甕 脇部最大径20.8cm	15	
43	土師器	甕	I - 2	15.4		台部・胴部1/5欠損	褐色	台付甕 脇部最大径19.8cm	15
44	土師器	甕	J - 2	19.7		台部・胴部1/3欠損	に赤い黄褐色	脚部最大径26.4cm	15
45	土器	高环	I - 2	(23.0)		環形3/4	赤色	内・外面赤彩	16
46	土師器	高环	J - 2	10.4		環形5/6	褐色	小型高环 内・外面ヘラミガオ	16
47	土師器	甕	H - 2	14.2	12.4	7.2 2/5	に赤い黄褐色	底部木葉痕	16
48	土器	甕	I - 2			底部～胴部1/3	褐色	脚径5.0cm 有束式	16
49	陶器	皿	H - 3	12.4	2.3	8.4 5/6	に赤い黄褐色	内面に鉄鉢 刈り出し高台 脇口・美濃窓	12

第14表 2-1区出土土器計測表

第4節 2-2区の調査

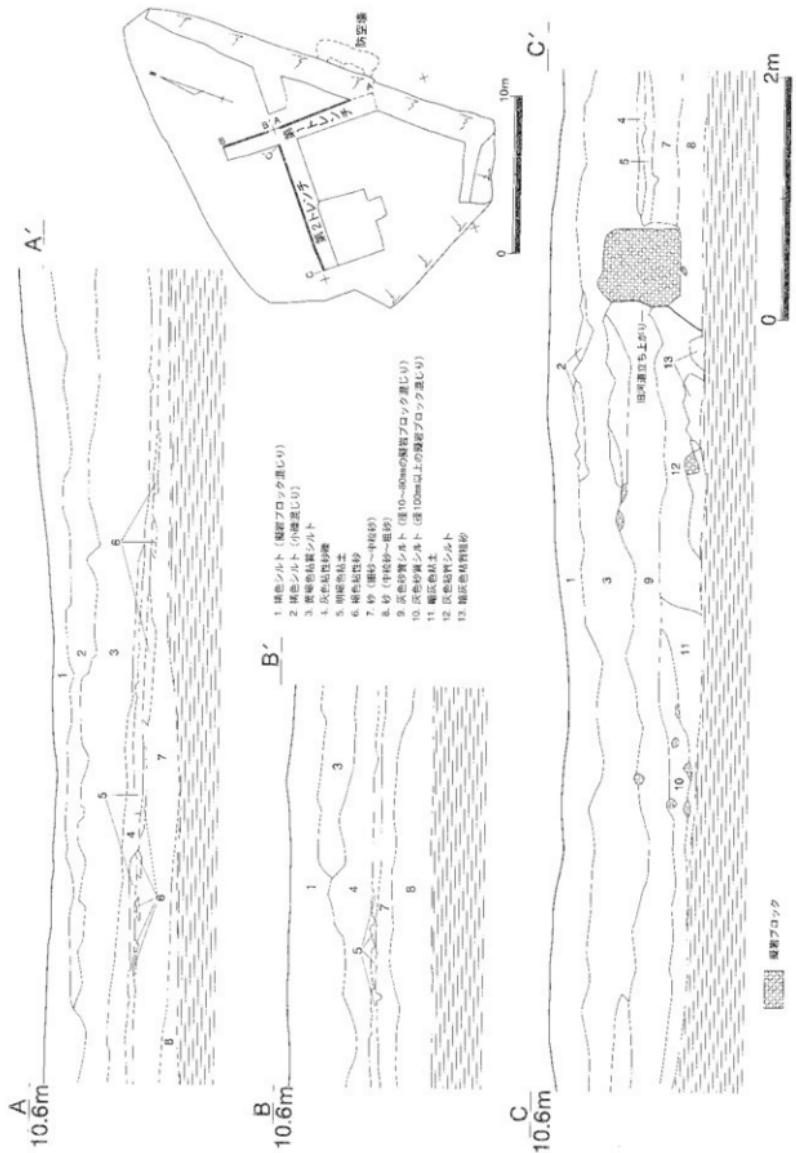
1 概要

2-2区は2-1区の北西側に隣接し、2-1区の微高地を形成する地山が人為的に切り崩され低地となった部分で、標高は現地表面でおよそ10.5m余りである。第II章「調査の方法と経過」で述べたように、この区域は当初、調査対象からはずれていたが、3区の平田地区の調査方法の検討の必要性からトレンチ調査を実施することになった。トレンチは2本設定し、それぞれについて土層の堆積状況を確認した。以下に、その概要を記述する。なお、人為的に切り崩された地山の断面に防空壕が掘削されており、ほぼ全形をとどめる形で残存していた。近年、戦争遺跡に対する関心が高まりつつある中で、防空壕も第2次世界大戦の貴重な資料の一つと考え調査を行った。次代へ報告したいという意味も込めて、その調査内容も併せて記述することにした。

2 トレンチ調査の結果（第36図、図版11）

第1トレンチ

K3グリッドからL3グリッドにかけ、3ラインに沿って設定したトレンチである。確認できた土層は8層までである。防空壕の掘削状況などから、1・2の褐色シルト層は戦後の盛土と考えられ、3の黄褐色粘質シルト層上面が戦前の地表面と判断される。以下、5の明褐色粘土層上面で一部砂地を行ったような痕跡が認められたが、明確な構造は確認できなかった。さらに下層の6の褐色粘性砂層および7・8の砂層は、明らかに水成堆積による自然堆積層であると考えられる。



第36図 2-2区トレンチ土質断面図

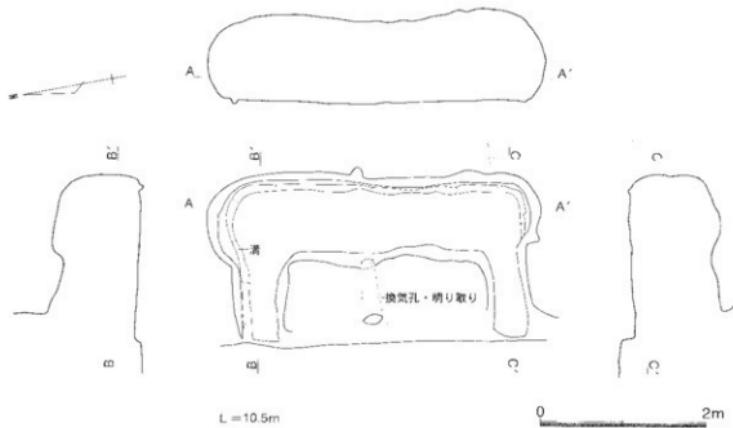
第2トレンチ

K 3 グリッドに、L列に沿って第1トレンチに直角に連結する形で設定したトレンチである。確認できた土層は12層である。このうち、1～5層および7層・8層は第1トレンチのそれと同一の土層である。のことから、第1トレンチで確認された土層の堆積が、擬岩ブロックを境とする部分にまで及んでいることがわかる。擬岩ブロックより北西側では、旧河道の立ち上がりが認められ、したがって、9・10の灰色砂質シルト層、11の暗灰色粘土層、12の灰色粘質シルト層、13の暗灰色粘質粗砂層は旧河道内の堆積土層と考えられる。

以上の第1トレンチおよび第2トレンチの調査結果から、2～2区の土層堆積の過程は次のように考えられよう。まず、全面で水成堆積による自然堆積がなされ、その後、北西部で新たに自然河道が形成されたと考えられる。そして、その自然河道が埋没したのち、3の黄褐色粘質シルトが全面に堆積し、戰後に至って1・2の褐色シルトによる盛土がなされたものと思われる。なお、前述したように、トレンチ調査では明らかに遺構と断定できるものは確認できなかった。

3 防空壕の調査（第37図、図版11）

K 2 グリッドに位置し、人為的に切り崩された地山の断面に掘削されていた。2カ所の出入り口が内部で繋がるコの字形の構造をしている。室部床面積は約3.7m²、室部の高さは約1.0～1.1m、入り口部から奥壁までは1.85～1.95m余りである。また、南側入り口部は、幅0.4～0.6m、高さ1.03m、北側入り口部は、幅0.4～0.55m、高さ1.07mを測る。室部床面には、排水のためと思われる幅10cm程の溝が南側側壁から北側入り口部まで掘られていた。さらに、中央部やや上方には径23cm程の、換気孔ないしは明かり取りと思われる小孔が設けられていた。小孔は2カ所設けようとしたようであるが、貫通していたのは北側の1カ所のみであった。また、奥壁部分には縁台に用いたと思われる平坦な削り出しが作られていた。聞き取り調査の結果、本土への空襲が現実味を帯びてきた、太平洋戦争末期の昭和19年頃に付近の住民の手により掘削されたものであることが判明した。



第37図 防空壕実測図

第IV章　まとめ

今回の平田前田遺跡の調査では、古くは弥生・古墳時代にまで遡り、室町・江戸時代さらには近・現代にまで至る幅広い時代の遺構・遺物を検出し、記録に留める結果となつた。調査報告の最後にあたり、改めて遺跡を時代別に整理し、若干の考察を加えることでまとめとしたい。

弥生時代～古墳時代の様相

当該期の様相は2-1区に見られた。黄瀬川泥流堆積物により形成された地山を掘り込む形で掘削されていた溝状遺構、土坑、ピットなどの遺構群、さらには旧河道、洪水痕跡がそれである。とくに、溝状遺構S D21001からは、その埋没の過程で廃棄されたものと思われる古墳時代初頭から前期に比定される土師器類が多数出土しており、したがって、その開削時期は少なくとも古墳時代初頭から前期を下ることはなく、同時期ないしはそれ以前の近い時期と考えるのが妥当であろう。周辺は調査区の北～北東にかけて微高地が広く展開する地形であり、検出部分の規模（幅1.7～1.8m、深さ約1.2m）や構造（U字形の断面）をも併せ考えれば、当溝状遺構は、調査区の北～北東に広がる微高地上に営まれた集落の環濠と捉えることも可能であると言えよう。当溝状遺構が集落を取り囲む環濠であるとすれば、今回の調査では、まさにその南側の一部を検出したことになる。確かに、当溝状遺構に近接して東西方向に流れたと思われる旧河道内から弥生時代中期後葉の有東式に相当する壺形土器の頭部片が出土したことや、付近に弥生時代中期の住居址を検出した矢崎遺跡（駿東郡清水町）や後期の住居址や水田址を伴う長伏遺跡、長伏上塙辛田遺跡、中島上舞台遺跡などが点在していることなどから、調査区周辺の微高地上には弥生時代中期後葉以降後に営まれた集落が存在したと考えることは可能である。しかしながら、それはあくまでも推測の段階であり、したがって当溝状遺構の性格についても一つの可能性として述べるに止めておきたい。なお、前述の有東式に相当する壺形土器片が出土した旧河道内の堆積上層と当溝状遺構内の下層の堆積土が極めて類似しており、その点は当溝状遺構の開削時期を考える上で有効な資料の一つとなり得るかもしれない。

遺物はS D21001内出土のものを中心に2-1区全体でS字状口縁台付甌、単純口縁台付甌、広口甌、高坏などが出土した。それらは、在地系のもの（第34・35図34・35・42・47など）と外米系のもの（同図32・33・36・37・38・45など）に大別することができる。在地系の土器は概ね古式土器の初期の段階に属するもので、いわゆる大崩様式占段階の前葉に比定されるものと思われる。また、それらと併せて出土したS字状口縁台付甌は、前述したようにその形態からb類に属するものと考えられる。大崩様式と廻間様式との対応関係については、大崩様式古段階前葉と廻間様式II前半とが並行関係にあるとの指摘がなされており（中輪：1997）、前述した点を勘案すれば、当遺跡2-1区出土の土器群はまさにそれを傍証する資料の一つとも言えよう。また、外米系の土器のうち、45の高坏は北陸系の法仏式土器の新段階（2式）の範疇に属するものと考えられ、それ以外のいわゆる東海系のものは明らかにその形態が異なり注目される。それは、当高坏がこの地域における出土例としては稀有なものであることに加え、前述のS字状口縁台付甌（b類）との関係を考えれば、法仏式新段階（2式）と廻間様式II前半とが並行関係にある可能性を示す貴重な資料ともなり得るからである。しかしながら、その点については、当高坏が坏部のみ残存する形で、しかも僅かに1点出土したにすぎない点から、とくに慎重を期さねばならないところであり、ここではあくまでも一つの可能性として言及するに止め、積極的な提言は差し控えたい。

室町時代～江戸時代の様相

当該期の様相は1-1区、1-2区で見られる。1-1区では第5層上面（第3遺構面）検出の遺構群が、その出土遺物から概ね室町時代後半に位置付けられるものと思われる。また、第4層上面（第2遺構面）検出の遺構群がそれより僅かに時代が下り、出土遺物の中に16世紀末から17世紀初頭に比定される陶器類が含まれていることから、室町時代末期から江戸時代初頭にその構築時期を求めるべきよう。遺構はいずれもピット、土坑、溝状遺構が主たるもので、このうちピットの中には柱根や根固めの石などを残し、明らかに柱穴と認められるものもあった。残念ながら今回の調査においては、その亂列から建物の存在を明らかにするまでには至らなかったが、当時、当該域に何らかの施設が存在し人々の生活が営まれていたことは確かであろう。このことを文献史料に辿れば、遺跡に隣接する藤原院宛ての今川義元判物等には「在家」と言う文言が見られ、少なくとも判物が発給された天文21年以前には、この地域に在宅農民らの生活が営まれていたことを窺い知ることができる。その後、この地域一帯は、後北条氏と武田氏との勢力争い、豊臣秀吉の小田原征めなどの度重なる戦禍に見舞われ、農民らも逃散し荒廃の一途をたどっていたことが知られている。人々が再び安定した生活を始めるのは徳川政権下に入ってからのことで、遺跡が所在するこの地域一帯は、取籠郷帳等にその名を見る「平田村」として漸次復興を遂げていったのである。第4層上面（第2遺構面）で検出した溝状遺構S D11035は、恐らく何らかの耕作に関係した暗渠排水施設であったと考えられるが、まさに、そうした安定した時勢を反映し、村落復興の過程で構築された施設であったのかも知れない。とすれば、近世平田村の端緒を垣間見る資料の一つとも言えそうである。なお、1-2区では第4層上面（第2遺構面）検出の土坑墓S X 12034およびピットが、概ね室町時代後半から末期に位置付けられるものと考えられる。しかし、1-1区で検出した遺構群との対応関係については、2-1区からの土砂の流れ込みなどの影響で層位的に異なる部分が多く、明らかにすることはできなかった。

近・現代の様相

当該期の様相は1-1区、2-2区で見られた。1-1区の第3層上面（第1遺構面）検出の遺構は何らかの耕作の痕跡と考えられ、本報告では層位および土壤分析の結果などから、乾田と湿田との並存状態を推定したが、あくまでも推測の域を脱し切れていないことを改めて付記しておきたい。出土遺物の中に近代の陶器片が多数含まれていることから、近世以降の遺構であることは間違いないものと思われる。2-2区に残存していた防空壕は太平洋戦争末期の昭和19年頃に付近の住民の手により掘削されたものであった。空部が大きく頑丈で一定の生活空間を有し、床面には排水溝を掘り巡らし、換気孔（明かり取り）や燐台をも設けた施設であり、当時の国民の空費に対する認識がいかに深いものであったか、その実態を窺い知る貴重な資料の一つと言えるものであった。

おわりに

今回の調査は、その対象区域が微高地と低地に跨がっていたため、とくに低地部分では微高地からの土砂の流れ込みなどにより層位的に複雑な部分が見られたことや遺物量が少ないと起因して、遺構によってはその年代や性格の解明に決め手を欠き、結果として余り踏み込んで劣化をつかむことができず、往々にして拡大解釈に陥ってしまったことは残念なことであった。そんな中でも、微高地部分において古式土器部を作成する溝状遺構を検出できたことは特筆すべき点であり、今回の調査における最大の収穫の一つと言えよう。本報告では、その規模や構造、周辺地形などから当溝状遺構を集落の環濠と捉え得る可能性を提言した。しかしながら、その開削時期など疑問を残す点もあり、それだけに、今後、周辺の調査が進む中で当溝状遺構の全容が解明されることを願って止まないところである。なお、

当溝状遺構をはじめその周辺で出土した古式土師器群は、廻間様式と大廓様式、さらには法式といふ他地域の土器様式の並行関係を考える上で一つの有益な資料と言えるもので、それらを提供できることも今回の調査における成果の一つと言えよう。

現地調査ならびに本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご助言をいただいた。とくに、玉稿を寄せていただいた加藤芳朗氏、山口敏氏には多くのご教示を賜った。また、谷内尾晋司氏には北陸系の出土土器についてご教授戴いた。末尾ながら、この場を借りて深くお礼申し上げたい。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 「『S字窓』観音」85」 『愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 1986
角川書店 『角川日本地名大辞典』22静岡県 昭和57年
小泉 弘 「江戸の街の出土遺物――その展望―」 『季刊考古学』第13号 雄山閣出版 1985
静岡県 『静岡県史』資料編3 平成4年
静岡県 『静岡県史』資料編7 平成6年
静岡県考古学会 『静岡県考古学会シンポジウム6 古墳時代の土師器』 1985
静岡県地学会 『駿遠豆 大地見てあるき』 1996
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『角江遺跡II(遺物編)』 1996
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『御殿川流域遺跡群I』 1993
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『御殿川流域遺跡群III』 1995
田口聰一 「美濃焼」 ニューサイエンス社 昭和58年
都立学校遺跡調査会 『小石川(Ⅰ近世・近代遺構編)』 1997
永井久美男 「日本出土錢幣鑑定」 兵庫埋蔵文化財調査会 1996
中鶴郁太 「東海東部の古式土師器」 『静岡県史研究』第13号 静岡県 1997
奈良国立文化財研究所 『木器集成図録 近畿古代篇』 1984
藤沢典彦 「六道銭の成立」 『出土銭貨』第2号 出土銭貨研究会 1994
松井・明 「弥生時代の城巣集落をめぐる諸問題II」 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988
三島市 『三島市誌』増補 1987
三島市教育委員会 『安久遺跡』 1989
三島市教育委員会 『三島市金沢遺跡』 1993
三島市教育委員会 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告II』 1993
三島市教育委員会 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告IV』 1995
三島市教育委員会 『大場川遺跡群』 1995
三輪茂雄 『山』 法政大学出版局 1978
谷内尾晋司 「法式土器」 『日本土器事典』 1996

特論

三島市平田前田遺跡土層の地学的検討

加藤芳朗（静岡大学名誉教授）

1. はじめに

この遺跡の微高地、低地、環濠の土層を観察し、その生成環境について検討した。土層区分、遺構、遺物などについてはすべて発掘所見（以下発掘資料）にしたがった。写真撮影などでお世話になった中鉢、篠宮氏にお礼申し上げる。

2. 遺跡周辺の地学的背景

本遺跡は黄瀬川扇状地内の境川の侵食谷に位置する（図1）。

(1) 黄瀬川扇状地

この扇状地の最上部の数mは御殿場泥流からなる。これは新富士火山東麓での山体崩壊で生じた御殿場岩屑流が水によって移動堆積したものと考えられている（宮地、1988）。御殿場泥流は疊まじり砂、シルト、泥の互層で固結がいちじるしい（吉川、1992）。その中の炭質物の¹⁴C年代値は、 $2,100 \pm 100$ yBP（山田他、1972）、 $2,360 \pm 100$ yBP（町田、1980）、 $2,580 \pm 65$ yBP（宮地、1988）とさまざまである。一方、この上にのる最古の遺跡の年代は弥生中期であるから（町田他、1984）、その考古学年代は弥生前期ないし繩文晩期末と考えられる。

(2) 境川

その名のよう、長泉町、清水町と三島市との境界をなす。徳倉から南下し、東レ工場東、三島駅西をへて大東紡工場東に至る。ここから下流は両岸が深き数mの急崖、幅が最大300mの谷地形（以下侵食谷）をなす。遺跡をへて南西の的場で狩野川に合流する。現在の川筋は複雑に蛇行している。

3. 遺跡の地学的概要

発掘区は侵食谷内で境川の蛇行が西に張り出た内側に位置する。2区の北半が高く（微高地）、南半で急に低くなり、1区の低地に至る（図2）。御殿場泥流（以下基盤層）は2区北半で浅くから出現し、上位から、固化泥層（厚さ0.8m）、固化砂層（厚さ0.8m）、固化砂砾層（厚さ1.2m）の順で水平層をなす。

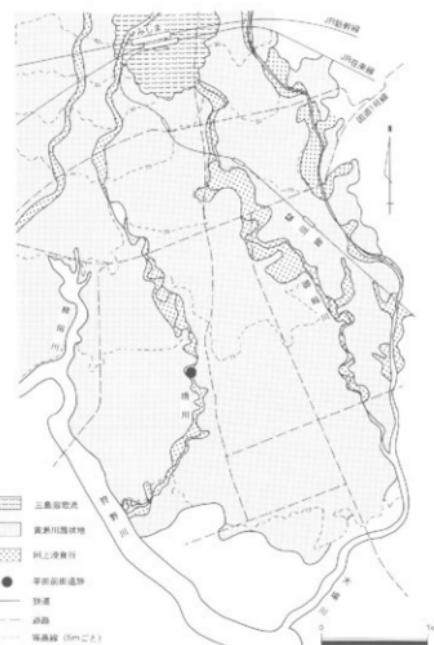


図1 遺跡周辺の地形分類図(国土地理院、1981より作製)

4. 2区の微高地土層

(1) 特徴

微高地を中心と設定された南北トレンチの東断面(3ライン)において、基盤層の上にのる土層(発掘資料)を筆者は古い順に1~6に大別した(図3)。

1の砂疊層は扇状地面を侵食した川の運んだものである。

2は黒色土塊、基盤層の破片を多数含む搅乱層で人為的な盛土と考えられる。基盤層の高まりに一致するので何らかの遺構と関係するかもしれない。この層の下部の基質は砂層なので、1層を削りこんだ可能性がある。

3は砂層(一部に細疊層をはさむ)は1について2回目の河川流入のあったことを示す。この層の上部から弥生中期後半の土器が出土した(発掘資料)。

4の灰色粘土層は3と整合的で、3、4層は一連の堆積とみられる。

5は黄褐色のシルト質土層である。3、4層を削るように(不整合的に)堆積して両者間に時間差のあることが推定される。古墳前期の土器が含まれていること(発掘資料)もこれと矛盾しない。

6は5と似るが、両者の連続を確かめることはできなかった。

(2) 生成

イ、1層は弥生中期後半の土器を含む3層より古いので、弥生前期ないし縄文晩期末の扇状地面形成後まもなく始まった侵食と関連しそうである。図3から1層の下底は海拔10m以下であり、隣接扇状地面(海拔約14m)を4m以上削りこんだ谷ができることがある。

ロ、その後、この川床、岸辺の基盤層を整地して2層が形成された。

ハ、弥生中期に入って再び川の侵入があり、多分もっと北まで広がっていた2層と基盤層とを削って第2の谷ができる。谷底は海拔10.5mまたはそれ以下に達した。この谷を砂主体の3層と4層の粘土が埋めた。3層は海拔12m

にまで達するので、川の水位は一時ここまで上がったのであろうが、その後、流心近くで海拔11m余の高さに落ち付き、最後には水勢がおとろえて粘土が堆積した。

ニ、以後2区に川が入りこむことはなかった。

5、6層は洪水時の溢流水で堆積したものであろう。

5. 環濠内の土層

2-1区東北端に北から

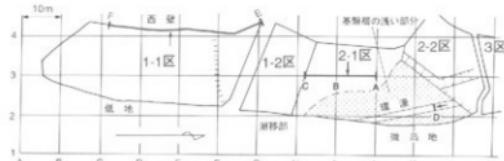


図2 発掘区の概要(発掘資料より作製)

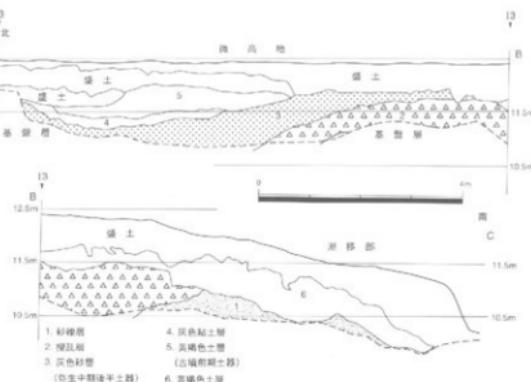


図3 2-1区3ライントレンチ東壁の土層(発掘資料より作製)

やや西の方向に走る環濠（以下源）がある（発掘資料）。濠は微高地のうちでもとくに基盤層が高い部分にあり、濠の壁面はほとんどが、基盤層の最上位の固結泥層からなる。

（1）土層の大区分

20余に細分された土層は3つに大別された（発掘資料）。筆者もこれと同見解だがすこし表現を変えて説明する（図4）。上から、褐色土層（黄褐色土系）、灰色粘土層（灰色砂・粘土系）、灰色砂層（砂・シルト互層系）である。カッコ内は発掘資料による大別。この層序は2-1区3ライトレンチの北部の5、4、3層のそれとよく似る（図3）。また、海拔高度もほぼ同じである。この対応は3層（弥生中期後半の土器含有）と濠内の灰色砂層（弥生中期後半から同後期以降）とが時期的に一致するので可能性がある。濠内の水は弥生中期後半の境川の水位上昇にともなって導入されたとみるのが妥当であろう。この時期以外境川の水位上昇を示す事実は見つかっていない。

（2）土層の示唆する古環境

この解釈が妥当であれば、濠の開削は当時の境川の水位が上がって2区内に届いたときに行われ、濠にその水を導入することによって川と反対側の外敵にそなえたとの見解が成立つのではないか。

6. 1区低地の土層

西壁と北壁の土層断面で観察した。西壁の北半と北壁の土層構成はよく似ているので、西壁土層の説明記載だけに限り、北壁土層は省くことにする。図5は西壁の土層断面図（発掘資料）を整理縮小したものである。低地の特徴として、砂、礫の優勢、グライ層の存在、水田の出現が挙げられる。

（1）土層の堆積（砂、礫の優勢）

図5でわかるように、礫層、砂質層が断面の大部分を占める。これは、境川が微高地の南方延長部を侵食して低地をつくった折（その時期は中世以降？）に堆積した最新の土層である。また、3、12層の下底が4層以下をけずって不整合をなす。不整合面より上の土層で礫層、砂質層が目立つ。

（2）グライ層

土層の孔隙が水で飽和されると、空気が侵入できず、酸素不足になる。この現象がグライ化（還元）

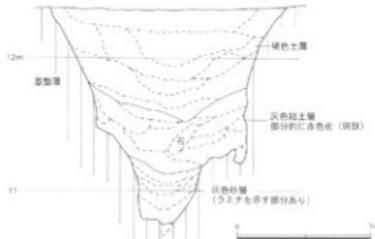


図4 D点におけるS D 21001（環濠）
充填土の土層断面図（発掘資料による）
〔実線は大区分、点線はその細分〕

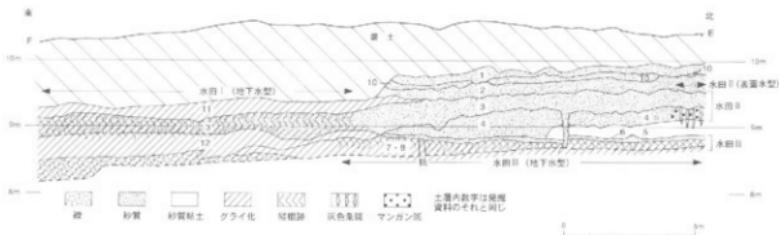


図5 1-1区西壁の土層断面図（発掘資料を整理、縮小）

である。酸素が十分な状態が酸化である。

a) グライ化と土層の色 土層中の鉄は還元が強いと青ないし緑色、酸化状態で黄、褐、赤色を呈するので、土の色もそれに支配されて同色となる。その中間の弱還元では灰色（青、褐の混合色）となる。弱還元でも、より強還元に近いと青色部が、より酸化に近いと褐、赤色部がまだらになって現れる。それぞれ、還元斑、斑鉄と呼ぶ。なお、マンガンは酸化で暗褐色（チョコレート色）のまだら（マンガン斑）となる（還元マンガンは無色）。

b) 地下水グライ 地下水に飽和されたときのグライである。これがもっとも多い。地下水位が低いと下から、強還元部、弱還元部、酸化部と変化するが、地下水位が高くなるにつれて、まず酸化部が消え、ついで弱還元部が消える。図5の密な斜線部が地下水グライを示す土層である。北半の微高地への漸移部では断面の最下部（7、8層）に限られ、上部の大半は弱還元の灰色を呈する。南半の低地本体では3層の一部を除いてほぼ全層が地下水グライである。3層は砂層のため発掘後の酸化が進みやすい。

c) 停滯水グライ 土層の下部に透水不良層があると、上部土層に浸透水がたまるために生ずるグライである。2・1区の微高地では基盤層が固化した不透水層なので上位土層の一部に停滯水グライが見られる。図3の3、4層、図4の灰色粘土層などは土色が灰色で、褐、赤色の斑鉄をともなうことが多い。5、6層は基盤層から離れているため酸化状態（褐色）になる。この項は本来4.に含まれるべきだが、グライということでここで扱った。

(3) 水田の検出

全層グライ水田（地下水型、湿田型）では、根跡（作上、下層上）、攪乱（作土）、炭酸鉄（下層土）の3指標が全部、どれか2つ、1つ認められるなら、水田の存在確度が、それぞれ、強（略号P 3）、中（同P 2）、弱（同P 1）と判定する（加藤、1992a, b）。

弱還元、酸化水田（表面水型、乾田型）では、下層土に斑鉄（上）、マンガン斑（下）のペア、またはおのおのが単独で出現すれば、水田の存在は確定と判定される（加藤、1992b）。これらの観点から3つの水田面が推定された（図5）。

水田I 西壁左半で11層を作土、3層以下を下層土とする地下水型水田（湿田）の存在確度が中（P 2）と判定された（攪乱と根跡の存在）。

水田II 同右半から北壁にかけて、3層を作土、4層以下を下層土（いずれも土色は灰色）とする表面水型水田（乾田）である。下層土にマンガン斑と灰色条斑が認められるのでこの判定となった。灰色条斑は乾田下層土の特徴で、縦の割れ目や根跡にそって上層が灰色化している。断面では灰色の縦の筋模様として現れる。

水田III 同右半から北壁にかけて、6層を作土、7・8層を下層土とする地下水型水田（湿田）の存在確度が中（P 2）と判定された（攪乱と根跡の存在）。

乾田型の水田IIが低地から微高地への移行部で出現するのが注目される。

水田Iは盛土直前の水田である。水田II、IIIはそりより古いがどこまでさかのぼるか不明である。

文 献

- 加藤芳朗（1992a）坂尻遺跡の環境・水田・噴砂の地学的・土壤学的検討。「坂尻遺跡」、P. 212-222、静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 加藤芳朗（1992b）遺跡発掘現場における埋設水田認定に関する土壤学的问题。ペドロジスト、36巻、P. 167-174
- 国土地理院（1981）1:25,000 土地条件図「沼津」。
- 町田 洋（1980）富士テフラと古代遺跡。考古学ジャーナル、178号、P. 2-11
- 町田 洋他（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ。「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、P. 865-928
- 宮地直道（1988）新富士火山の活動史。地質学雑誌、94巻、P. 433-452
- 山田 治他（1972）合成メタノールによる¹⁴C液体シンチレーション年代測定法と本法による富士火山噴火物の年代測定結果。地質学雑誌、78巻、P. 235-239
- 吉川契子（1992）黄瀬川下流域の地形について。静岡地学、66号、P. 43-47

特論

三島市平田前田遺跡の土坑墓内出土の一中世人骨について

元国立科学博物館 山口 敏

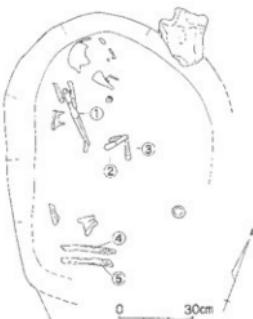
本人骨は、胴丸長方形の土坑墓に、六道鏡と共に、頭部を北西に、左を下にした側臥屈葬の姿勢で埋葬されたものである。保存状態は悪く、頭部の一部と、上肢の長骨3点と下肢の長骨2点の骨幹部分が輪郭をとどめているが、骨質はなかば土壤化しており、骨のみを分離して取り上げることは困難な状態である。

頭骨では頭蓋冠の後半部分（頭頂骨の後半部、右側頭鱗の後部、後頭鱗の大部分）と下顎骨と上・下顎の歯列の一部が残存している。縫合の状態は観察できない。後頭骨上鱗の矢状溝曲はあまり顯著ではない。外後頭隆起は小さいが明瞭に認められ、上項線も発達している。乳様突起部分は保存されていない。下顎骨は左右の体部が保存されているが、腐蝕のため正確な形態は観察できない。上顎骨は残存していないが、左第2切歯から右第1大臼歯までの歯冠が配列を保っている。上顎第1切歯は軽度のシャベル形を呈し、咬耗により象牙質がわずかに露出している。上顎の右第1大臼歯も舌側の2咬頭で象牙質が露出している。このほかに上顎の左大臼歯が1点遊離して出土している。遠心舌側の咬頭が退縮しているので、第2または第3と考えられる。歯冠の遠心面に摩耗面は認められない。近心舌側の咬頭で象牙質が露出している。下顎の歯列は左第2切歯から右第2大臼歯まで歯列が残存している。左の大歯以遠の歯は土中に埋もれていて観察できない。切歯は2度の咬耗を示す。第1大臼歯は歯冠が破損していて観察できないが、第2大臼歯にはほとんど咬耗の痕が認められない。

右側での下顎体高は推定で約32mm、上顎右第1切歯の近遠心径は8.6mm、下顎右第2大臼歯の近遠心径および頬舌径はそれぞれ11.6mmと10.5mmである。これらの計測値はいずれも中世日本人男性の平均値に近いか、またはやや上回る。

四肢骨のうち①は上腕骨と考えられるが、側別は判断できない。残存する骨幹の長さから見て成人男性の可能性が高い。この上腕骨の近位部分の両側に見られる断片骨は鎖骨と肩甲骨の一部と想像される。②は橈骨の一部かと思われるが確かではない。③は上腕骨か尺骨の一部であろう。④と⑤は左右の大腿骨か、または左右いずれかの大脛骨と脛骨の骨幹部のようである。⑥の下にも長骨の残片が見られるので、いずれにせよ膝を強く屈し、大腿を上体とほぼ直角に曲げた姿勢であったと思われる。残念ながら身長の推定は不可能である。

歯の咬耗の状態から年齢区分は壮年ないし熟年、性別は後頭鱗の形態、歯の大きさ、上腕骨骨幹の長さから判断して男性と推定される。



土坑墓内人骨出土状況図

特稿

平田前田遺跡出土木製品の樹種

平田前田遺跡から出土した木製品12点の樹種同定を行なった。木製品は、漆椀4点、曲物2点、下駄2点、柱材1点、用途不明品3点で、判明した樹種は、イヌマキ、モミ、スギ、ヒノキ、ブナ、エノキ、ケヤキ、トチノキの8種である。同定結果を表1に示す。

1 試料および方法

本製品の樹種同定にあたっては、それぞれの製品から樹種同定用のプレパラートを作成し、同定用の標本とした。標本の作製は、木製品から直接、両刃カミソリを用いて木口断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、それをガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して行なった。同定はこれらの標本を生物顕微鏡によって40～400倍で観察し、現生標本と比較しながら行なった。標本はすべて当研究所清水整理事務所で保管している。以下に樹種の同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

2 同定結果

1、イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞の3種類の構成からなる。

早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪は目立たなく均質な材でイヌガヤとよく似ている。樹脂細胞は年輪内に均一に散在する。仮道管壁にはイヌガヤと異なりらせん肥厚はみられない。分野壁孔はスギヘヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列で、細胞高は1～20である。

以上の形質によりマキ科のイヌマキ属と同定した。

イヌマキ属は出土材として建築材、器具などに使用されることが多い。また、県内出土の丸木舟のほとんどはイヌマキ属である。

2、モミ属 *Abies* マツ科

仮道管および放射柔細胞の2種類の構成からなる。

早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、年輪は明瞭である。放射組織は放射柔細胞のみからなり、上下縁辺部には不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は肥厚し、じゅず状末端壁がある。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個存在する。放射組織は普通単列であるが、ときに部分的に2列になることがある。細胞高は1～30である。

以上の形質によりモミ属と同定した。

モミ属は割裂性がよく加工も容易であるが、割れやすく狂いがでて保存性が低く軽軟である。出土材としてはスギ材と似ているが、スギ材よりも色が明るく劣化が進んでいるものが多い。県内出土では橋によく使用される。

3、スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞の3種類の構成からなる。

早材から晩材への移行はやや急で晩材部の幅がやや広く、年輪は明瞭である。樹脂細胞は晩材部付近にやや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞の内容物は暗褐色を呈することが多く、樹脂細胞の水平壁は平滑で薄いものが多い。分野壁孔は梢円形の大型で、開孔部がほぼ水平に開いた厚いレンズ状をし

たスギ型で通常1分野に2個存在する。放射組織は単列で、細胞高は1~10である。

以上の形質によりスギと同定した。

スギは県内で最も多く出土する材であり、様々な器種に利用されるが、大井川以西では出土量が激減する。

4、ヒノキ *Chamaecyparis* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞の3種類の構成からなる。

早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状を呈する。樹脂細胞の内容物は赤褐色を呈することが多く、樹脂細胞の水平壁は通常肥厚し、結節状となることが多い。分野壁孔は円形で、開孔部は幅の狭いレンズ状で垂直~斜めに開いたトウヒ~ヒノキ型で、通常1分野に2個存在する。細胞組織は1~15細胞高で単列であるが、ときに部分的に2列になることがある。

以上の形質によりヒノキと同定した。

ヒノキは日本産の針葉樹ではコウヤマキについて優秀な木材で、あらゆる用途に使用される。

5、ブナ *Fagus crenata* Blume ブナ科

道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類の構成からなる。

95~100 μm の小型でやや角張った道管が、単独あるいは2~3個複合して、密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径および数が緩やかに減少する。柔細胞は単独に散在するものと短接線状に配列するものがある。

道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔からなる。放射組織はほとんど同性で平伏細胞からなるが、上下縁辺部に方形細胞がときにみられる。放射組織には単列のもの、2~数列のもの、広放射組織の3種類がある。広放射組織は、肉眼的には板目面で1~3mmの紡錘形の斑点としてはっきり認められる。

以上の形質によりブナと同定した。

ブナは堅硬、緻密で韌性があるが保存性は低い。出土材としては漆椀の木地によく用いられる。

6、エノキ属 *Celtis* sp. ニレ科

道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類の構成からなる。

165~170 μm の大道管が年輪はじめに1~数列ならび、次第に径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって接線状、斜線状の塊をつくる環孔材である。

道管の穿孔は単穿孔で、小道管にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性でほとんどが平伏細胞であるが、上下縁辺部に方形細胞があり、ときにシュウ酸石灰の結晶を含有する。放射組織は1~2細胞幅のものから8~10細胞幅のものがあり紡錘形を呈し、大型の放射組織では周囲を軸方向に長くやや大型の鞘細胞が取り囲む。

以上の形質によりエノキ属と同定した。

エノキ属は出土材として建築材、漆器の木地などに利用される。

7、ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類の構成からなる。

250~350 μm の大型の大道管が年輪はじめに1~2列ならび、急に径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって接線状、斜線状の塊をつくる環孔材である。

道管の穿孔は単穿孔で、小道管にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性でほとんどが平伏細胞であるが、上下縁辺部に方形細胞があり、ときに大型のシュウ酸石灰の結晶を含有する。放射組織は6~7細胞幅のほぼ大きさが一様で、細胞高もあまり高くないものが多い。

大道管の列数が少ないと、大型の結晶細胞を持つこと、鞘細胞が無いことなどからエノキ属と区別

できる。

以上の形質によりケヤキと同定した。

ケヤキは材質に優れ、木目も美しく、加工も容易であることから出土材として様々な用途に用いられる。とくに建築材、軋物、高壙、漆椀木地などに多用される。

8. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類の構成からなる。

50~75 μm のやや小型の道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合する散孔材である。道管の大きさ、数ともに年輪の中央部で大きく、年輪界付近では比較的小さい傾向がある。

道管の穿孔は半穿孔である。道管の側壁には交互窓孔がみられ、らせん肥厚がある。放射組織は単列で、すべて大きさが等しい平伏細胞からなる。ほとんどは10細胞高以下であり、階階状に規則正しく配列しているのがこの樹種の大きな特徴である。肉眼で見るとこの規則的な階階状配列がリップルマークとして見られる。

以上の形質によりトチノキと同定した。

トチノキは歓らかく緻密であるが耐朽、保存性が低い。出土材として漆椀木地によく用いられる。

表1 平田前田遺跡出土木材樹種同定結果

No.	標本番号	遺物名	登録No.	樹種
1	5535	漆椀	W-2	ブナ <i>Fagus crenata</i> Blume
2	5536	漆椀	W-9	トチノキ <i>Aesculus turbinata</i> Blume
3	5539	曲物・側板	W-12	ヒノキ <i>Chamaecyparis (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.</i>
4	5541	下駄	W-16	イヌマキ属 <i>Podocarpus</i>
5	5542	用途不明品	W-17	モミ属 <i>Abies</i>
6	5540	用途不明品	W-13	モミ属 <i>Abies</i>
7	5543	用途不明品	W-19	ヒノキ <i>Chamaecyparis (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.</i>
8	5534	下駄	W-3	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Thunb.
9	5537	漆椀	W-10	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Thunb.
10	5545	漆椀	W-21	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Thunb.
11	5544	曲物・底板	W-20	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> (Linn.f.) D.Don
12	5546	柱根	W-22	エノキ属 <i>Celtis</i> sp.

№1~12は本文第5表「1-1区出土木製品計測表」の番号に準拠

参考文献

鳥地 謙・伊東隆夫：図説木材組織 地球社 (1982)

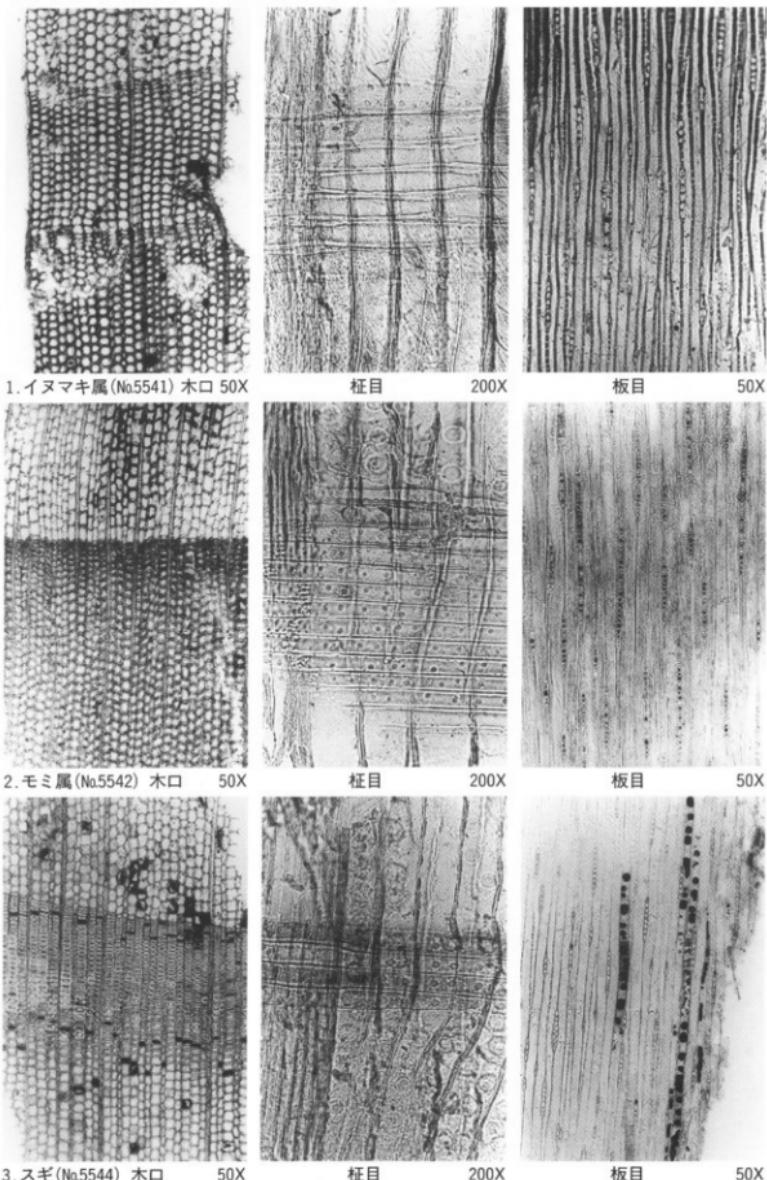
鳥地 謙・伊東隆夫：日本の遺跡出土木製品総覧 雄山閣出版 (1988)

鈴木三男：静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種 静岡県埋蔵文化財調査研究所「角江遺跡II」(1996)

山内 文：宮下遺跡出土の木製品の樹種について 静岡県埋蔵文化財調査研究所「宮下遺跡」(1991)

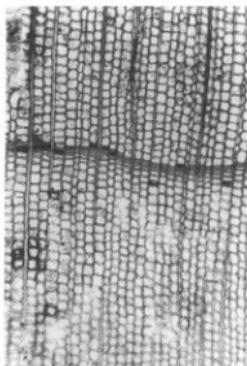
平田前田遺跡出土木製品顕微鏡写真

図版 1

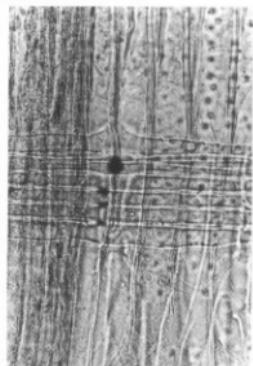


平田前田遺跡出土木製品顕微鏡写真

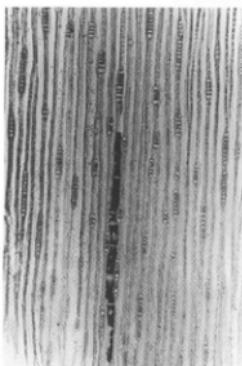
図版2



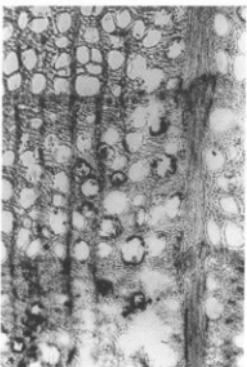
4. ヒノキ(No.5538) 木口 50X



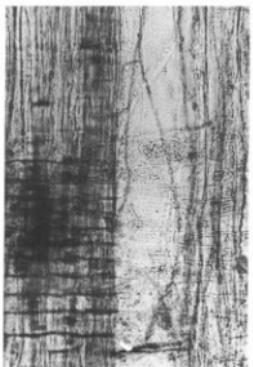
栓目 200X



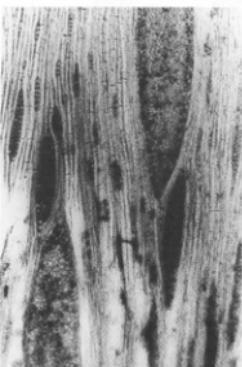
板目 50X



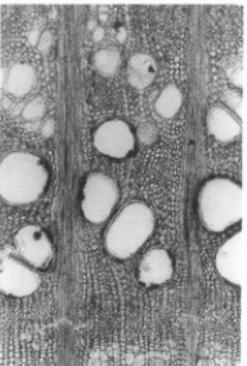
5. ブナ(No.5535) 木口 50X



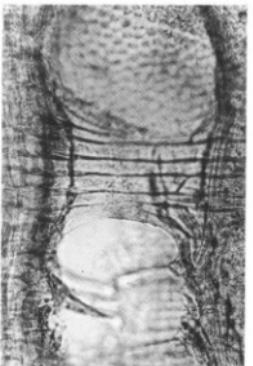
栓目 200X



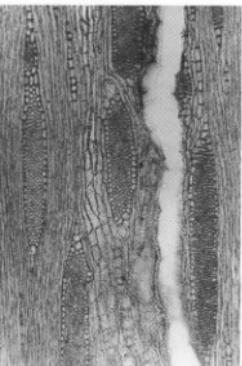
板目 50X



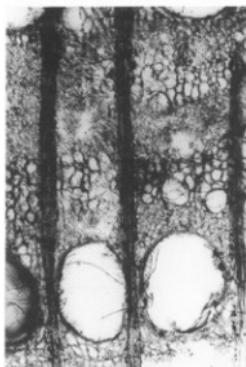
6. エノキ属(No.5546) 木口 50X



栓目 200X



板目 50X



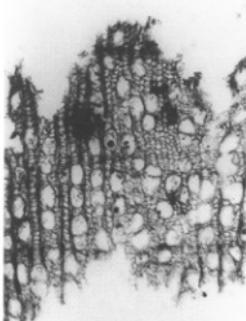
7. ケヤキ (No.5534) 木口 50X



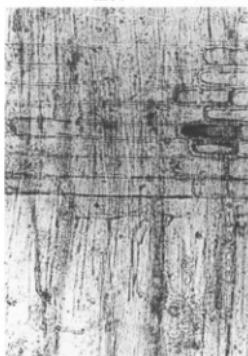
柱目 200X



板目 50X



8. トチノキ (No.5536) 木口 50X

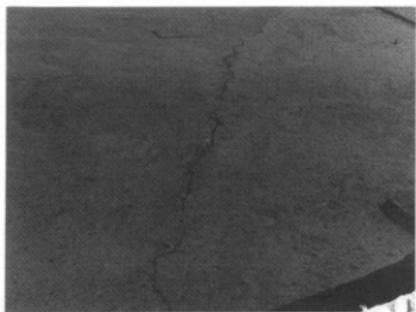


柱目 200X

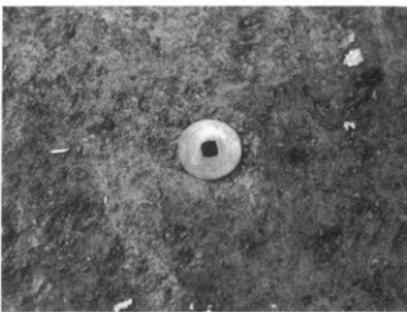


板目 50X

写 真 図 版



1-1区第1遺構面 桁列



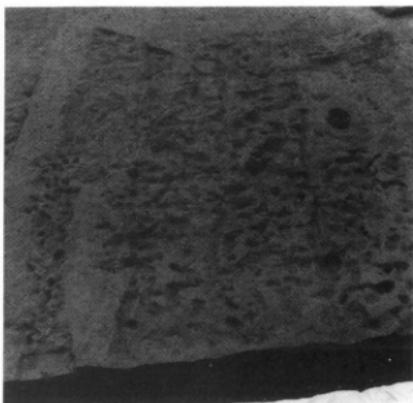
1-1区第1遺構面 銭貨出土状況



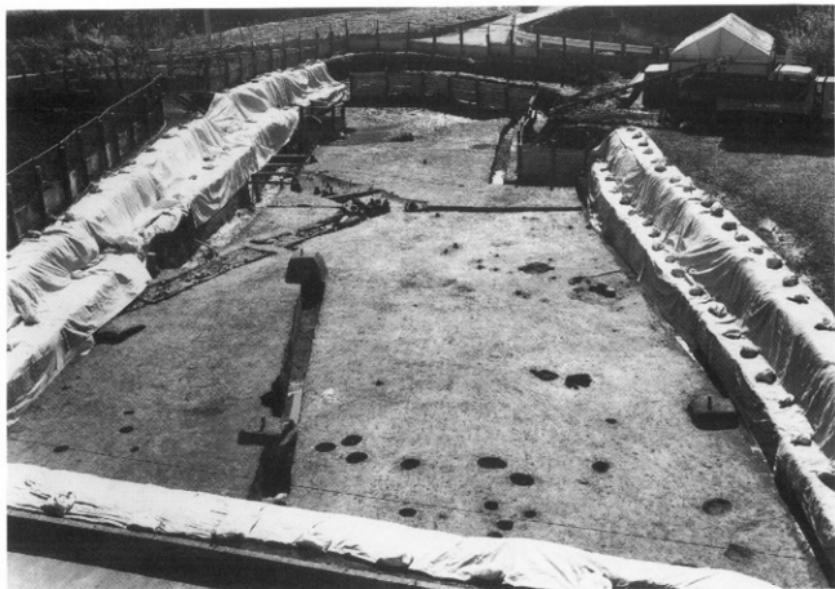
1-1区第1遺構面 検出遺構全景<南より>



1-1区第1遺構面 耕作痕跡<南西より>



1-1区第1遺構面 耕作痕跡<北西より>



1-1区第2遺構面 検出遺構全景<南より>



1-1区第2遺構面 集石土坑 S F 11038



1-1区第2遺構面 竪穴状遺構SX11039・S X 11041



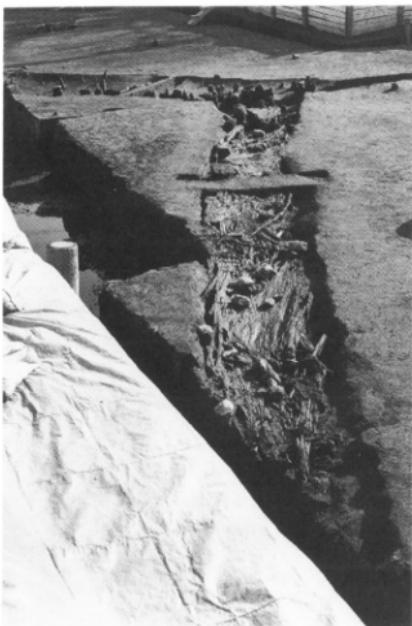
1-1区第2遺構面 竪穴状遺構SX11039遺物出土状況
(下駄)



1-1区第2遺構面 旧河道内動物遺体出土状況



1-1区第2遺構面 溝状遺構SD11035<北東より>



1-1区第2遺構面 溝状遺構SD11035（暗渠部分）
<北より>



1-1区第2遺構面 溝状遺構SD11035遺物出土状況(1)
(曲物)



1-1区第2遺構面 溝状遺構SD11035遺物出土状況(2)
(用途不明木製品)



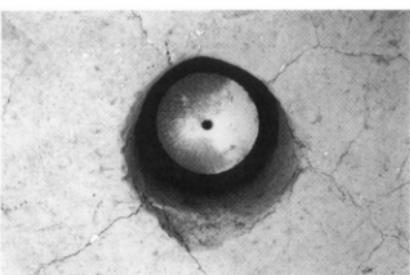
1-1区第3遺構面 検出遺構全景<南より>



1-1区第3遺構面 検出遺構<南西より>



1-1区第3遺構面 土坑SF11049遺物出土状況(羽釜)



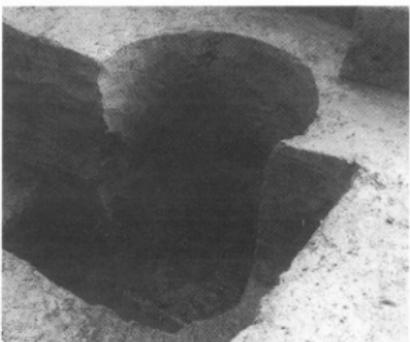
1-1区第3遺構面 ピットSP11065遺物出土状況(石臼)



1-2区第1遺構面 検出遺構全景<東より>



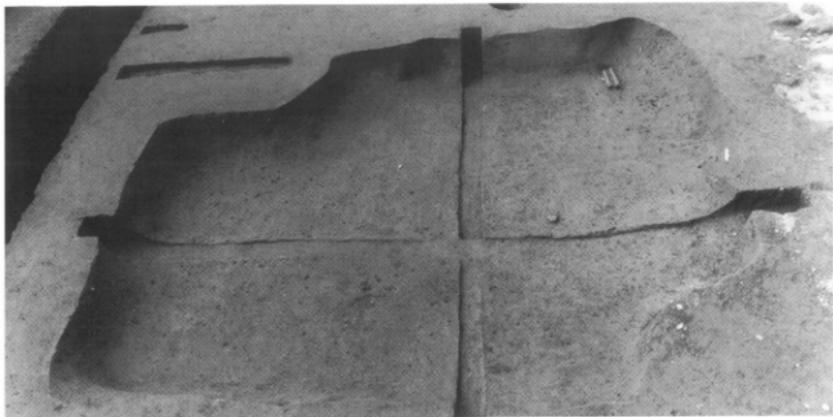
1-2区第1遺構面 土坑SF12014遺物出土状況(丸太材)



1-2区第1遺構面 土坑SF12014完掘状況



1-2区第1遺構面 不明遺構 S X 12010



1-2区第1遺構面 竪穴状遺構SX12011



1-2区第2遺構面 検出遺構全景<東より>



1-2区第2遺構面 遺物出土状況(1)



1-2区第2遺構面 遺物出土状況(2)



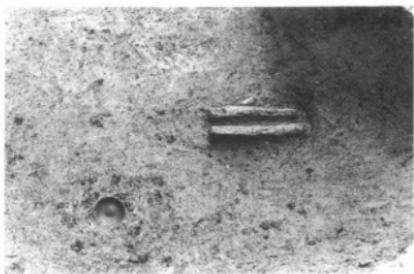
1-2区第2遺構面 土坑墓SX12034<南東より>



1-2区第2遺構面 土坑墓SX12034人骨出土状況



1-2区第2遺構面 土坑墓SX12034出土人骨（頭骨）



1-2区第2遺構面 土坑墓SX12034遺物出土状況
(かわらけ)



2-1区 検出遺構全景<真上上空より>



2-1区 溝状遺構SD21001<北西より>



2-1区 溝状遺構SD21001覆土堆積状況



2-1区 溝状遺構SD21001遺物出土状況(1)



2-1区 溝状遺構SD21001遺物出土状況(2)



2-1区 土坑SF21047



2-1区 旧河道検出状況



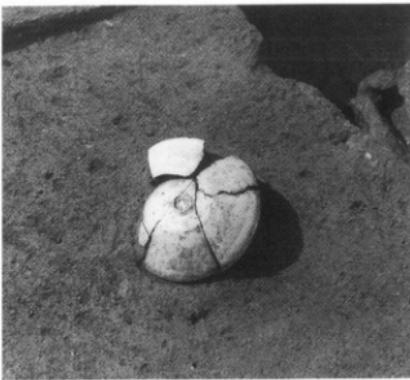
2-1区 洪水痕跡検出状況①



2-1区 洪水痕跡検出状況②



2-1区 遺物出土状況①



2-1区 遺物出土状況②



2-2区 全景



2-2区 第1トレンチ内土層断面

2-2区 防空壕遠景<南より>



2-2区 防空壕近景<南西より>



2



1



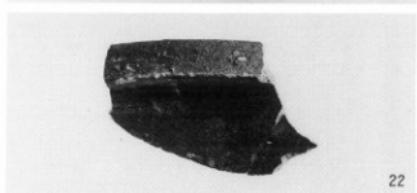
6



9



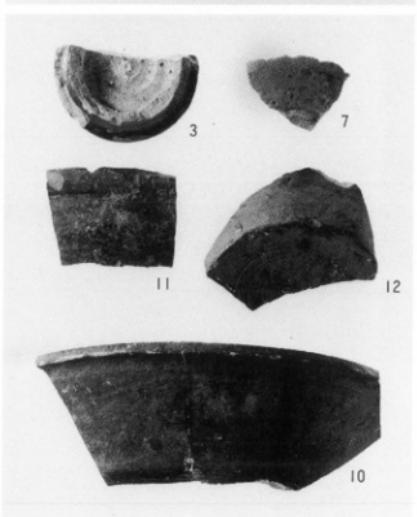
14



22



15



12



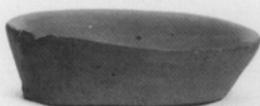
8



49



4



5



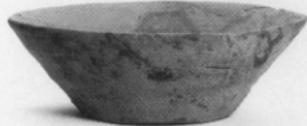
13



16



17



18



26



23



27



19



24



28



25



20



21



34



29



35

出土土器(2)



32



33



41



43



42



44

出土土器(3)



36



40



37



39



38



47



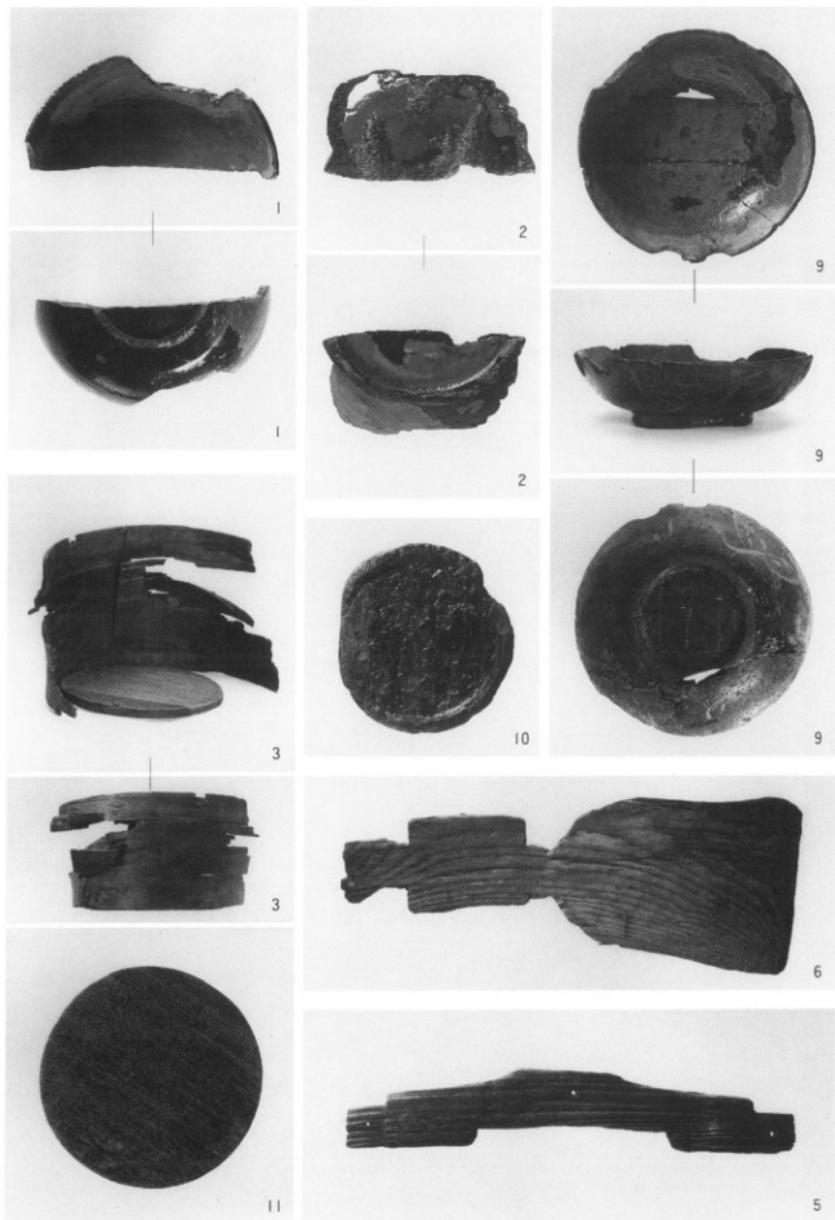
45



46



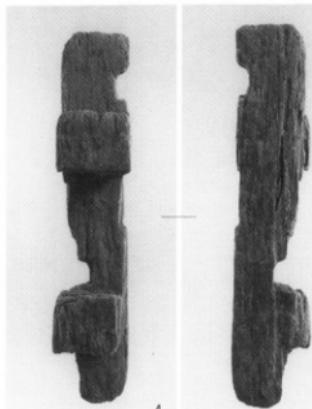
48



出土木製品(1)



7



4

4

4



8



12



12

出土木製品(2)



13

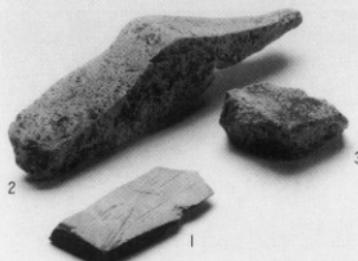


14

31



30



3



4

出土銭貨・土錘・キセル・砥石・石臼

報告書抄録

ふりがな	ひらたまえだいせき
書名	平田前田遺跡
副書名	平成8年度一級河川境川治水特別対策(地域開発関連整備)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第103集
編著者名	篠宮晋士(加藤芳朗・山口敏・西尾太加二)
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422 静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261(代)
発行年月日	西暦1998年3月16日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
			北緯	東経			
平田前田	静岡県三島市 松木	22206	35°05'36"	138°55'03"	1996.10.01 1997.03.31	4,012m ²	境川治水特別対策工事に伴う事前調査

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
				主な遺構	主な遺物	
平田前田	集落	弥生時代中期~古墳時代後期	溝状遺構2条 ピット群 土坑3基	弥生式土器、土師器	集落の環濠の可能性を持つ溝状遺構の検出	
		室町時代後半~江戸時代初頭	溝状遺構4条 土坑墓1基 ピット群 土坑9基 集石土坑1基 竪穴状遺構3基	中・近世陶磁器、土師質 土器 木製品(容器・焚身具・建築材) 石製品(砥石・石臼) 金属製品(キセル) 土製品(土鍋) 錢貨		
		昭和時代	防空壕1基			

現地発掘調査には、次の方々の協力を得た。(順不同・敬称略)

高木 龍雄	岸本 義明	高山 亀明	渡辺 美行	荻山市太郎	杉山 佳久
鈴木 八郎	山内 修平	三浦 勇一	野村 潤	外川 仁之	鈴木 学
鍼山 茂夫	鍼山 英人	三枝 久雄	佐藤 二六	菊池 豊	越山 調雄
小森 修	天野由紀子	石井千栄子	柴田美佐子	杉山よ志恵	高橋 敏子
高橋 敏江	原 裕子	原 麗子	吉田こはる	吉満みさ江	

資料整理作業には、次の方々の協力を得た。(順不同・敬称略)

河西 淑乃 望月 節子 跡部麻由子 杉山すず代(写真撮影)

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第103集

平田前田遺跡

平成8年度 一級河川堀川治水特別対策(地域開発開闢整備)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月16日

編集発行 財団法人

静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡市谷田23番20号

TEL 054-262-4261(代)

FAX 054-262-4266

印 刷 所 黒船印刷株式会社

静岡市葵呂二丁目4番25号

TEL 054-286-0236(代)